

---

# 幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

龍賀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

### 【著者名】

N4434U

### 【作者名】

龍賀

### 【あらすじ】

なのははの世界から他の神によって東方の世界に飛ばされた龍斗。この先に待っているのははたして何か。

プロローグ あなたが正しいなら、俺で勝つてみせらるー。(前書き)

今回から東方を始めました！

更新は少し遅めですが無事完結できるように頑張ります！  
タイトルは好きなキャラの名言を入れてくつもりです！

プロローグ あなたが正しいっていつのならー俺で勝つてみせろー

あの神以外のクズみたいな神のせいでの處かに飛ばされたみたいで  
ここが何處か分からぬ。

「此處が何處か分かるか?」

『いえ、あの・・・マスター?』

「何だ?」

『体が縮んできますよ?』

「何?」

どうやら今の俺は19歳の姿ではなく12歳から14歳くらいの状態らしい。

無理に世界を超えてせられたのだからこれで済んでマシなのかもしない。

「とりあえず動くぞ、何時までも此處にいても変わらない」

『そうですね』

「あら?もう行くのかしら?・もつ少し此處にいてくださいな

「誰だ?」

そう呼びかけるとすぐ後ろから奇妙な目が大量に見える隙間が出てきた。

まさか・・・。

「私はハ雲 紫よ、あなたは?」 「俺は森 龍斗だ」

「あなた・・・人間じゃないのね」

「ああ、一応吸血鬼だ」

一瞬でばれるとはな。

まあ境界を見たんだろ？

「で？ 何か用か？」

「ええ、何故此処にいるのかしら？（急に反応があつたから急いで来たのよ・・・そのせいでまだ眠いわ）」

「それは悪かつたな、俺も好きで此処に来たのではないのでな

「どうこうとかしら？」

男の娘（笑）説明中・・・

何故だろ？ 殺意が芽生えた。

「どうかしたの？」

「いや、それはそつと案内してくれないか？何処か寝る場所があれば完璧だ」

「ええ、良じわよ、案内するわ

「感謝する」

「いいわよ、それよりも自分の心配をしなさい、此処では気を抜くと死ぬわよ？」

「フツ、大丈夫だ、少なくともモニラの雑魚妖怪には負けはしないわ」

まだ同化してないから上位の妖怪には苦戦するだろうが。  
まあ同化はもう始めてるがな。  
今は8%くらいだ。

「それで？ 何処に案内してくれるんだ？」

「博靈神社よ」

「何故神社なんだ？」

まあ予測はつぐがな。

「そつちが近いからよ、今日はそこので寝てくれるかしら~。」

「別に構わない、文句を言つ立場ではないのでな」

「そう、助かるわ、じゃあ此処の事を説明しながら行くわよ」

「分かった」

少女（笑）説明中……『やああああああ（ペチコーン

「無茶しやがつて……」

「どうかしたのかしら~？」

「イエナンデモナイテス

『す』く怖いですね』

「そうだな」

「何か？」

「『イエ、ナンテモ』」

そんなことがありながらも無事、神社についた。

「靈夢？ごめんかしら」

「何よ……」

「ちょっとこの子を今日だけでもいいから泊めてくれるかしら~」

「何で私がそんなこと……」

そういうえば此処は神社だったな。

金もあるし参拝するか。

そう思い財布を取り出した。

中には千円以下が無いのでとりあえず五千円を入れた。

「（どうかあいつらが無事でありますよ）」

「これでも泊めないのかしら」

「是非泊めさせてもらいます……」

「ん？」

『変わり身早いですね』

何故か無事に泊まる事ができるようだ。  
よかつた。これで野宿しなくてすむ。

「俺は森 龍斗だ、よろしく頼む」

「私は博靈 靈夢よ、こいつはよろしく頼むわ」

こうして博靈 靈夢と出合つた。

これから先に何が起こるかわからないが……今の全力で当たるのみだ。

そう決意していると、

「ようこそ幻想郷へ、歓迎しますわ」

「歓迎……ね」

「ええ、幻想郷は何もかもを受け入れますわ、それはとても残酷な事ですけど」

こうして俺の幻想郷ライフが始まった。

プロローグ あなたが正しいこの一つのなら…俺で勝つてみせらー（後書き）

後書き「一ナーナー！」

龍「無謀にも東方に挑戦することにした作者であった」

変なナレーションはやめてよね！？

龍「まああつちよつは遅くなるかもしかんが…・・・頑張らせるので

読んでくれると嬉しい」

次回の更新予定は木曜か金曜予定です！！

龍「まあ気楽に待ってくれ、頑張るのでな」

ではでは…

龍「ではな」

## 第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ（前書き）

今日は遅くなつた上に短いです・・・。  
それでもよければどうぞーーー！

# 第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ

幻想郷に来て数日。

今日はスペルカードを作る事にした。  
じゃないと不便だからな。

「で? 何か思いついたの?」

「まあ少しはな」

「じゃあ弾幕ごっこだぜ!」

「ああ、構わない」

弾幕ごっこに誘つてきたのは最近知り合つた霧雨 魔理沙である。  
とりあえずスペルカード(以後スペカ)は4枚ほど作ったから試してみるか。

「じゃあスペカは4枚までで

「オッケーだぜ」

「此処で暴れないでくれる?」

「分かっている、少し離れてからやるさ」

「ならいいわ

一応結界張つておくが。

「じゃあ行くぜ!」

「来い」

こつして初めての弾幕ごっこが始まった。

「うわちから行くぜ!」

——魔符「スダーダストレヴァリエ」——

まずは小手調べか?なら、

——秘剣「燕返し」——

日本刀に変化したクロスで同時に3つの斬撃を放つ。  
それだけで自分に当たる弾幕を潰す。

「やるなあ～じゃあこれないだ！」

——星符「ドラゴンメテオ」——

すると隕石みたいに弾幕が降つて来た。  
これなら、

——光盾「熾天<sup>ロード</sup>覆<sup>アイアス</sup>う七つの円環」——

熾天<sup>ロード</sup>覆<sup>アイアス</sup>う七つの円環を出して防ぐ。

一枚割れたな。やはりスペカにするトランクがかなり下がるらしい。

「弾幕はパワーだぜ！」

——恋符「マスター・スパーク」——

田の前に白い極太レーザーが発射された。  
すごいな・・・ならば、

——魔砲「ファンтомブレイク」——

黒い極太レーザーを放つ。

そしてお互いの攻撃は相殺された。

「お互いにラストだ・・・悔いの無いように全力で来い」

「勿論だぜ！」

そういういお互いに構えた。

「行くぜ！」

「来い！」

——魔砲「ファイナルスパーク」——

目の前にさっきのマスタースパークよりも太いレーザーが発射された。

なら俺もこれで行くか。

——幻想「尊く儂い理想郷」——

相手のスペルを飲み込む。

「なっ！？そりゃ反則だろ！？」

「まったくね」

む、靈夢まで言つか。

とまあ弾幕ごつこは俺の勝ちらしい。

なんでも魔理沙は自分のあのスペルを使って勝てなければ負けだと  
の事。

「律儀だな」

「でも次は勝つぜ！」

「ああ、次も全力で相手しよう！」

まだスペルは作る気だしな。  
そういうえば、

「靈夢」

「何？」

「まだ新品のスペカあるか？一枚でいいんだが」

「あるわよ？」

「なら持つてきてくれ」

「分かったわ」

何をする気かつて？

勿論スペカの複製。

空想具現化って便利だよね。

「持つてきたわよ」

「ありがとう」

「いいわよ別に・・・お賽銭入れてもらつたり、ご飯作ってくれるん  
だからこれくらい構わないわ」

「そうか」

さて、さつそく複製するか。

「・・・」

「増えた？」

「そうみたいだな」

「ああ、これでカードに困る」とはないな

色々作りたいスペルは沢山あるからな。

オリジナルとか宝具とか。

勿論鬼巫女のスペルとか。

必然「キングクリムゾン」から永遠「レクイエム」までな。

オリジナルは今一つ思いついたから作ってみた。

「うん？ もう浮かんでる・・・矛盾「全てを否定し肯定する世界」?  
?どんな感じのスペルなんだ？」

「それは秘密だ、まあ弾幕」<sup>ジョーク</sup>「をやってれば見る事もあるだろう  
さ」

まあ切り札みたいなものだが。  
ジョーク

使わないようにはしたいな。

このスペルは作った本人だから分かる。

これは加減が効かない・・・本気で使えば間違いなく此処の住人は  
死ぬ。

「さて、もう夕方だが・・・魔理沙はまだいるのか？」

「勿論だぜ！ 夕食をご馳走になるしな！」

「・・・はあゝそんな事だらうと思つたわ、龍斗、悪いけど手伝つ  
てくれる？」

「別に構わない、誰かと一緒に料理を作るのは楽しいからな」

昔の事を思い出してしまつた・・・この光景は。

妹がいて姉がいて・・・父がいて母がいる。

そんな普通の家庭だった頃を・・・。

「・・・そう、なら早く作るわよ（そんな悲しそうな顔で言わない  
でよ・・・私が悪いみたいじゃない）」

「？」

「何でも無いわよ」

「そりゃ」

「で？ 今日は何を作るんだ？」

「魔理沙……」

「な、何だよ」

「空氣を読みなさい」

確かに少しだけ暗くなつてたが……だからこそ魔理沙はこうしたんだろうな。

「俺も腹が減つたからな……早く作つて食べようか」

「龍斗まで……まあいいわ、今日は鍋よ、だから材料を切るのを手伝ってくれる？」

「了解した、魔理沙は配膳をしてくれ」

「了解だぜ！」

夕食を食べた後、魔理沙は帰つていった。

靈夢もすぐ寝るみたいだから俺はもう少しだけスペカを考えてみるか。

『で？ どれくらいつくるのですか？』

「さてね、まあ沢山あつて困るものでもないし、まあ程々にしておくれ」

4人分な。

(分かつてんじゃねーか)  
(ええ、助かります)  
(よし！ いっぱい考えようっと)

・・・面倒な事になりそうだ。

というより寝る事ができるだらうか・・・まあいざとなれば別荘を出すか。

そして全員が満足した数のスペルを作るのに別荘内で5日かかったのは予想外だつた。

そのせいで睡眠時間が2時間しかなかつた。

「くそつ・・・眠い・・・」

『大丈夫ですか？マスター』

「ああ、何とかな」

『今日はどうするのですか？』

「現状況で挨拶できるやつらに挨拶に行くぞ」

『そうですか』

そして俺は他のやつらに挨拶をするために向かつた。

## 第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ（後書き）

後書き「一ナーナー！」

龍「適当だな」

違つよ！全力だよ！

龍「余計にたちが悪い」

うつ！

龍「まあ」こんなやつはほつておいて感謝「一ナーナーだな、わざわざや  
れ」

い、イエッサー！！コタ様、夜神様、雨季様、八雲 薫様、メガネ  
様、感想ありがとうございます！！

龍「次回には日曜には更新させる、だから待つてくれると嬉しい  
い」

では！また次回・・・また日常ですけどね！

龍「・・・ではな」

## 第2話 選択肢なんてのは他人に『えられるのではなく自ら作り出していくもの

この台詞に共感を得た龍賀です。この台詞言つたの蝶 変態ですかね！

今回から少しの間挨拶に出かけます！龍斗が。  
なので？気楽にどうぞ！  
いつも通り短いですが。

## 第2話 選択肢なんてのは他人に『えらぶるのではなく自ら作り出していくもの

今日から他の場所に挨拶しに行く事を靈夢に言つてから向かつ事にした。

靈夢は、

「あんたなら大丈夫でしょ、行つて来なさい、おちと帰つてくるのよ?」

と優しく送り出してくれた。

わざわざ出かける事にした俺は、

「何処に向かうか・・・だが」

『とりあえずは面倒なところからでいいんじゃないでしょうか』

「それもそつか

なら・・・太陽の畠に向かうか。

戦闘は必須だろうが。

『ですよね、ある程度説明されていますが間違いなくそこがややこしいですね、風見幽香でしたつけ?』

「ああ、ある意味戦闘狂らしいからな」

『ああ、マスターと同類ですね』

「だれが戦闘狂か」

『マスターですよ、自覚なかつたんですか?』

「・・・本当か?」

『嘘を言つても意味はないですよ』

確かに・・・まあいい。

「さつさと向かうぞ」

『話をそらしましたね?』

「文句でも?」

『いえ!無いです!...』

「なら行くぞ」

『イエッサー!...』

無駄話をしながら俺は太陽の烟に向かつた。

「[口]が太陽の烟か・・・向日葵が綺麗だな・・・」

『そうですね、よほど花が好きなのでしょうね』

「だろうな、じゃないとここまで綺麗に咲かすことはできないだろうしな」

「あら、何処の誰かしら」

「む?」

花を見ていると田の前に女性が現れた。  
此処にいるってことは・・・。

「あなたが風見 幽香でいいのか?」

「あら、私の名前を知ってるのね、なら何故逃げないのかしら」

「いや、挨拶をしていてな、最初はここにしようともかくただけだ」  
「物好きね、普通のやつならここには来ないでしょうに」

「生憎普通ではないからな」

「あらそう、なら少しは楽しめるのかしら」

やはり戦いになるか。

「ああ、今の俺で出来る全力で相手をしよう、なら満足できるかも

な

「フフ、面白いわね、じゃあ始めましょうか」

「ああ、始めよ！」

「「楽しい楽しい死合いで…」」

こうしてスペルカードを使つていても命の保障がまったくない勝負が始まった。

「行くわよ。」

そう言つと風見 幽香は巻を思いつきつ振りかざしてきた。

「ぐ、重いな」

「あら、女性には失礼じゃないかしら」

「クク、思つてもいい事言つな」

「あら、失礼ね！」

「つおつ！？」

さらに重みが増したか。  
これ以上は面倒だな。

「はあつー。」

「あら？」

「たくつ、妖怪はみんなこんなに馬鹿力なのか？」

「さあ？ そうかもしれないし違つかもしれないわね」

「はあー、まだ完全に同化はできないから精々20%か30%くらいか」

「？」

まあそれでも何とか勝てる・・・かな。

「いぐべきー。」

——模倣「無想封印」——

「あの巫女のスペル？でもこれくらいじゃあ・・・」

そう言いながら簡単に避ける。

「喰らわないわよ？」

「それもそうか」

「この程度なのかしら？」

「いや、まだまだいけるわ」

「ならもう少し私を楽しませなさい。」

そう言いながらさりに近づき攻撃を繰り出していく。  
つづづく思つんだが・・・・、

「これスペルカードいるのか？」

「それを言つたらおしまじじゃない」

「それもそうか、なら」

——秘剣「燕返し」——

同時に3つの斬撃を繰り出す。  
だが、

「あぶないわね」

傘で防がれた、えらく丈夫だな。

「余裕だな」

「結構キツイわよ、何よ同時で3撃なんて・・・何かの能力かしら」

「さあな、言うとでも?」

「それもそうね、今は楽しめればそれでいいわ!」

そういうながらさりに攻撃をしてきた。

「やはり大妖怪は格が違うな」

「当たり前じゃない!」

そこらの妖怪なら5%もいらなかつたのだが・・・15%に引き上げるか。

「ギアを上げるぞ」

「?」

「いいか?今から攻撃をするからな?不意打ち扱いはいやだからな  
「来なさい!」

――剣技「無極四式・零」――

最速の居合いで喰らわせる。

「ぐう――」

「まだまだ行くぞ」

――剣技「無極一式・牙」――

「うう!」

「どうした?もう終わりか?」

「なめないでくれる?」こんなので終わる訳ないでしょー」

——起源「マスタースパーク」——

妖力をレーザーに変え、発射してきた。

「クク、なら礼儀に応じてこれを使おつ

——変化「鬼巫女——easy——」

スペルの効果によって変わる。

「ハハハ!コレテ終ワリ!—!」

——必然「キングクリムゾン」——

過程をすつ飛ばし結果だけが残る。

「・・・私の負けね」

「ふう・・・氣は済んだか?」

「ええ、あなたの名前は?」

「森龍斗だ、これからいつまでかは分からぬが幻想郷に住む、  
よろしく頼む」

「ええ、また戦うわよ

「・・・まあいいだろ?」

「必ず勝つてみせるわ、覚悟しなさい」

「フツ、ああ、だが俺も簡単には負けてはやれないからな

誓つたからな。

「それでいいのよ、だからこそ倒す意味があるの、だから私があなたを倒すまで負けるのは許さないから」

「クク、ああ、元々負けるつもりはねえよ、当然な」

さて、もつ夜か、今日は戻つてから明日別の場所に向かうか。

「次は何時来るのかしら」

「多分挨拶が全て終わつてからだからな・・・大分後だろ?」

「そう、まあいいわ、次に会えるのを楽しみにしておくわ」

「アンタこそ物好きだな」

「そうしたのは誰かしら」

「?」

「フフ、まあいいわ、また会いましょう?」

「そうだな、またな」

こうして風見 幽香との挨拶は終わった。

ついでに言つと幽香とは話が合つたので「こんどリグルとかいづやつと会う事にする。

中々面白いやつらしいので楽しみだ。

『（ドリ）ですね、両方・・・リグルとかいう人?・・・強く生きてください』

「クク、楽しみだ」

余談だが、靈夢に太陽の畑に行つたといつと怒られた。  
なんでも「無茶しないでよ!」だそうだ。

幽香に勝つたと言つと、「ああ、やつぱり反則なのね」と呟いていた。

失礼な、誰が反則か。

第2話 選択肢なんてのは他人に与えられるのではなく自ら作り出していくもの

後書き「一ナーナー！」

龍「今日は太陽の畑に行つただけだな」

**戦闘もしたからね！？**

龍一 まあどうでもいいから

龍「まずは感謝」「一ナード」

夜神様、  
メガネ様、  
感想ありがとうございます！！

龍 次回はおそらくだが火曜か水曜だ」

次は何処に行くか楽しみにしててください！といつてもその場のノリで書いてるので完全にランダムですがね！

龍一「まあもし何処か行つてほし」とHNがあれは感想にでも書いてくれ、多分そこになるから」

ひどつ！？そこになる可能性高いけども！

龍「はあ～どうでもいい

・・・では！また次回！

龍「無理やり×たな、まあいいか、ではな」

### 第3話 オレは『納得』したいだけだ！『納得』は全てに優先するボクシ――でな

今回も中途半端で雑です。

口調があつて いるか分から ない・・・間違 いがあつたひと言つて下さ

い！

直しますので！

第7部も面白いです！

### 第3話 オレは『納得』したいだけだ！『納得』は全てに優先するぜッ！…でな

昨日は太陽の烟に行つて、幽香と戦つた。  
さて、今日はどこに向かつか・・・。

『今日は人里に行つてみては？』  
「そうだな、その次に妖怪の山にでもいけばいいか」  
『ではさつそく向かいましょっ』

「ああ」

人里なら戦いにはならんだろうしな。

そう思つていた時期が俺にもあつた。

「あなたは食べてもいい人類？」  
「いや、俺は一応人間ではなく吸血鬼なんだが」「そーなのかー」  
「調子が狂うな」

こんな小さい少女が妖怪なんてな・・・はあ〜。

「君の名前は？」  
「ん？ルーミア」  
「ルーミアか、俺は森 龍斗だ、よろしくな？」  
「よろしく〜」

ぐうう〜。

腹の音が聞こえた。

「腹が減つてゐるのか？」

「うう～お腹減つた～」

「ならこれ食べるか？」

そう言いながら俺は何処からともなくおにぎりを出す。

「食べてもいいのか？」

「ああ、そのために出したんだからな」

そう言つた瞬間、手に持つていたおにぎりが消えた。  
まあルーミアが食べたんだが。

「じゃあ俺は人里に挨拶しに行くからな、また会おう  
ついてくのだー」

「は？別に構わないが・・・人は喰うなよ？」

「りょーかいー」

本当に調子が狂う・・・。

そう思いながらも人里へと進む。

「ここが人里か・・・」

『ええ、 そうですね、人の気配が大量にあるので』

「そーなのかー」

「いや、知つてるだろ」

「わはー」

「・・・はあ～、挨拶を済ませよう」

『そうですね』

「ん？君は誰だ？見かけない顔だが」

「俺か？」

「君以外にいないだろ?」

それもそうか。

「俺は森 龍斗だ、あなたは?」

「私は上白沢 慧音だ、それで?君は何故ここに来た」

「最近幻想郷に来たからな、挨拶しているんだ」

「そうなのか、そして今回は此処に来たと」

「そういうことだ」

「そーなのかー」

「・・・」

話が・・・続き辛い。

「ルーミア」

「ん?」

「これをやるから少し静かに・・・な?」

そういうながら和菓子（大福など）を渡した。

「ありがとう!」

「それで、此処の村長・・・もしくは偉い人に挨拶したくてな」

「そうか、なら寺子屋に来るか?私が話を聞こひ

「ん、分かった、向かおう」

「それよりも・・・そこの妖怪は大丈夫なのか?」

「ああ、人喰いの衝動を零にしているからな、普通の料理で満足できる状態だ」

「そうか、なら安心だな」

まあ俺からあまり離れなければ・・・だがな。

「さて、さつそく向かうとしよう、もしかしたらほかに人が一人いるかもしれないが気にしないでくれ」

「分かった、ルーミアも連れて行つていいか?」

「ああ、構わない」

理由は説明したしな。

そんなこんなで寺子屋に到着。いたつて普通の寺子屋だ。

「ここ」が寺子屋だ、よかつたら先生をしてみるか?」

「いきなりだな・・・まあ考えておくよ」

先生か・・・まあ悪くはないよな。

「ああ、そうしてくれるとありがたい、で?挨拶以外に何かすることはないのか?」

「する事か・・・なら幻想郷の説明をしてくれるか?まだ知らない事が多い」

「分かった」

少女(笑) 説明中・・・

――「無何有淨化」――

ぎやああああああああああああああ!――

「どうかしたか?」

「いや、不快な気配がしてな」

「?」

「そーなのかー」

「氣のせいだわつ、さて、説明が終わつたが・・・」

「おーい、慧音へいるか~」

「むへ~どうやら妹紅が来たようだな」

「どうやら來たようだ。」

「ん? お密せんか? お邪魔したみたいだな」

「いや、もうそろそろ帰るところだ、氣にしないでくれ」

「くれ~」

「は? ま、まあそういうなりにこけど・・・」

「じゃあな、また会おう」

「ああ、次は教師として来てくれるか?」

「フツ、考えておこう」

こうして人里での挨拶は終わった。

阿求? いなかつたんだよ。

多分何処か行つてゐるんだろうが、また次来る時にでも挨拶するや。

「さて、ルーミニアはどうするんだ?」

「?」

「いつまでも一緒にいる訳のもいかんだら」

「そーなのか?」

「ああ、で? どうする・・・」

「あつ! ルーミニア探したよ!」

「あつ! リグルだ~」

「リグルだ~じゃないよ、皆で探したんだよ?」

「どうやらルーミニアは嘘とまぐれでいたらしい。でも空腹には耐え切れなかつたと。

でも空腹には耐え切れなかつたと。

「「」みんなで……」（シヨン）

す』べ落ち込んでいるな・・・相手は罪悪感があるだらうな。

『あれは狙つてるのでしょうか』

「いや、天然だと信じたいな」

じやなこと色々信じれなくなつそつだ。

「あ～、別にいいよ？で、でもね？心配したんだからね？」

「うん」

「あ～ミスティアも大ちゃんも心配してたよ？」

「チルノは？」

「え～と・・・遊んでた」

馬鹿だな

『馬鹿ですね』

「リグルだつたか？あの子」

『ええ、そのはず・・・まさか』

『幽香が進めてくれたんだ・・・面白に反応するんだつにな』

『ちよつ！？リグルさんつ！逃げてくださいーー』

「えつ？」

幽香に教わった方法でやつてみるか。

『逃げてーーリグルさん超逃げてーー』

「ど、どちら様で？」

「ん？俺は幽香の友達（ア承済み）だよ」

「え、幽香さんの？」

「ああ、君の事を聞いてね、面白そうだから会つてみる事にしてたんだ」

「そ、そうですか（何故だらう・・・）の人からは幽香さんと同じ雰囲気が氣がする」

あア楽しみだなア。

「さア！俺を楽しませてミロー！」

『（弄り甲斐がある人を見ると発動するドレを超えた超ドレモード・・・止められませんね・・・すみません、無力な私を許してください）』

「え・・・ま、まさか」

「幽香が教えてくれたからな・・・その方法でいこう」

「に、にげつ！」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

「その後リグルの姿を見たものは誰もいなかつたのかー」

『洒落になつてないんですけど』

その後リグルをいじ・・・弄つて遊んでいたら夜になりかけたので戻る事にした。

弄つているときに何故かリグルの顔が嬉しそうだつたのが気になるが・・・気のせいだろ。

第3話 オレは『納得』したいだけだ！『納得』は全てに優先するぜーー！でな

後書き「一ナーナー！」

龍「次は何処に行くんだ？」

一応妖怪の山かな？

龍「その次は？」

多分紅魔郷編かなあ。

龍「・・・考へていろのならいい、では感謝「一ナーナー」

J a m様、雨季様、メガネ様、ケルベルス様、月詠様、感想ありが  
とうございまーす！！

龍「次回はおそらく金曜か土曜だらうな

あくまで予定ですので少し遅れるかもです！

龍「それでも間に合ひように頑張るから長に待つて欲しい

ではではーまた次回ー

龍「ではな

## 第4話　・・・僕は自分のした事に　一片の後悔もない　たとえ何度生まれ変わ

今回は妖怪の山です！

にとりの口調が気を抜くと某ラジオの口調に・・・。  
いつも通りのグダグダ感ですがどうぞ！

## 第4話　・　・　・　僕は自分のした事に　一片の後悔もない　たとえ何度生まれ変わ

今日は妖怪の山に向かう事にした。

「さて、ついたぞ妖怪の山」  
『着きましたね』

面倒なのは戦闘だが・・・ネタに走るから大丈夫だろ。

「そこのお前！何用だ！」これは無断で入るのは禁止されているんだ  
！早く戻れ！」

「さて」

天狗（下つ端）が現れた。どうする？

戦う  
世紀末バスケ  
アイテム  
逃げる

「ユクゾ！」  
「なつ！？」  
『逃げてーー超逃げてーー！』

ナギッペシペシナギッペシペシハアーンナギッハアーンテンショ  
ヒヤクレツナギッカクゴオナギッナギッナギッフウハアナギッゲキ  
リュウニゲキリュウニミヲマカセドウカナギッカクゴーハアーテン  
ショウヒヤクレツケンナギッハアアアアアキイーンホクトウジョウダ  
ンジンケンK・O・

「命は投げ捨てるもの（キリッ）

『非殺傷設定ですけどね』

「あやや、これはどうこう事何でしうが、新しく来た外来人がいたと思えば・・・部下がやられているじゃないですか」

「話を聞いてくれそうになかったからな、いかにも人間を見下してそうだったしな、まあ俺は吸血鬼だがな」

「おや、そなんですか？人間にしか見えないですが」

「まあ元人間だからな」

「？」

「まあどうでもいいだろ、で？お前は誰だ？部下がやられてるところを見て、俺のほうを観察しているなんて趣味が悪いぞ？」

「あ、あやや・・・ばれてましたか、それはともかく、私は清く正しい射命丸 文です！」

清く正しい？

「何故でしょか、疑問に思われたくないものを疑問に思われた気が・・・」

「気のせいだろ？」

此処ではコイツにでも挨拶してればいいか。  
天魔だけか？はコイツに頼めばいいだろうじ。

「で？何か御用ですか？態々ここまで來たのですし、あつー用がなければ取材を！」

「用は挨拶だ、それと取材は気が向いたらな」

「受けてくれるんですね！いや～よかったですよ、取材もせずに記事にしたせいで信憑性が・・・」

は？「コイツ今なんて・・・。

『幽香さんを倒したと言つ事で有名ですよ？私も記事にしましたし、あつ、これ文々。新聞です、購読よろしくお願ひします！』

そう言いながらやつは新聞を渡してきた。

見出しへ、

『新しく来た外来人、フラーーマスターを余裕で倒す』

だつた。

合つてゐるだけムカつくんだが。  
でもそうか・・・コイツのせいか。

「お前の所為か・・・」

「はい？」

「お前の所為で雑魚妖怪共の相手を無駄にさせられてるのか！」

「は、はい？」

「最近おかしいと思つたんだ、何故ここまで妖怪が襲つてくるのか  
と、その中には新聞がどーとか言つてたからな・・・お前だつたの  
か」

そのせいでストレスが溜まりまくつたんだよ・・・100%で表す  
と30%だ。残りの70%？女装とか女装とか女装に決まつて  
だらうが！

『マスターが壊れていく・・・』

「うおつ！？だ、誰ですか！？」

『あつ、私はですね・・・』

デバイス説明中・・・

「なるほど・・・にとりが聞いたら興味を持ちそうですね」

「にとり?」

「ええ、河童ですよ、何なら会いますか?」

「どんなに下手に出ようとも許さないからな?」

「ひい!/?わ、分かつてますよーほらつー早く向かいますよー。」

そつ言いながらやつ・・・文は飛んでいった。

そういうえば天狗（下つ端）を忘れていたな・・・まあ大丈夫だろ。ギヤグ補正あるし。

それよりも早く行かないとはぐれてしまふな。  
急ぐか。

さて、そつそく着いた訳だが・・・。

「で、ではー私はこれから用事を思い出したので帰らせていただき  
ます!」

「だが断る

「離して下せーーまだ死にたくないですー!」

「何も殺すとは言つていない

「え?」

「せめて痛みを知らず死ぬがいい（いい笑顔で  
「やっぱり死ぬんじやないですかーー!」

「あ、あの~」

「ん?」

「な、何かあったの?」

「コイツが勝手に記事にした、以上

「あ~」

「ちょっと!?諦めないで下せよー!?

まあ自業自得だしな。

『で？どうするんですか？』

「えつ！？機械が喋った？」

『以下略・・・略された気が！』

「気のせいだろ？」

「へ～興味深いね、見せてくれない？」

「すまんな、コイツは俺の相棒だからな、他人に簡単に見せる訳にはいかないんでね」

「ふうん、分かった！」

よかつた・・・まあ大丈夫だとは思つたがな。

「で？どうするんですか？」

「む、そうだな・・・そこに隠れているやつと将棋でもするかな？」

「はいっ！？」

おっ、出てきた。

今更だが・・・自己紹介は終わらせてある。

「さて、相手してくれるか？将棋は中々好きなんだ」

「はあ、構いませんが」

「ならやるぞ、文、もう戻つてもいいぞ？まあ天魔だつけるか？によるしきくな、これ土産」

そういうながら酒を渡す。

「はあ、別に構わないんですがね、では！」

「じゃあ将棋だ」

「はい、お手柔らかに」

こうして夕方まで将棋をした。

勝敗は5勝5敗だった。

かなり強かつたから白熱してしまった。

犬走 梶だつたか、また将棋をしたいものだ。

次は俺が勝ち越してみせるからな。

河城 にとりとは次に会つたら作つたやつを見せてもらつ約束をした。

勿論土産は渡すつもりだ。

次は永遠亭か・・・兎が鬱陶しいらしいが・・・大丈夫だろつか。

『大丈夫ですよ、気楽に行きましょう』

「そうだな、じゃあ帰るか」

もう神社が俺の家な気がしてきた。

そう言つと靈夢は少し嬉しそうな顔をしていた。

第4話 · · · 僕は自分のした事に 一矢の後悔もない たとえ何度生まれ変わ

後書き「一ナーナー！」

龍「やれやれだぜ」

いきなりどうした？

龍「今ならお前をフツシンオラでボコボコにでも殴りつだ

何故に！？

龍「お前は俺を怒らせた」

り、理由は？

龍「シユタインズゲートのゲームに逃げようとしたな？」

ソンナコトハナイヨー。

龍「久々にポケモンをしたり」

イ、イヤダナー···ソンナコトシテナイヨー。

龍「わあ···覚悟はできたか？」

無理です！

龍「答えは聞いてない！星の白金！ザ・ワールド！···」

ちよつ・・・シイーン

龍「オラオラオラオラオラオラオラオラオラアーーそして時は動き出す」

ガフツ！？あ、ありのまま今起こつた事を話すぜ！

龍「黙つていの」

イエッサーーーー！

龍「さて、感謝コーナーだ」

Jamm様、ケルベルス様、メガネ様、月詠様、感想ありがとうございます！！

龍「次回の更新は早ければ月曜、遅ければ火曜だ」

次は永遠亭かもしくは紅魔郷です！

龍「そこは作者の気紛れなんでな、すまない」

では！また次回お会いしましょう！！

龍「ではな」

## 第5話 我は空、我是剛、我是刃！我是一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

また題名が・・・気にしないで頑張ろつ！

でもグダグダ・・・〇ーン

戦闘描写を少し頑張つてみました！たいして変わつてないかもですが・・・。

先生・・・文才が・・・ほしいです！！

## 第5話 我は空、我は剛、我は刃！ 我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

妖怪の山に行つた次の日。

今日は永遠亭に向かう事に。

まあ・・・、

「世話になる事はないだろうがな」

『大抵の怪我は一瞬で治りますしね』

「ああ、まあ挨拶しておいて損はないだろ」

『そうですね』

確か迷いの竹林にあるんだつたか？

もう殆ど覚えてないな。原作知識。

まあいいか・・・覚えていない方がいい事もあるからな。

「で？」こじが竹林か

『はい、ここからはかなり迷いややすいそうです』

「名前通りだな」

迷う原因が幻術とかなら無駄だがな。  
俺には眼があるからな。

「後どれくらいで着くか分かるか？」

『もう少しだとは思いますが・・・罷には気をつけてくださいね？』

「ああ、あんな幼稚な罷にかかる奴はないだろ」

そつ言いながら落とし穴を見る。

・・・あの兎耳はなんだ？まさか引っかかつて・・・いや、まだ決  
め付けるのは早い。

確認してからだ。

「大丈夫か?」

「は、はい、助けてください」

「ああ、了解した」

そう言いながらその兎耳の女を落とし穴から出した。

「た、助かりました、ありがとうございます」

「いや、まあ・・・偶然だから気にするな」

まさか本当に引っかかるやつを見るとはな。

「くう～てゐのやつ～覚悟してなでこよ・・・」

「どうかしたか?」

「いえ、なんでもありません!――」

「そ、そつか」

そういえば此処にいるといふことは・・・永遠亭の住人か。

「君は永遠亭の?」

「はい・・・そうですが?」

あつ、言葉が足りなかつたか?

「まさか・・・月からの追つ手!」

「話を・・・」

「追つ手からの話なんて聞かないわ!此処から消えなさい!・・・そもそもな  
いと・・・」

「さもないと?」

もつやけだ。

「此処で死んでもいい。」

——波符「赤眼催眠」——  
マイイングアイカ

同じように見える弾幕が張られる。  
どうやら能力で見辛くしているみたいだな……なら、

——恐符「始めから誰もいなかつた」——

相手の弾幕に合わせるように黒と白の弾幕が襲つ。  
これで大丈夫か？

「くつ…なら…」

——狂符「幻視調律」——  
ナリシヨーニシガ

さつきと同じように幻覚を使って、弾幕を張つてくる。  
面倒だな。

「消えろ」

——虚無「全て消えた世界」——

相手の弾幕に対して、見え辛いほぼ透明な壁を作る。  
その壁に当たつた弾幕は全て消えた。

「え…？」

「そり、次は」いつからだ

——幻想「全て止まりし世界」——

時を止めて、通常弾幕（白と黒の弾幕）を放つ。

「そして時は動き出す・・・何でな

「はつ！？くつ！」

——狂視「狂視調律」——  
イリュージョンシーカー

さつきの弾幕の強化版か・・・しつちの弾幕が打ち消されたか・・・  
。

「次よ！」

——懶符「生神停止」——  
アイドリングウェーブ

周りの使い魔？みたいなものから複数の弾幕が現れる。  
これくらいなら余裕だろうが・・・、

「今！」

まあ簡単にはいかないよな・・・あの狂氣の日はややこしいな。

普通の人間なら抵抗すら出来ないだろうな、俺は人間じゃないけどな。

目のせいが、抵抗しないでおくと、弾幕が増えたり勝手に移動しているように見えてしまう。  
さつやと終わらせてやうか。

「そろそろ終わりにしようか・・・」

「負けない・・・負けられないのよー。」

「これでラストだ」

「はあああああーー！」――「幻魔月睨」――  
ルナティックレットアイズ

原作のゲームでもラストワードのスペルだ。

全方位に撃たれる高速度の粒弾と、全方位こつち狙いの青中弾が放たれる。

その後、あの目で幻覚を見せて、いくつかの弾幕が消える。

「面白いが・・・もう終わらせるといったからな」

――幻想「神々の戦争」――  
ラグナロク

まるで今までの弾幕がお遊びのような弾幕を相手に浴びせる。  
その弾幕はもはやただのレーザーとかしていた。  
相手はこれで力尽きたらしい。

「これで話を聞いてくれるか?」

『『『』』』

「くつ・・・すいません・・・師匠・・・姫様・・・」

「まだ勘違いしてるのね・・・」

「し、師匠！？」

目の前に現れたのは特徴的な服を着た女性だった。  
赤と青はやりすぎだと思うんだが・・・。

まあいいか。

「で?俺の疑いは晴れたのか?」

「そもそも最初から疑つてないわよ、あなたは挨拶しに来ただけだ

もの「

「え！？」

今までの戦闘は全て無駄だったのか。  
別に構わないが。

「で？あんたが永琳か？」

「ええ、あなたは？」

「俺は森 龍斗だ」

「ほら、あなたも挨拶しなさい」

「はい、鈴仙・優曇華院・イナバです」

これで今は大丈夫か？

「家に来てくれるかしら？」

「別に構わない」

という事で永遠亭に到着。

どうやら全員と挨拶することができそうだ。

「姫様、お客です」

「そう？少し待つてくれる？」

「早くしてくださいね」

僅かにゲームの電源を切る音が聞こえた・・・気にしないでおこう。

その後自己紹介を済ませた。

「もう用は終わったの？」

「ああ、もうそろそろ帰るぞ」

「そう、次は何時来るのかしら？」

「さてね、まあ暇な時に思い出したら向かうつせ」

「なりいいわ

まあ異変が来れば嫌でも世話になるかもな、相手が。

「じゃあ帰る、そこに隠れていのう」詐欺に一言叫んでおこう

ずっと隠れていたからな。

「俺を罠に嵌めなければその3倍は持つて來い、それでもかかりはしないがな・・・まあ俺以外に罠を使うなら余裕で手伝うが

『（鈴仙さん・・・）愁傷様です』

俺が言った一言で鈴仙が絶望したような顔をしていたが・・・何故だろうか。

『まあ自分が引っかかる罠がグレードアップするとなればそつなりますよね』

「？」

『（黙囁だこのマスター・・・早く何とかしなことー）』

そして神社に戻ろうとしていた。  
だが、

「ぐつ！」

『マスター？』

『やはり無防備にあの眼を見るんじゃなかつたな・・・狂氣が膨れ上がつてゐる・・・』

『大丈夫なんですか？』

『さてね、まあこざとなれば発散するが、今のようにな

「CCCCCCCC」

話してこないつむじでうやうら雑魚妖怪共が集まつたみたいだ・・・。

「恨むなとは言わない・・・恨みたければ存分に恨め・・・そして今のタイミングで此処に来てしまつた己も恨め」

アア・・・少シ壊ソウカ・・・。

「ジヤアナ」

——絶望「全て消滅せし世界」——

その時、幻想郷の一部の土地が丸ごと消滅した。だが、その後すぐに何もなかつたように戻っていた。

## 第5話 我は空、我は剛、我は刃！ 我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

後書き「一ナーナー！」

龍「遅い」

すいません！！

龍「本来なら遅くとも昨日に投稿じゃなかつたか？」

思い浮かびませんでした！！

龍「次は守れよ？」

イエッサー！！

龍「さて、感謝「一ナーナーだ」

メガネ様、荒井スミス様、月詠様、感想ありがと「わい」ます！！

龍「こんな駄文ですまないな、作者自身何がしたいか分かり辛いやら嘆いている」

もひとつ精進できるように頑張ります！！

龍「次回はおそらく木曜だ、次は守らせるからみてくれると嬉しい」

では！ また次回！

龍「ではな」

## 第6話 僕は俺の心情に肩入れしているだけだ！（前書き）

Fateの兄貴はマジ格好いい。

はい！いつも通りの？寧ろいつも以上の？駄文です。

今回から紅魔郷編です。

もう片方でやつた番外編とは微妙に違う終わり方にする予定ですーー！  
多分後4話くらいですが頑張りますーー！

## 第6話 僕は俺の心情に肩入れしているだけだ！

永遠亭への挨拶が済み、次は何処に行こうか悩んでいたと、  
「ん？ 何だ、この霧・・・紅い？」  
『どうやらこれが異変のようですね』  
「なら靈夢が動くのか・・・俺も行ってみるか  
『別に構わないのでは？ その方が楽ですし』

なら聞いてみるか。

「靈夢」  
「いいわよ？」  
「聞いてたのか」  
「ええ、聞こえてたわよ、別にいいわよ、その方が楽できるし」  
「だろうな」「さて、行くわよ！」  
「待て！ 私も行くぜ！...」

気がついたら魔理沙がいた。

3人になるのか。別にいいがな。

「ならわざと終わらせようか」  
「ええ、じゃないと洗濯物が乾かないじゃない！」

やはりそんな理由か・・・靈夢うらじこと言えぱりじこのか？

「ふむ、何処か分かるか？」  
「私の勘があつちつて言つてるわ

「ならあつひに行へか

理不尽なほど当たるからな。

「じゃあとひとと行くぜーーー。」

「ああ」

「ええ」

そして俺達は異変解決に出かけた。

「といつよつ・・・」

「どうかしたのか?」

「なんでそんな装備なのかしら  
ん?」

おかしいところがあるか?

今の俺の装備はクロス(モード2nd)と、Hアと断罪者+黒鍵(ジャッジメント)これはこいつでも出せる(む)を装備状態なんだが・・・おかしいか?

「装備多すぎだぜ・・・」

「そりが?」

「ええ、もう少し減らしてくれる?」

「別に構わない」

やつ言いながら俺は黒鍵とHアをしました。

「霧が鬱陶しいな・・・紅いから尚更だな」

「まあ仕方ないな、異変だから・・・早く終わらせてよ

まあすぐに終わってくれる方が楽だからな。

「龍斗！」

「なんだ？ グフッ！」

いきなりタックル・・・新手の奇襲か！？  
つて・・・ルーミアか。

「どうした？」

「龍斗が見えたから！」

「そうか、嬉しい限りだ」（ナデナデ

「ん~」

悪意のない攻撃は避け辛いからな・・・でも撫でていると小動物に  
しか見えないな。

「とりあえず先に進みたいんだが？」

「一緒に歩いててもいい？」

「別に構わないが・・・」

「おいおい、これ以上増えるのは勘弁だぜ？」

「?別に仲間が増えるのはいい事だと思つが?」

「そうじゃないんだけどなー」

ん？何故呆れたような表情をする。

「どうでもいいけど・・・先に進むわよ（何で龍斗には女がよりま  
くるのかしら・・・）」

何故か不機嫌な靈夢についていくこと。  
無論ルーミアもついてきた。

「ここは・・・湖か

「冷えるなあ・・・」

「さふいわね・・・」

「そーなのかー」

「アンタ達ね！アタイの縄張りに入ってきたやつはーーー！」

何故か妖精の登場。

まあ理由はいつている通りなんだらうが・・・。

「すまないな、すぐに退くから通してくれないか？」

「龍斗！そんなもの戦つて通ればいいんだぜー！」

そう言いながら魔理沙は八卦炉を構える。

「とりあえず・・・」

靈夢まで札を構える。

「早く進むためにもさつと倒すわよ

「はあ～そこの妖精、通してくれないか？無理なら・・・押し通る

ーーー

もう自棄になつて断罪者ジャッジメントを構える。

『（どう考へても過剰戦力です、本当にありがとうございました）』

「いやぞ

「ええ（おう）！」

「つえつー？え、えつと・・・」

——恋符「マスタースパーク」——

——靈符「夢想封印」——

——滅罪「断罪者」——

魔理沙のレーザーと靈夢のホーミングする玉と俺の断罪者の弾が妖精に襲い掛かる。

「え、ええええええええええええええ！」？

ドカーン！

どう考へてもオーバーキルだな。

「さて、早く行きましょうか」

「そうだなー」

「少しだけ先に行つててくれ、すぐに追いつく

「分かつたわ、すぐに来なさいよ？」

「ああ」

先に靈夢と魔理沙に向かつてもらつた。  
理由はさすがにやりすぎたと思つたからだ。

「大丈夫か？」

「うう～、何なのよお！」

「済まないな、これはわびとも言えんが」

そういうながら俺はお菓子（飴やクッキーなど）を出す。

「友達とでも食べるといい、ではな、今度はゆっくり話そつ」（ナ

デナデ

「ん～・・・分かつた！」

「龍斗、まだなのか？」

「そういえばルーニアが背中にいたな。  
軽すぎて気づかなかつた。」

「ああ、今向かう所だ、ではな」

「うん！」

まあ自己紹介は済ませて いるから大丈夫だろ うな・・・妖精だけ  
ど 大丈夫だよな？ チルノ。

## 第6話 僕は俺の心情に肩入れしているだけだ！（後書き）

後書き「コーナー！！

龍「遅い」

すいません！！

龍「理由は？」

本当に悩んでいたのと、PCが不調なためです！！

龍「買いなおす余裕がないもんな

そりなんだよね。親父が帰つてきたら頼めそりなんだけど・・・。

龍「まあ今の状態で頑張るしかないな」

（言えない・・・ポケモンのホワイトでテッカーンとガブリアスを育てたなんて言えない！）

龍「？まあいい、感謝コーナーだ」

Jam様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「毎度約束を守れなくてすまない、次はおそらく日曜だらうが・・・少し遅れるかもしだん」

PCの調子がよければ大丈夫です！！

龍「ではな、また次回で会おう」

ではでは！

## 第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らひ墨

はい、今回もサブタイが長いです。

今回は遅くなつていったので急いで書いたものです。

カオスもしくは訳が分からないよ・・・になると思われるのですが、

ご了承下さい。

## 第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らひ難

チルノと別れてから少し・・・靈夢たちと合流した。

「何しに行つてたんだ?」

「まあお詫びをな」

「ふーん」

「どうでもいいからわざと進むわよ」

「了解だ」

ルーミアがまだ背中にいるので、あまりスピードが出せないので、くれと頼んでも無理だしな。

「さて、もう少しだよな?」

「ええ、もう田の前のはずよ」

「ならあれは門番か?」

「え?」

目の前にいかにも私中国人ですといいたげな格好をした人間?・・・妖怪か、がいた。

「此処に何の用ですか?」

「この霧を止めてほしくてね、ここが怪しいから此処に来たんだ」

「そうですか、なら通す訳にはいきません!—」

それだと面白しているよな?此処の主が異変を起こしていまますつて。

「なら此処に犯人がいるのね、さつさと行きたいから通してくれるかしら」

「無理と言いましたが？」

「なら無理やり通るだけだぜ！」

「結局こうなるんだな」

「私の名は紅 美鈴！此処を通りたければ私を倒してからこしなさい！」

「望むところだぜ！－！」

こうして紅 美鈴とのスペルカードバトルが始まった。

「行きまかよーーー！」

——華符「芳華絢爛」——

相手の弾幕が全方位にばら撒かれる・・・。  
少し避けるのは面倒か？

「まどろつこじいんだぜ！－！」

——恋符「マスター・スパーク」——

大きなレーザーで相手の弾幕が打ち消される。

「くつ！」

「何処を見ているのかしら、私もいるわよーー！」

——靈符「夢想封印」——

相手をホールミングする光の玉を打ち出す。  
相変わらず卑怯くさいスペルだな。

「アンタに言われたくないわ」

「まったくだぜ」

「何故分かった?」

「顔を見て何となく」

「何それ怖い」

迂闊に考えられないんだが・・・。

「考え方とは余裕ですね！」ちから行きますよーーー。」

——虹符「彩虹の風鈴」——

虹色の弾が全方向にばら撒かれる。  
全方位好きだな・・・おい。

「ちつー！」

——魔弾「爆裂炸裂弾」——

相手の弾幕に当たった瞬間、爆発し、数が増え、打ち消しながら相手に向かう。

その数は200。

「くつー！」

——彩符「彩光乱舞」——

虹色の弾幕がさらによばら撒かれる。

それによって俺のスペルも消されてしまつ。

「まだまだですー。」

### ——彩符「極彩颶風」——

相手は虹色の弾幕を高濃度で放ってきた。  
数が多いので避けるのも一苦労だな。  
まあ面倒なだけとも言えるが・・・。

「どうしましたか？もう終わりですか？」

「冗談はよしてくれ、まだまだ頑張れるぞ、なあ？魔理沙、靈夢」

「「ああー（勿論！）」

元気だな。

「セヒ、終わらせんー。」

「出来るものならーー。」

### ——幻想「否定されし存在」——

目の前が見えなくなるほどの弾幕を放つ。

それはまるで存在が肯定される事がないようにも見える。

「くつー・セヒ ああああああーー。」

相手が完全に被弾したため、終わった。

「さて、通してもいいわ。」

「すいません・・・お嬢様・・・」

何故かヒーリングが悪党に見えるな。

「さて、行くわよ」

「おう！」

「分かった」

「そーなのかー」

そういうえばルーミアが背中にいた状態で戦つてたんだな。  
軽すぎて忘れていた。

そんなこんなで紅魔館へ到着。  
地下から懐かしい感じがする。

この感じ・・・誰かが狂気に飲まれているな。  
自分も飲まれた事があるからな。  
まあ会つたら何とかするか。

「さて、今何処に向かっているんだ？」

「多分・・・図書館ね」

「何故分かる」

「勘よ」

「何それ怖い」

「そーなのかー」

と言つ事は・・・また面倒そうだな。

「さて、此処がそつか？」

「そうみたいね、早く入るわよ

「おう！楽しみだぜ！」

「食べ物あるかなー」

「無いだろ」

図書館に入ると、本が大量に見えた。

す”いな・・・これだけあれば何かす”い本が沢山見つかりそうだ。

「あなた達はだれかしら、客を招いた覚えはないんだけど」

「さあ？まあこの霧を何とかしてほしくてね、君が主犯か？」

「いいえ、でもそれが目的ならここは通せないわ」

「ならさつきと同じで無理やり通るぜ！」

「私はパチュリー・ノーレッジよ」

「む？俺は森 龍斗だ」

「私は霧雨 魔理沙だぜ！」

「私は博靈 靈夢よ」

「ふうん・・・龍斗と言ったかしら」

「ああ」

「あなたはものすごい魔力を持っているのね、勿論妖力も靈力も」

「そうみたいだな」

紫に教えられるまで妖力があるのは氣づかなかつたからな。

「少し研究させてくれないかしら？」

「無理だな！」

「ええ、却下よ」

何故俺より先に断る？まあ俺も断るつもりだったが。

「そう、まあ断られるのは分かつてたからいいけど・・・さつきも

言つたけれど、此処から先は行かせないわよ」

「なら押し通るまでだ」

「勿論だぜ！」

「ほら、さつととやるわよ」

「魔女の力見せてあげる」

こうしてバトルは始まった。  
そして少し時間が経つた。

「やるわね・・・なりこれなりどうかじり

——火符「アグニシャイン」——

火属性による弾幕がなされる。

「無駄だ」

——水符「ウォータープラネット」——

周りを水属性の弾幕で潰す。

これでスペルブレイク・・・次は何で来る・・・。

「次はこれよ

——金符「メタルファティーグ」——

黄色の中くらいの玉がはじけた。  
そうとしか言えない弾幕だった。

「へーならこいつはこうだぜーー！」

——魔符「スダーダストレヴァリヒ」——

弾幕をばら撒きながら移動するため、相手の弾幕を消しながら進んだ。

「なら次はこれよ

——月符「サイレントヘレナ」——

相手から粒弾が放たれた。

少しの間避けていると、ワイヤーみたいなものが段々、下向きにも撃たれる様になった。

消さないと拙いな。

「ならこれだ」

——虚無「世界消滅」——

名前負けしてそうだが、相手のスペルを消すだけなら十分だ。

「やるわね・・・次はこれ

——日符「ロイヤルフレア」——

弧状に連なった赤い玉がばら撒かれる。

どうやらこれはパターンがあるみたいだな。

「もう少しで終わる・・・もう少し頑張れよ

「勿論だぜ！此処の本を持つていくためにもな！」

「どうでもいいから早く終わらせたいのだけど

「ハハ、了解」

「お喋りは済んだかしら？」

「ああ、待つてくれてたのか？」

「簡単に避けておいてよく言つわ

「さてね」

「まあいいわ、このスペルもブレイクされた……ならこれでラストよ！」

### ——火水木金土符「賢者の石」——

今まで出てきた全ての色の玉が出される。

自分狙いや、ばら撒き、固定などを使ったスペルらしい……。

「君がどんなスペルで来ようとも……俺は全てを凌駕するのみだ！……」

### ——幻想「気高き理想郷」——

相手の弾幕より少しだけ密度の高い弾幕が出される。

このスペルは相手のスペルによって威力が増減するスペルだ。

相手が強いスペルを使えば使うほどこのスペルの威力が上がるようになっている。

「これで終わりだ

「むきゅ～」

「大丈夫か？」

「え、ええ」

どうやら大丈夫なようだな。

「それじゃあ先に進ませてもうつぞ」

「ええ、止めることができないから仕方ないわ

「なら此処の本を借りるぜ！」

「持つてかないで～」

「大丈夫だつて！死んだら返すぜ！」

「それを泥棒といつんだが？」

「そーなのかー」

まったく・・・。

「借りるなら死ぬまでじゃなくきちんとした日[に]ちを決める、じゃ  
ないと邪魔するぞ?」

「うつ！なら一ヶ月でどうだ！」

「・・・それくらいなら大丈夫よ、でも一回につき5冊が限度、そ  
れ以上は無理よ

「分かつたぜ！」

ふう・・・これで大丈夫か。

「さて、先に進むか

「ええ（おひつ）」

こうして俺達4人は先に進んだ。

でも途中でルーミアがいなくなつていたのに少し驚いた。  
何処に行つたのだろうか・・・少し不安だ。

**第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らう異**

後書き「一ナーニー！」

# 龍「遲い」

少し体調崩したので・・・後PCの調子が・・・。

龍一 まあそれならもうと急げ、後体調管理は大事になら

イエッサー！！

龍一感謝力

ケルヘルノ様  
スガホ様  
感想ありがとうございます!!

龍 次回も頑張るのでよろしく待っていて下さい

一臘三定  
以次更新

龍溪先生全集

なので頑張ります！！

龍一 ではな、また次回

ではでは！

## 第8話 機会があるから救いがあんだよ（前書き）

はい、遅くなりました。

吐き気だけマシになつたので投稿。

頭痛や眩暈は継続していますが、投稿しないと逆に落ち着かないの  
で投稿しました。

期待せずどうぞ！！

## 第8話 機性があるから救いがあんだよ

図書館から少し飛ぶと、

メイドが現れた。

「おや？君は・・・従者が出でたといつ事はその主が近くにいるか、命令されたか・・・まあもつすぐで終わる事は確実だな」

「そうだな！」

「ええ、早く終わらせてお茶が飲みたいわ」

「龍斗さん・・・だつたかしら？」

「ん？」

メイドから名前を呼ばれたので反応したのだが・・・教えていないはず・・・何故知っている。

「私はお嬢様の従者の十六夜 咲夜と申します、お嬢様がつれて来いと仰つたのでお迎えにあがりました」

「は？」

どうやら興味をもたれたみたいだな・・・この様子だと。

「なら行くわよ

「そうだな」

「あら、あなた達は許可してないわよ？」

そう言いながらナイフを投げた。

靈夢や魔理沙がつまく反応できなかつたのはやはり時を止められたからだろ?」

「どうやらあなたには能力が効かないようなで止めた状態で案内しますのでついて下さい」

「分かった」

そして時は止められ、進む事に。

「あの2人をどうするんだ？」

「私がお相手するの『ご安心を』別に殺したりはしませんの」「ならいいが・・・間違つてでも殺してみろ・・・お前を殺すからな？」

少し殺氣を込める。

「！？は、はい・・・分かっています」

「それと敬語はなくて構わない、今は敵対しているのだからな」「・・・分かったわ、ここがお嬢様の部屋よ、無礼な事はしないでよ」

「さて、約束しかねるな、一応異変解決に動いているのだから」「・・・はあ、じゃあ入るわよ」

「ああ」

そつ言つて咲夜は能力を解いた。

「お嬢様、森 龍斗を連れてきました」

「入りなさい」

「はい」

中から返事が返ってきた。

少しだけ幼い・・・しかし威厳を持った声が聞こえる。

油断はしないが・・・全力で行かないとな。

「失礼する」

「ええ、ようこそこ、紅魔館へ、用はここの霧でしょ」  
「ああ、ここの霧に意味はあるのか？」

「私日差しが苦手なのよ」

「吸血鬼だからか？」

「ええ、でもあなたからも吸血鬼の気配がするのだけれど……何故日差しを浴びても大丈夫なのかしら？」

「……真祖の吸血鬼だからな、まあ完全に大丈夫な訳ではない、朝と昼は少し力が弱まるからな」

「そう……真祖ね」

「どうやら納得したらしい。」

「俺の名前は知ってるみたいだからそつちの名前を教えてくれ、そつちが知つててこつちが知らないのは不公平だろ？」

「フフ、そうね、私はレミリア・スカーレットよ」

「そうか、で？用件はまだあるんだろ？」

「ええ、真祖と聞いてさらにやる気が出てきたわ……」

「俺の力をみたいと？」

「ええ、私より上の存在が私より弱かつたら嫌じゃない、だから戦つてみたいのよ」

「いいぞ、どうせ異変を解決するのに必要なものだったからな」

「フフ……今夜はこんなにも紅い月が出てるわ……」

「そうだな」

「楽しい夜になりそうね（だな）」

「ひつひつヒリニアとの弾幕」  
「が始まった。

「まらほらー、ビリしたのかしらー、その程度じゃ私には勝てないわよ

？」

「・・・クロス、モード2nd」

『了解です』

クロスを銃に変える。

「行くぞ」

「ええ、来なさいーー！」

——滅罪「原罪の矢」——

一部をイノセンスに変え、矢を撃ち出す。

「その程度かしら？」

そう言いながらレミリアは攻撃を避けながら接近してきた。  
この距離は！？

「喰らいなさい」

——紅符「不夜城レッド」——

レミリアから十字に紅い霧状のオーラが出てきた。

「ひつひつー？」

それをきつぎり避ける。

「やるわね・・・」

「まあまだうーー」れぐらにできなきや生きていけないからな

「確かにそうね」

「まうつ！ 次は俺からだ」

——狼符「ブルート・フォルモント」——

狼に姿を変える。

「なうー？」

「見せてやるわー……」の姿の力を…

「ぐつー。」

相手を宙に浮かせ、連撃を繰り出す。

「満月の呪い、受けるがよー。」

「ぐうー。」

さりげに攻撃をする。

そして・・・、

「闇夜さえ怯え、血の惨劇は幕を下ろすー。」

「があああーー。」

トドメとてわんばかりに攻撃を振り下ろす。

「くつ・・・やるわね

「ああ、やつちこvana、普通なら終わっているんだが

「フフ・・・私をそこいらの雑魚と一緒にしないでくれるかじい

「そうだな」

「なうー。」

——神愴「スピア・ザ・グングニル」——

レミコアの手に紅い槍が出てくる。

なら・・・、

——魔槍「ゲイボルク」——

俺の手に某槍兵の槍が出てくる。

お互に接近戦で終わらせようとしていた。

無論この槍は心臓に突き刺されても死なないようになつていて

「はああああああ！」

「つおおおおおお！」

互いに槍が振るわれる。

片方は力に任せ、片方は技に任せて振る。

「そらそらそら……」

「はああああああ……」

槍で連続の突きを繰り出す。

相手はその突きに無理やり合わせてきた。

「・・・もうそろそろ終わらせるかい？」

「やうね、これで終わりよー！」

どうやら考へている事は同じらしい。

レミコアは槍に今込められる最大の妖力を込めていた。

「行くわよ！」

「来い！」

互いに相手に向かつて攻撃を開始する。

「はあつ！…」

レミリアは槍を投げてきた。

「喰らうか！…」

その槍を回避した俺は、レミリアの懷に入り込む。

「しまつた！…」

「飛べ」

相手を思いつきり蹴り上げる。

「くつ！」

「この一撃・・・手向けと受け取れ！」

——突き穿つ死翔の槍——  
ガイ・ボルク

思いつきり槍を投げた。

「がはつ！…」

「これで俺の勝ちだな」

「・・・ええ、私の負けよ」

「さて、霧を消してくれるか？」

「ええ、敗者は勝者に従つわ」

「これで異変は解決か・・・」これで文句はないだひつ。

「龍斗！終わったの！？」

「靈夢？ああ、終わったよ」

「そひ、これで異変は解決ね」

「ああ」

「おう！これでゆつくりできるぜー！」

「フツ、魔理沙らしいが・・・まあやる事は決まつているだひつ？」

「ふう・・・そりゃええやうね」

「？何の事だ？」

「宴会だよ宴会」

「・・・そりゃだな！ならさつそく準備しないとな！」

「そひことじとだ、あんたも参加だぞ？」

「え？」

「どうやら自分には関係ないと思つていたらしく・・・。

「終わつたのだから皆で宴会だ、それが約束？みたいなものだから  
な

「そひなの？」

「ああ、だから参加しろ、まあワインとかならあるだひつ？」

「え、ええ」

「よし、なら参加確定だな」

「これでまた騒がしくなりそひだ。  
そう思つていた時に、予想外な事が起きた。

「ガフツ！！」

「ねえ、一緒二遊ボウヨ・・・・

「龍斗！？」

レミリアの妹・・・フランドール・スカーレットに胸を貫かれた。

## 第8話 機性があるから救いがあんだよ（後書き）

後書き「一ナーチ。

龍「吐き気がなくなつただけで大分違つた

うん。といつよつ多分睡眠時間じゃね?と友達に言われたのでいつもの平均3時間睡眠から5時間くらいに増やしたんだ。

龍「結果は?」

吐き気だけ消えました。

龍「なら寝不足だったのか?」

いや、3時間以上寝ると逆にしづくなるんだよね。

龍「・・・感謝」「一ナーチ

いきなりですか・・・ケルベルス様、J am様、感想ありがとうございます。

龍「「イツの体調を心配してくれて感謝する、まあ自業自得な気がしないが」

でも大分マシになつてきた（と思いたい）ので次の更新は守れそうな気がします。

龍「次回の更新は日曜か月曜を予定している

次回で紅魔郷編のEXを終わりにし、その次で宴会で、今回の異変は終わりにしたいです。

龍「ではな」

ではでは！

## 第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心できぬ

今日は一番何がしたいか分からぬ気がします・・・（汗）

次回は宴会でその次から日常です！

それでは！異変のEX編をどうぞ！！

## 第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心できぬ

レミリアの妹・・・フランドールに心臓を貫かれた。  
心臓を再構築するのに少しだけ時間がかかつてしまつ・・・どうやら能力で破壊されたらしいからな・・・。  
黙目だ・・・意識が・・・遠のく。

(俺が代わつてやるから寝てろ)

お前は・・・。

(クク、別に誰も殺したりはしねえさ、だからとっとと代われ)

ちつ・・・すぐに戻るからな・・・。

(ああ、俺はただ殺すか暴れる事ができれば満足だからな)

だから俺は出したくないんだ・・・お前を。

(じゅあな)

くつ・・・急ぐか。

そう思いながら再構築に集中した。

>?/? Side <

クク、どうやら回復に集中したらしい。  
心臓なんてなくても行動できるだろ? さて・・・楽しむか。

「龍斗？」

「大丈夫なのか！？」

靈夢と魔理沙だつたか？が心配そうに俺・・・本体を見る。一応言つておくか。

「ああ、大丈夫だ」

「・・・誰？」

「ん？」

「お前は龍斗じゃないな・・・誰なんだぜ？」

どうやらお見通しらしい・・・まあ誤魔化すつもりもないからさつさと終わらせるか。  
楽しみたいしな。

「今は説明は省く、後でコイツに聞け、敢えて名乗るなら・・・狂だ」

その名前が一番しつくりくる。

まあそんなことはどうでもいい・・・俺は暴れたいだけだ。

「さあ！そこの嬢ちゃん！俺と遊ぼうぜ！」

「ウン！遊ンデクレルノ？」

「ああ、だからかかるて來い！」

「ウン！行クヨ！」

俺は大太刀・・・天狼を取り出し構える。

さて・・・主人格には殺すなと言われているからな・・・非殺傷設定つて便利だな。

「余所見シテテ大丈夫ナノ?」

——禁忌「レー・ヴァ・テイン」——

うおつ！？いきなり接近戦か！  
面白え！！

「ならこれでどうだ！」

——無明神風流奥義・玄武——

蛇を模した神風を放つ。破られてもさらに玄武の甲羅を模した神風で防ぐ。

この技は防ぐだけではない。

「ナ、ナニコレ！？動ケナイ！」

この技は相手の動きを封じる効果がある。  
まあ一匹だと防御にしか使えないから二匹出したんだがな。  
さらに、

——無明神風流殺人剣・みずちーー

地面を食い荒らしながら相手に向かっていく。  
本来の簡略版だからな・・・

「効力ナイ！？」

やつぱりか・・・。

「ならこれならどうだ！」

——無明神風流奥義・朱雀——

火の鳥を模した神風を放つ。さらに強烈な剣圧で相手の動きを封じ、上空から渾身の力を込めた一撃必殺の刃を振り下ろす。

「ガアアアアアア！！」

「やはり気絶まで持つていけないか・・・」

力加減が難しい・・・。

「モウ壊レチャエ！！」

——禁忌「フォーオブアカインド」——

相手が4人に増えた・・・。

順番に倒すか。

「喰ラエ！」

——禁弾「スターボウブレイク」——

相手から綺麗な弾が発射される・・・まあ全部避けているが。

「さて、これで一人目だ」

——無明神風流殺人剣・蜃——

自らの剣によつて生じさせた熱エネルギーで空気の温度差を生じさせ、即席の蜃氣楼を生み出す。

この業は相手の体組織を破壊する。

「ガアアアアアアアアアア！」

「これで一人目だ」

相手の分身が消える。

これで残り三人。

「ナメルナア！！」

――禁弾「過去を刻む時計」――

まるで時計を表すようなレーザーが出てくる。  
片方は時計回り、もう片方は反時計回りで対になつている。  
そこまで苦労する弾幕ではない。

「これで2人目」

――無明神風流奥義・白虎――

白き獣を模した神風を放つ。一撃目で発生したすさまじい剣風で相手を引き寄せ、強烈なカウンターとなる一発目を放つ。

「グフツ！！」

「はい、二人目終了」

残り2人。

——秘弾「そして誰もいなくなるのか？」——

青い玉が中ぐらいのやつと、丸いやつが向かってくる。そうすると、何処からともなく、粒みたいな玉が現れる。それを避けると、少し経つた後、こちらに戻ってくる。どうやらパターンみたいだな。

「分身ラストを消すとするか」

——無明神風流奧義·青龍——

分身の隠れている場所に向かつて、16本の「みずち」の渦を作り出し、それが竜巻となつてやつを宙へ舞い上がらせ、無防備などころに強烈な一撃を加える。

「次でラストだ」

「ナ、何デ壊レナイノ?」

「さてなあ？元々壊れでいるからかもな」

壊れていふものは壊しきへいぞ？

「壊レチャエー！」

— QED 「495年の波紋」 —

波紋を表すつぽい全方位粒弾が放たれる。

何処からとも無く反射されるので避けるのが面倒になつてきました・・・

。

さつさと終わらせるか・・・じゃないと主人格が戻つてくるし。

「いぐぞ? これでラストだ」

——無明神風流最終奥義・黄龍——

信念の極みにて「朱雀」「白虎」「玄武」「青龍」4つの神風を同時に発動したときに起こすことが出来るもう一つの神風。その姿は四神の中央に座し、森羅万象全てを護り、破壊する力を持つた最強の神龍。

この業は威力がかなりある業だ。氣絶までもつていけるだろ。

「ガ、アア・・・」

「どうやらまだみたいだな」

まあ後は主人格に丸投げするが。もう心臓は完治したみたいだからな。じゃあ後は任せたぜ?

>狂 Side end <

意識を取り戻すと、目の前にはボロボロのフランデールが。やりすぎだ、あいつ。

「大丈夫か?」

「え、あ、うん」

「さて、君の中の狂気ある程度消しておこう」

「出来るの?」

「ああ、出来ない事は言わない主義だ」

まあ全部は消さないんだが。

「どうして全部消さないのかしら？」

「ん？ 分からないか」

簡単に説明するか。

「簡単に言つと、吸血鬼には狂氣が少しでもないと拙いんだ、まあだから少しだけ残す、日常には困らない程度にな」

「あ、ありがとう」

「いや、礼はいらない、俺の我慢で行動するのだから

「それでも・・・ありがとうー。」

「フツ、なら受け取つておいで、さて消すぞ？」

「うん」

フランドール・・・長いのでフランでいいか。  
フランの中の狂氣を一時的に俺に移す。

・・・これでよし。

「あつ・・・なくなつていぐ」

「・・・これで終了だ」

「これで大丈夫だろう。」

「とりあえず疲れた・・・帰つて寝たい。」

「じゃあな、また宴会で」

「じゃあなー！」

「またね」

じつして異変は終了した。  
次は全員での宴会である。  
無論あまり飲まないがな。

第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心できぬ

後書き「一ナーナー！」

龍「今日ははぎりぎりか？」

たぶんね！

龍「今日は何故鬼眼の狂？」

何となく！好きだったからや！

龍「そうか・・・」

さて！感謝「一ナーナー！」

龍「J a m様、ケルベルス様、メガネ様、感想感謝する」

次回の更新は一応水曜か木曜を予定！！

龍「あくまで予定なので気楽に待つてくれると嬉しい」

では！また次回！！

龍「ではな」

## 第10話 弱かつたなら上を田指してあがけばいい、強かつたならせりなる上を

今回も大分遅くなりました！

今日は宴会です！まあ宴会をした事がないので大分適当臭漂います  
が。

タイトルが長いのはもはやデフォだと思つてください。  
誰かこの台詞分かる人いるかな？タイトルの。  
では！どうぞ！

## 第10話 弱かつたなら上を皿盛してあがけばいい、強かつたなりせりなる上を皿盛

異変が終わり、今は宴会をしていく。

「お~い! もつと酒持つて来おい~」

「魔理沙・・・飲みすぎだ」

「いやいや、まだまだこんなもんじゃないんだぜ!~」

「はあ~」

魔理沙は開始早々潰れた。

どうやら紫が度の高い酒を置いたらしい。

「あらあら、私のせこにされても困りますわ、そこに置いていたら勝手に飲まれたのよ」

「・・・やうか」

そう言われたら仕方ないな。

他のやつは大丈夫か?

「ふ~ん、こいつお酒もいいわね」

「そうですね、お嬢様」

「咲夜、あなたも飲みなさい」

「いえ、ご遠慮させてもらいます」

「あら、私の酒が飲めないのかしぃ?~」

「・・・いたします」

やれやれ、どうやら楽しんでいるみたいだな。

「お兄様~!~」

「つまつー？」

誰かにタックルされた。

まあこの呼び方は一人しかいないんだがな。

「フラン・・・急にタックルをしないでくれ、少し痛い」

「『めんなさい』・・・」

少しだけショーンとなる。

はあ～そんな顔をされたら「こっちが悪いみたいじゃないか。

「まあ次は気をつけてくれ、それなら大丈夫だから」

「うん！」

「それで？何か言いたい事があつたんだろう？」

「うん！一緒にお酒飲もうと思つて！」

「そつか

大分元気になつたな。

狂気のせいで閉じ込められていた時とは大違いらしくからな。よかつた。

「それで？何を持つてきたんだ？」

「ワインー」

そう言いながらワインを見せてくる。

どうやらロマネコンティらしい・・・ところどころあつたんだな。

「いいのか？」

「お姉様には許可をもらつたから大丈夫ー！」

「ならないか」

「あら、ここにあつたロマネコンティは？」  
「あ、分かりません」  
「・・・フランね？」  
「おやべく

とか言つてゐるから許可貰つてないんだろうなーとか思いながらも、すでに飲んでしまつてゐるので共犯だつたりする。  
なので全力でスルーする。

といつより「飲むより語られる事の方が多い」といわれるだけあつて幻想入りしたか？

いやいや、それはないな。  
・・・まあいい。今は楽しもう。

「龍斗」  
「ん？ 瞳夢か」  
「楽しんでる？」  
「ああ、まあ今はフランとだがな」  
「やう・・・」

ん？ 何故少しだけ不機嫌そうなんだ？

「何かしたか？ 僕」  
「いいえ、別に（無自覚に）フリグ立て過ぎよ・・・」  
「大半が好意持つてるじゃない！（）」

ん？ 理不尽な怒りをぶつけられた気がする。

そういうえばあの事はもう靈夢や魔理沙には話した。

あの人格が裏の人格だという事、人格と言うよりはただの衝動の塊みたいなものだとも。

まあそんな俺でも認められたんだ・・・頑張るしかないだろ?

「どうかした?」

「いや、靈夢は優しいと思つてな

「!?

ん?物凄く真っ赤になつたな。

「あ、当たり前じゃない!私はいつだって優しいわよ!・・・あんたには特別だけど・・・」

「何か言つたか?」

「な、何でもないわよ!――」

そういうながら遠くへ行つてしまつた。

「なんだつたんだ?」

「・・・お兄様つて鈍感なんだね」

「?」

「・・・(お姉様も咲夜も私も苦労しそうだなあ)、一緒に協力しようかな?」

何故だらつか・・・フランが恐ろしい事を考へている気がしてきた。

「さあて!もつと飲めよ龍斗!」

「魔理沙?完全に酔つてるな?」

「酔つてないぜ!まーだまーだ飲めるんだぜえ!..!」

魔理沙が暴走した。

しかも俺の口に直接酒を入れやがった・・・。

「大丈夫?」

「あ、ああ・・・何とかな」

もう少し飲まされたら拙かつた・・・。  
さすがにウォッカ一気飲みはキツイ。

「どう? 飲んでるかしら?」

「ああ、幽香か・・・珍しいな、てっきり来ないと思つていた」  
「失礼ね、偶にはいいかも知れないと思つてきたんだけど・・・う  
るさいわね」

「しかたないさ、楽しみたいだろ? からな」

まだまだ増えそうだしな。

「そう、なら私はあつちでゆつくりしておくわ」

「ああ、余裕があれば向かおう」

「ええ、楽しみにしておくわ」

そういうながら幽香は別の場所に向かつた。  
珍しいな本当に。

「・・・(あの人もそつぽいなあ〜)」  
「どうかしたか? フラン、黙り込んで」

「? ううんー 何も無いよ!」

「そうか」

ならないが。

「ほり、あなたももつと飲みなさいな  
「む？ むぐつ！？」

さらに追加で酒を突っ込まれた。  
拙い・・・もうふらふらする。

「あら？ やはり吸血鬼にはきつかつたかしら」  
「な、何を・・・飲ませた」  
「？ ただの吸血鬼殺しよ？」  
「何だ・・・そのピンポイントなのは」  
「大丈夫よ、ただ酔い潰れるだけ、明日には治つているでしょ？」  
「うつ・・・」

くそ・・・さすがに飲みすぎたか・・・意識が・・・。  
その後の事は覚えていない。

^フラン Side ^

お兄様の様子が変わった。

何というか・・・こう・・・保護欲が出てくるような感じ。

「うう・・・」  
「大丈夫？ お兄様」  
「う、うん」

。 大丈夫なのかな？ すゞしく子供っぽくなってる気がするんだけど・・・

「どうやら酔い潰れたようね」

「・・・どうして？」

「何がかしら？」

「どうして酔い潰す必要があるの？」

「本心とか聞きたいじゃない」

この人もライバル・・・お兄様は本当にモテルねえ。

「どうかしたの？」

「う、ううん、大丈夫だよ、お兄様」

「あらあら、まるで兄妹ね（今は龍斗の方が弟みたいに見えないこともないけど）」

「姉妹？」

「いや、兄妹と言つたのだけど・・・」

お兄様が弟？

だって今のお兄様は年上には見えないもの。

「どうかしたの？フランお姉ちゃん」（首傾げ）

「！？」

か、可愛い！？

何故か小さくなつてゐるから尚更！

「あら」

「あ～！～フランのやつー龍斗に抱きついてやがるぜーー！」

「魔理沙・・・潰すわよ、手伝いなさい」

「お、おつ」

あつちで巫女と白黒が騒いでるけど知らない！  
今は・・・、

「うわあ！？」

「やめーっと戻れしね。」

可愛すねだよ～！

「あーあー、  
靈夢が大変な事になつてゐるわね……」

お、落ち着けって靈夢！」

落ち着いてるわよ? たかこ離シナカイ

「我叫歐吉桑，是個普通的上班族。」

アアア……ソウネ、魔理沙……旱ヶ離シナサイ

卷之三

まあいいよね！今はお兄様を愛でるだけ！

「クラハーメン」

「ええ」

・・・いい度胸ね、咲夜、龍斗をこっちに

「うの」　日　講　さ　十　か　好　機

咲夜に時を止めてお兄様を運ばせるなんて！

「世の中勝つた方が正しいのよ」「むう～、なら取り返すもん！」

「あら、姉に勝てるとでも？」

「勝つもん！そしてお兄様を取り戻す！！」

こうして久々？の姉妹喧嘩が始まった。

お兄様のおかげでこんな風に楽しめるのだから感謝だね。

♪フラン Side end ♪

次の日。

「くう・・・頭が割れるように痛い」

『圧倒的に飲みすぎましたからね』

「あれから何があつたんだ？」

『特になかったですよ（マスターの可愛い姿は永久に保存です！）』

「そうか」

それよりも・・・何故周りはこんなにカオスなんだ？

『それはマスターのせいでもありますけどね』

「何か言つたか？」

『いいえ

それよりも片付けだな。

そう思い方付けを開始した。

実は前日の出来事が新聞になつてるのは気づきもしなかつた。

まあ後で某幻想郷最速TOP HANASHIを高町式で行つたのは余談。

第10話 弱かつたなら上を取らしてあがけばいい、強かつたなりそりなる上を取らせる

後書き「コーナー！！」

龍「遅い」

テストだからね。

龍「？」

学校でさ、今テスト中なんだよな。  
しかも3科田落とせば即アウト。

龍「・・・」

まあ1～5まで選んで答えるやつだからまだマシだけじゃな。

龍「そうか」

なので次やランプ的な転生も遅くなるかもです。  
申し訳ない。

龍「さて、感謝「コーナーだ」

メガネ様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！！

龍「次回は早ければ水曜、遅ければ土曜になる、すまないな」

でもその分頑張りますのでゆっくり待っててくださいね！！

龍「まあ待つててくれる人がいるかどうかだがな」

言わないで！挫けそうになるから！

龍「ならないだろう？」

俺のハートはガラスだよ！？

龍「ふん、どうせ防弾ガラスだろ」

違つからね！？

龍「まあどうでもいい、ではな、次回で会おう

ひでえ・・・では！

## 第1-1話 世のためだひづが向だひづが、それで誰かを泣かせてしまふ

今回から少しの間日常編です！

今回も遅くなりすいません！

今回も駄文ですが、楽しんでもらえたたら幸いです。

## 第1-1話 世のためだりうが向だりうが、それで誰かを泣かせてつゝ世話をねえ

異変が解決し、宴会も終え、ようやく落ち着いた今日の頃・・・  
ようやく落ち着いたので今日ほんびつと思ひ、横にならつ  
とすると、

「お兄様～！」「  
ガフツ！」

いきなりフランにタックルを決められた。  
普通の人間なら即死なんだが・・・。  
まあそれはいいとして、よくはないが、

「何か用か？」  
「遊ぼー！」

ああ～弾幕じつこか。  
暇だからいいか。

「いいぞ」  
「やつたーじゃあ始めよー！」  
「ああ」

フランとの弾幕じつこをその後、3時間にかけて行った。

「楽しかった～」「  
「そうか」

さすがに狂気がないと考えて行動していくから厄介だな。

「さて、弾幕」<sup>ハマツカ</sup>が終わったことだし寝るか」「寝るなー。」「ガフツー。」

いきなりとび蹴りをかますな、靈夢。

「あんた達が暴れた所為で神社がこんなにボロボロじゃないー元に戻しなさい！」

あ〜確かにそうだな。  
よし、

「分かった、まあすぐに終わらせる」

そつ言いながら大嘘憑きでなかつたこと<sup>オールフレイクション</sup>ある。

「え？」

「ほら、終わつたぞ」

「・・・便利ね」

確かにな。

「お兄様！」

「どうかしたか？」

フランが呼んできたので返事をする。

「お姉様が呼んでるから来てー。」

「お姉様が呼んでるから来てー。」

「分かつた、靈夢、出かけてくる」

「ええ、帰つてきなさいよ」

「勿論だ」

さて、向かうか紅魔館。

さつそくフランと一緒に向かつた。

「で？門番は仕事を何故していない」

「い、いえ！決して寝てた訳では！」

到着すると門番・・・美鈴が寝ていた。

咲夜に怒られるが？

「へえ・・・寝てたの」

「え！？」

サクツ

「お待ちしておつきました、お嬢様がお待ちしておつります

「や、そうか」

美鈴はスルーか。

「お姉様は部屋にいるの？」

「はい」

「なら先に行つてるねー」

「ああ」

何か用でもあるのだろうか。

「（お姉様も多分お兄様の事が好きだろうし・・・協力しても頑張らないと！）」

何故だらうか・・・嫌な予感しかしない。

「では向かいましょう」

「あ、後で図書館に向かっていいか？」

「はい、後でパチュリー様にも言つておきます」

「ああ、ありがとう」

「い、いえ」

何故赤くなるんだろうか・・・まさか病気になつているのか？

『（救いようがないですね・・・マスターは）』

何故か馬鹿にされた気がする。

「着きましたよ」

「ああ、入つていいのか？」

「はい、お嬢様には伝えていきますので」

「そうか」

「では、お茶を入れてきますので」

「ああ」

そういうながら歩いていった。

まあ時を止めて俺は動けるからな。

「ユリリア、入つていいか？」

「ええ、いいわよ

許可を得たので入ることに。

「用とはなんだ?」

「ええ、龍斗、ここで働くつもりはないかしら?」

「何故?」

「理由は簡単よ、一つはあなたが気に入つたから、もう一つは咲夜の負担を軽減するため

「なるほど」

「アリヤはきちんと考へているらしい。

「それは神社からでもいいか?」

「ええ、別に構わないわ(本当は住みこみで働いて欲しかったけど・

・仕方ないわね)」

「なら受けよう、何をすればいい

「基本は咲夜の手伝いやフランの執事よ、勿論私の執事もしてもら

うわ」

いきなりハードな気がする。

まあ可能か不可能かを問われたら可能と答えるがな。

「それはいつからだ?」

「なるべく早い方がいいわね」

「なら来週からでいいか?週4日で

「ええ、それで構わないわ」

「なら決定だ、で?用件はそれだけか?」

「む、会いたいと思うだけじゃ駄目かしら」

「?物好きだなレミリアも」

「やつしたのは貴方よ？」

「どういう意味だ？」

「・・・はあ～やつぱり鈍感ね、それ自体罪じやないかしら」

何だ？それは・・・意味が分からぬ。

「お兄様～！～！」

「うお～？ど、どうした？」

「お兄様の能力ってどんななの？」

能力？

「うん、お兄様の能力ってどんなのかなあつて思つて」

「確かに」

そつこえぱどつなるんだろうな。

「呼ばれれば即参上～ゆかりんよ～！」

「呼んでないんだが」

いきなりスキマから紫が現れた。  
確実に待機していたな？

「龍斗の能力は二つ」

「二つもあるの！？」

一つは想像つくが・・・。

ところより何故こんな事に？話に脈略がない気がするぞ？

「そんな事はどうでもいいわ、能力を言つて頂戴」

「むう・・・いいわ、一つは『空想を具現化する程度の能力』でもう一つは『ありとあらゆるものを使いこなせる程度の能力』よ」

なんじやそりや。

「チートぐさくないかしら?」

「確かにね、でもこうだから仕方ないじゃない」

でも定義が中途半端すぎる・・・せめて武器はとか細かい設定がないとわかり辛いだろうが。

「じゃあね、龍斗もマヨヒガに来なさいよ?」

「ああ、気が向いたらな」

「ふふ、楽しみにしておくわ」

そういうながら紫は戻つていった。

「さて、もうそろそろ図書館に向かつよ」

「そう?なら私もついていくわ」

「私も~」

「フツ、別に構わない、じゃあ行くか」

「「うん~(ええ)」」

こうして図書館に向かつた。

「で、こんなに賑やかなのね」

「ああ、すまないな・・・また魔理沙に本を貸してたのか?」

「ええ、あの子すぐに読んでるからすぐに取りに来るのよ、まあき

ちんと返してくれてるからここだけれど

「ならよかつた」

『ひつやう魔理沙は約束を守つていろひじい。

「パチュリー、何か手伝える事はないか?」

「ならその本を持つていつてくれるかしり~。」

「ああ、別にいいぞ」

「何処に仕舞えればいいかはこの子が教えてくれるわ

「小悪魔といいます、よろしくお願ひします」

「ああ、龍斗だ」

「存じてますよ、パチュリー様からよくお聞きしますから

「こ、こあつ!//」

「?」

何で赤くなるんだろうか?

『・・・駄目ですね、救われなさすぎです』

クロスのも酷い言われようだ。

「では運びましようか」

「ああ」

本が目の前に50冊ほどある。

どんだけ出したままにしておいたんだろうか。

本の内容も、

『誰でも出来る黒魔術』これで好きな相手もイチ口口編一』とか、  
『?でも出来る簡易魔術』とか他にも色々あるな。

「力オスだな、本の種類が

「ええ、でも楽しそうに読むのでつい」

「確かに、楽しそうなのは止め辛いからな」

「ええ」

そう喋りながらも作業は続けていく。

どうやら多く見えた本も一人でやるからかすぐに終わつた。

途中写真が見えた気がしたが、パチュリーに全力で妨害された。何の写真だったのだろうか。

「（言えない！龍斗の写真なんて・・・色々際どいものまで集めたのに！主に鴉天狗のおかげだけれど）」

何故だろ？・・・鴉天狗と肉体言語で話をしなければならない気がしてきた。

「！？」（ブルッ

何処かで某鴉天狗が身震いをした。  
さて、

「終わつたが・・・どうする？」

「今日はもう戻つても構わないわ、どうせ来週から忙しくなるのだからね」

「そうか」

なるべく優しくしてほしかったんだが・・・しかたないが。

「優しくしてくれよ？」

「！？／＼／＼

「パチュリー！？」

どうして倒れたんだ？

「ふつ・・・私の生涯に一片の悔いなし！」

パチュリー・・・何故知っている？

「きょ、今日は早く戻りなさい、パチエがこんなだし・・・襲われ  
かねないわよ？」

「あ、ああ、ではな、今日はもう戻る」

今日はもう戻る事にした。  
パチュリーが怖いからな。  
こうして一日は終わった。  
靈夢に紅魔館で仕事をするというと、絶望したような顔をしたが、  
神社から通つと言つと、かなり安心していた。  
何故だ？

第11話 世のためだらうが何だらうが、それで誰かを泣かせてりゃ世話をねえが

後書き「一ナーバー！」

龍「死ね」

龍「遅すぎるだろ？」「

す、すいません

龍一 理由は？」

テストの結果が酷くて……

龍一

てには感謝一々ナリ！

る 龍一様、八雲葵様、Jamm様、メガネ様、ケルベルス様、感想感謝す

といつより誰が誰か理解できるよつに書いていいんだらつか。

龍「無理ダナ（・×・）」

ちよつ！？

龍「後コイツが旧作のキャラを2キャラまで出さうとしている、よつてアンケだ、誰がいいか答えてくれ」

期限は次回更新まで！

龍「答えてくれるといいな」

デスヨネー。

龍「次回の更新は一応水曜か木曜予定だ」

ルーニアのEX化はもしかしたらオリジナルの異変で出るかもです。

龍「ではな」

では！また次回！

## 第1-2話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』は！ 「自分を乗り越える

今日は能力の確認のため、東方成分が低め・・・寧ろ皆無といってもいいかもしません。  
何で書いたんだろう？

## 第1-2話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』はー『自分を乗り越える

能力が判明してから数日。今日は特にする事も無く、暇なので、能力の確認でもしようつかと思つた。

まあ『空想を具現化する程度の能力』は分かつてゐるから大丈夫だが、『ありとあらゆるものを使いこなせる程度の能力』は基準が分からぬからな。

武器は使えるんだろ？

「色々試してみるか」

『どうするんですか？』

「何、能力の確認をな」

『そうですか』

『そういえば・・・

「空想のほうは何処まで出来るんだろうか」

『試してみては？』

「それもそうだな」

といつ訳で、結界を張り、確かめてみる事に。

「人は呼べるんだろうか」

呼べるのならなのは達を呼べるんだが。

『関わりが深くなれば可能みたいですね』

『そうか・・・』

なら呼べないな。  
呼べるのが誰か確かめてみるか？

「まずは・・・七夜だな」  
『ぎりぎり呼べますね』

「次は・・・セイバーとギルガメッシュ』

『何故？』

「何となくだ」  
『他には？』

「そうだな・・・バルバトスで』

『え！？』

「これくらいでいいか。

「よお、あんたは無事だったみたいだな」  
「ああ、お前も元気そうだな」  
「ああ、殺せたのは脳髄共、だけだぜ？まったく、参ったねどいつも  
「クク、なら殺し合おうぜ？」  
「へえ？アンタからその言葉が聞けるとはな・・・いいぜ、楽しみ  
にしておくとしよう」  
さて、これで七夜は大丈夫だな。

「「」は・・・はつ、何故此処にあなたがいるのです！」  
「ふむ・・・何故かはわからんが・・・雑種、理由を知っているな  
らば答えよ」  
「俺が呼んだ、以上」  
「何？貴様のような雑種が我を呼んだだと？笑わせる・・・貴様ご  
ときが我を呼び寄せるとはな」  
「事実だから仕方ないだろ？」

「私達にどうしろと？」

「何、闘ってくれるだけでいい、俺はまだまだ弱いからな・・・強

くならないといけないんだ」

「ですか・・・いいでしょう、相手になります」

ハハ  
糸和レモ

「ああ、感謝する」

さて・・・後はバルバトスなんだが。

「なあクロス」

『なんでしょうか』

他の気のせいに、おにぎりハリハリおにぎりに、おにぎり

『ハハ、安心してくださいマスター、気のせいではありません』

面倒だな 才1

ふるふるああああああああああああああ

「おつー!? でかい声だな。

さつさと離れよ。

七  
九

卷之三

「いいや、お互に燃えぬきよつせー。」

最初に七夜と戦う。

卷之二

——閃走・六鬼——

相手から蹴り上げが飛んでくるが回避する。

「まだまだ！」

——閃鞘・七夜——

消えたと思わせるスピードで上に移動し、斬りつけてくる。

「無駄だ」

——閃鞘・八穿——

スピードを上げ、一太刀入れる。

「クク、喰らうかよ！」

——閃走・水月——

移動用の技によって避けられてしまう。

「なら・・・捌く！」

——閃鞘・一風——

相手を掴みにかかる。

「ちつ！斬刑に処す！」

——閃鞘・八点衝——

相手からは八回の斬撃が放たれる。

「ハハツ！ 楽しそうだぜアンタ！」

「そりやどうもつ！」

——閃鞘・八点衝——

——閃鞘・八点衝——

互いの八回の斬撃が相殺し合つ。

「クク、もつとだ、もつと楽しもつぜー！」

「ああ、そうだなつ！」

——閃走・六兎——

——閃走・六兎——

互いに蹴り穿つ。

「どうした！ まだまだアンタは本氣じゃないだらつー本氣で来いよ

！」

「勿論だ」

——閃鞘・迷獄沙門——

七夜の動きがスローに見える・・・だが、

「『』たちも負ける訳にはいかないんでね！」

——閃鞘・迷獄沙門+極死・七夜——

お互に交差し、斬り合つ。

だが、七夜より俺は後ろにいて、すでにナイフを投げる体勢に入つてゐる。

「くつ！」

「極死・・・七夜！」

「キツ！」

相手の首の骨が折れる音がした。

「クク、やはり勝てないか・・・けどやつぱ楽しすぎだつてアンタ。  
・・紅赤朱と同じ・・・いや、それ以上だ、また殺し合いたいね」  
「・・・偶になら呼ぶさ」  
「クク、そうか、なら次まで寝ておくとするか、じゃあな」  
「ああ」

これで七夜との戦いは終わつた・・・次は、

「ようやく私達の出番ですか」  
「待ちくたびれたぞ、雑種」  
「すまないな、さて、始めるとじよつ  
「大丈夫なのですか？」  
「ああ、大丈夫だ」  
「では、始めましょつ」

セイバー・・・アルトリアとギルガメッシュとの戦いが始まった。

「 ゆぐぞ？上手くかわせよ？」

「 行きます！ ハアツ！！」

セイバーは剣で、ギルガメッシュは王の財宝から宝具を飛ばし、攻撃してくる。

ならば、

「 連続投影・・・」

空中に投影魔術によつて複製された宝具を待機させる。

「 なつ！？あればシロウの！？」

「 賦作・・・賂作者め

「 一斉掃射！」

王の財宝は「これで何とかなるかな？」

「 いいだろう、ならば見せてやろう・・・起きよ、ニア」

ちつ・乖離劍工アカ！

「 ならば私も全力で行きます！」

そう言いながらセイバーは風王結界を解除した。  
約束された勝利の剣はなんとかなるが・・・天地乖離す開闢の星は  
面倒だ。

仕方ない。

「 後より出て先に断つ者」  
「 天地乖離す開闢の星！！」

アンサー

エクスマ・エリシュ

エヌマ・エリシュ

インビジブル・ニア

ゲート・オブ・パピロン

ゲート・オブ・パピロン

「斬り抉る戦神の剣！！」

斬り抉る戦神の剣によつて、相手の攻撃はキャンセルされ、心臓に攻撃がヒットする。

さすが因果を歪める事が可能な宝具だ。  
これでギルガメッシュは大丈夫かな？  
後は・・・

「やりますね・・・ですが」

「ああ、こつちも負ける気はないんでね」

「では・・・行きます！」

「来い！」

相手はもう準備が完全にできている・・・ならこつちは、

「これで行こうか」

「はああああああ！！約束された勝利の剣！！」

「転輪する勝利の剣！」

互いに持てる全ての魔力を込め、放つ。  
約束された勝利の剣が星の光で両断するなら、転輪する勝利の剣は太陽の灼熱で燃やし尽くす攻撃だ。

「はああああああああああ！！」

「負ける・・・ものかあ！！」

「なつ！？」

セイバーを転輪する勝利の剣の攻撃が飲み込む。  
よし。

「俺の勝ちだ！」

「ええ、私の・・・負けです、またお相手願えますか?」

「ああ、勿論、こつちからお願ひするよ」

一  
で四〇・・・・おたかにめじるべ

そういうながらセイバーは消えた。

そこで、いよいよギルがメラ・シニに気がついた。消えてたな

さて・・・後は、

-  
な  
あ

『何でしょうか?』

迷にてしづく

黙りますよ? 戦いたくないだよ。』

呼んだ俺が言ふのもなんだか……面倒だ

「確かには…」

なら頑張りますか。

まあ・・・金色に光っているバルバトスとか普通は無理ゲーだけどな。

「うるさいああああああああああああああ...」

גַּעֲנָה

「俺の本能がア叫ぶのさあああ責様を殺せえええとおおおおーー!」

「発音がおかしく……氣のせいか?」

「余裕ううつかましてんじやあああねえええー！」

—ヘルヒート—

紫色の炎を大量に飛ばしてくる。  
追尾してくるため、迎撃するしかない。

——霧符「ミスト・ボディ」——

体を霧に変えて、迎撃にする。

「術なんぞ使つてんじゃねえ……！」

——グランバーナシュー——

ええ～お前が言つなよ・・・。

地面が割れ、大量に襲つてくるのを避ける。  
避けていると、ポケットから、

「ゲツ、グミが落ちた」

ガシッ！

えつ？

「ア イ テ ム な ぞ 使 つ て ん ジ ゃ ね え ！

ちよつ！？使つてない・・・落としただけだろ！？

思いつきつ掴まれ、叩きつけられ、斧で切り裂かれた。

——分身「空蝉」——

スペルカードで何とか避ける。

あぶないあぶない。

といつより鋼体が9999は反則だと思つんだが？

とこつより・・・何故こつなつた。

俺は普通のバルバトスを呼んだつもりなんだが・・・。

『バルバトスに普通も何もあつませんよ』

「それもそうだな」

れど、余裕がなくなつてきたな・・・早く終わらせたい。

「俺の背後に立つんじゃねえ！――

――バック・スナイパー――

げつ、いつの間にか後ろにまわつてたな。

「ちーーー！」

――必然「キングクリムゾン」――

相手の攻撃を避けるため+反撃のために放つ。

「ふるううああああああああー！」

「ひめやー」

――煉獄「アマテラス」――

相手を燃やし尽くすかのような弾幕を放つ。

「追加」

——魔神「死狂い」——

相手に即死攻撃を大量に浴びせる。

# ――ジエノサイドブレイバー――

やはりマダ無理が

相手の圧倒的なレーティングを過ぐたから考える

「 irenājūdā? 」

——絶望「鮮血の結末」——

もうやうやくに即死属性がある、このスペルには耐え辛いらしい。

貴様に朝日は拝ませねえ！！

——ポイズニックヴォイド——

地面に魔法陣が現れ、何かが出でくる。どうやら毒もあるらしい。

まあ避けたがな。

# ——ワールド・デストロイヤー——

斧を振り降ろし、目の前がオーラみたいなもので染まる。これは・・・避けきれない！

「ガハッ！！」

いてえ・・・死ねないのは辛いな。

「モウ我慢シナクテモイイヨナア、ハハハ、ククク、ハハハハハハ  
ハアハハハハハハハハハハハハハツ！！」

四百一十一

— 概念「絕對干涉」 —

絶対に逆らう事を許さない攻撃がやつを襲う。これは即死技・・・コレで終ワリダ。

「あ～ん！ あ～んそおおおおおおお～～～」

終わったか・・・飲まれかけたが大丈夫みたいだ。

「ここを元に戻そうか」

『そうですね、じゃないと靈夢さんが鬼女状態に・・・』

「それだけは勘弁だ」

そう言いながら、直して行く。

「ふう・・・終わったな」  
『はい、もう勘弁ですね、金色のバルバトスは』  
「確かにな・・・疲れた」

結界を解く。

「龍斗？何でそんなにボロボロなのかしら？」  
「少し修行してた・・・疲れたから寝ていいか？明日は俺が当番するから・・・」  
「え、ええ、いいわよ」

よかつた。

もう・・・限界。

「あやつ！？りゅ、龍斗！？／／／

「ＺＺＺ・・・・」

「・・・はあ～、まつたく・・・寝るなら布団で寝なさいよ

靈夢の声が遠くに聞こえる・・・相当疲れが溜まつてたみたいだ。  
うん・・・ゆづくつ休もう。

「あ～、『イツ・・・寝顔はこんなに可愛いの・・・なんでいつ  
もは凜々しいのかしら？』

おやすみ・・・なさい・・・。  
そして意識を飛ばした。

## 第1-2話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』はー『自分を乗り越える

後書き「一ナーナー！」

龍「今日はかなりカオス？ だつたな」

何故かバルバトスにしちゃつたんですね~。

龍「迷惑なだけだがな」

ハハハ、すいません。

龍「そして遅くなつた理由は？」

少し微熱がでまして。

まあ37・1度程度だつたので様子見してたら治りましたが。

龍「そうか、なら大丈夫なんだな？」

ええ、なのでネギまの方は早ければ今日、遅くとも明日には投稿できるようになります。

龍「間に合つといいな」

ええ。さて、感謝「一ナーナー」です。

龍「メガネ様、感想ありがと」

感想が減ってきて少し自信が減った今日この頃。

龍「元々なかつただろうが」

まあ感想がなくなつても最後までやりぬきますが。

龍「それでいい」

次回は・・・おそれく来週中になるでしょう。

龍「毎回遅くなつてすまないな」

次回も頑張りますので、見てくれると嬉しいです。  
見捨てられないように頑張ります。

龍「ではな、次回で会おう」

ではではー

## 第一三話 やれやれなにて、匂いへのこゝに眞葉に附つてこよこよせん

今日は永遠亭に向かいました！

理由は本編で！

まあ伏線みたいなものはこくらか置こうとしたのですが・・・

辛いですね！

それではござれ！

## 第1-3話 やればやれなんて、匂いのこに眞葉に附つてこひませんよ

バイト?が決まって数日。

今日は靈夢達もどこかへ出かけたので、俺も出かける」と。」「まあ出かけるのも限られてるがな。

少なくとも今は向日葵畑にはいかない。  
面倒だから。

だから今は・・・、

「迷いの竹林も面倒だつた・・・」

『当たり前ですよ、迷うのですから』

「油断した・・・といふか嘗めてた、前回は簡単にいけたのになあ

』

『あれは相手が氣づいて迎えが来たからでしょ』  
『元に

「それもそうか」

妹紅とも会つたが、やつぱり話しやすいな。  
話が弾んだ。その横の慧音は怖かつたが。  
うん。何故あんな顔をするか・・・分からぬ。  
しかもその視線の殆どは妹紅に向けてだし。

「さて・・・もう少しそう着きそうなんだが・・・」

『そうですね』

「おや?また落とし穴・・・因幡が仕掛けた優曇華が引っかかった  
な?」

『分かりやすい構図ですね』

『まったくだ』

「ちょっと?分かつてんなら助けてくださいよ!?」

「だが断る

「ちよつ…？ 酷いですよー。」

「まあ冗談だ」

「冗談に聞こえないですってー。」

セツの言にあいながら落とし穴から優姫華を出す。

「まつたぐ、てゐのやつ…後で覚えておきなさい…」

「引っかかる方も引っかかる方だがな」

「ひつー！」

まあ仕方ないか…よくも悪くも素直なんだし。

「セツ、迷つたから連れて行つてくれ」

「ええ！？ ベ、別にいいですけど…前回は迷つてしませんでしたよね？」

「…・前回は前回だ」

誰でも迷つといわせ迷うんだ…。

「はは…・い・ですよ、つこつて来て下やー」

「了解した、すまないな」

「い、いえいえ！ 師匠からも言わわれてますからー。」

「永琳から？」

「はい、龍斗さんはさつと道に迷つてんだからいろいろ案内しながら、と  
なさい、と  
「やつか」

絶対態と俺が迷つようとしてるな…。

「龍斗さん？」

「どうかしたか？」

「いえ、もう着きましたよ？」

「やつか」

「どうやら考え事をしてこる間に着いたらしく。

「師匠へ龍斗さんを連れてきました～！」

「そう、お疲れ様、龍斗は私が案内するからやつかは任せるわ

「了解です！」

そう言いながら優姫華はどうとかへ行つた。

「何か用かしき？」

「ああ、一応薬を貰おうと思つてな」

「あなたには必要ない・・・ああ、やつこの事」

「理解が早くて助かる」

「いいわ、少し待つてもりあいかしら？今から調合していくわ

「感謝する」

「いいわよ、その代わり姫様の相手をお願いするわ

「・・・了解した」

「どうせゲームだろうからなるべく格ゲーがいいな。

「じゃあさつやくせるわよー。・・・ああ

輝夜がきたのでさつやくゲームを始める事に。  
最初は、

「私はこのキャラで行くわ！」

「なら俺は『レ』だ」

「ちょっと！？ト〇なんて卑怯よー開幕小パンで終わるじゃない！」

「そんな輝夜はラ〇ウか、なるほど・・・剛VS柔だな」

「・・・まだよ、まだ終わりと決まつた訳じゃないわー！まだ諦めない！」

「せめて痛みを知らず死ぬがいい」

「ちょっとww」

デデデザタイムオブレドビューシヨンバトーワンデッサイダデス  
テニ  
ナギツペシペシナギツペシペシハアーンナギツハアーンテンシヨー<sup>1</sup>  
ヒヤクレツナギツカクゴオナギツナギツ  
フウハアナギツゲキリュウニゲキリュウニミヲマカセドウカナギツ  
カクゴーハアーテンシヨウヒヤクレツケンナギツハアアアアキイー<sup>2</sup>  
ンホクトウジヨウダンジンケンK.O.

「命は投げ捨てるもの」

「・・・○・～」

バトートウーデツサイダデステニー セツカツコーハアアアアキイ  
ーン テーレツテーホクトウジヨーハガンケンハアーン  
F A T A L K . O . セメティタミラシラズニヤスラカニシヌガ  
ヨイ ウィーントキイ

「ふつ」

「つ、次はト〇禁止よー」

「了解した」

「私はもう一度ラ〇ウよー」

「なら俺はジ〇ギだな」

「ふつ！勝ったわね！」

「甘いな」

しばりくすると、

「星が溜まつた…今よ…」

「テンニメッセイ！」

「甘い」

ヤ、ヤメテクレー

「な、何ですって！？どうして一撃必殺が避けれれるのよ…」

「さてね、まあこれで終わりだ」

ミーククヤキタダレローフATAL K.O.

「○」「×」

「まだまだ甘いな、半人前の技では俺は倒せん

「な、なら別のゲームよ！」

「いいぞ、次はどうする」

「次はメ〇ブランよー」

「了解

「私はこれね！」

「秋〇か、なら俺は七〇かな

「くっ、クレセントムーン…なら私はハーフムーンよー」

「いけー！そこよー。」

「甘い、遅すぎるんだよー。」

「今よー。」

「さて、終わらせるか。」

「これが当たれば私の勝ちー。」

「当たればな。」

「極死・・・七夜！」

## ラストアーケフュニッショ

やれやれ、まいったねどいつも

「これで俺の勝ち」

「も、もう一回よー。」

「了解した」

「今回はランダムで選びましそう、それならフュニアでしょ？」

「そうだな」 運 A +

「あランダムよー。」

そして互いのキャラが決まる。

「ふうん、白レ〇ね、少しキツイかしら（まああつちほきつともつ  
と酷いキャラが・・・！？）」

「ふむ、バグバージョンの姫ア〇クか」

本来はイクリプスしかないのがクレセントになつたやつだ。

「コイツ・・・運もバグだつたの！？で、でも使い慣れていないはずーなら・・・勝てる！」

結果。

「ま、負けた・・・完膚なきまでにー。」

「ま、楽しかつたんじゃないの?」

「くうーつ、次は負けないわよーー。」

「また今度な」

こうして輝夜との遊びは終了。  
永琳から薬を貰いに向かつた。

「お疲れ様、悲鳴がすこかつたのだけれど・・・何をしていたのか  
しら?」

「ゲームだよ、格闘ゲーム」

「なるほどね、ああ、これが薬よ、あまり使いすぎないでね?」

「ああ、分かっている、金はこれで足りるか?」

「え、ええ、ところで・・・何故これを?」

「分かっているのではなかつたのか?」

「分かっていても答え合わせくらいはしたいと想つものよ

「そういうものか」

「そうよ、で?」

「・・・はあ」

「どうやら言つしかないようだ。」

まあたいした理由ではないから大丈夫か。

「最近自分の中に狂氣が増えたんだ、それも2倍や3倍なんかじゃない」

「どれくらいかしら?」

「30倍だ」

「・・・それで？」

「抑え辛くなつてきてな、だから今回は薬を頼んだんだ」

「そつ、だから狂氣をかなり押さえ込む薬を要求したのね？」

「そつだ、押さえ込むつもりではいるが・・・耐え切れなければ大変な事になるからな」

「保険をかけたわけね」

「そつことだ」

元々狂氣は人一倍たまりやすかつたからな。

元々狂つてたんだろ？

さて、

「今日はもうそろそろ帰るとしよう」

「あら、もう帰るのかしら」

「ああ、今日は俺が当番だからな、料理の」

「そつ、次は？」

「次はおそらく薬が切れたとき、もしくは異変が起きた時かな

「そつ、また会いましょう、うどんげー送つてあげて」

「了解です！龍斗さん、一いつぢです」

「ではな、また会おう」

「ええ」

こうして俺は永遠亭から神社に戻つた。

靈夢や魔理沙には心配されたが、少し寝れば大丈夫だと伝えた。

『（まあ狂氣が原因なのですからあながち間違いではありませんが）

「まあ少しは楽になるだろ？さ』

』

そう言いながら俺は薬を飲み、布団に入った。

夕食は靈夢と魔理沙と一緒に食べたが、好評だった。素直に嬉しかった。

そう思いながら寝た。

薬の副作用を聞くのを忘れていたのを思い出したのはそれから数分してからである。

第1-3話 やればやれなにて、闇にえのこに眞葉に附つてこひまけませんよ

後書き「一ナーナー！」

龍「遅い」

すこせんでした！！

龍「わて、わつと感謝「一ナーナー」をしろ」

イエッサー！コタ様、雨季様、メガネ様、ケルベルス様、感想あり  
がとうござります！！

龍「次回は遅くなるかもしけない」

いとこに会いに行くんですね、もう少ししたら。

龍「だから遅れるかもしれません、もし叔父から借りいたら更新できる」

次回は薬の副作用による番外のような本編です！  
お楽しみに？

龍「・・・北斗有情破顔拳

ひでふつー

龍「ではな

## 第1-4話 死にそうへんなとのりとせねえ、だつたらじめえ・・・・生きてるじや

最近戯言シリーズを読み始めました。  
いいですね、戯言シリーズ。  
今回は番外のような本編です。  
次から異変編に入りたいと思つます。

## 第14話 死にそうへんなの！」とはねえ、だつたらめえ・・・生きてさじま

朝起きたら女になっていた。

いきなり何を言つてゐるのかと思つだらうが俺も何を言つてゐるかわからねエ・・・超スピードだと超能力だとそんなチャチなもんじゃ断じてねえ・・・もつと恐ろしいモノの片鱗を味わつたぜ・・・。

「さて、現実逃避はここまでだ、なぜ女になつてゐるんだ・・・」  
『おそらく永琳さんの薬の副作用ですね、そう書いてありますし』  
「な・・・に?書いてあるだと?」  
『はい、これに』  
「どれどれ・・・」

↙の薬を飲むと性別が反対になります・・・気をつけね ↘

この文字は大きさが2mmだった・・・見つけるか!  
しかも つて何だ! つて! バカにしてんだろ!  
間違いなく喧嘩を売つてゐな? よし、なりその喧嘩買つた!

『お、落ち着いて下れーー相手の思つ壺ですよーー。』  
「それもやうが・・・ならどうするか」  
『とりあえず永遠亭に向かうのはいいと思こます、その後の行動で  
すね』

まったく・・・ややこしい薬をよこしたものだ。

「つるせこわね~どうかしたのか・・・し・・・ら?」  
「む?」

靈夢がやつてきた。

まあ今の俺の姿を見れば戸惑うのは仕方ないか。

「もう起きたのか靈夢」

「な、なんで女になつてんのよ、理由をいいなさい」

「理由も何も・・・薬の副作用だ」

「誰が作ったのよ・・・」

「永琳」

「ああ～納得」

これだけで納得されるとは・・・。

ついでに言つと靈夢は永琳とは面識があるぞ？

少し前についてきたからな。

「どうするか・・・永琳のことだから戻らないってことはないだろ

うが・・・」

「どうするも二つするもないでしょ、今すぐ行くわよ、とつちめてやらないと（龍斗が女になつたら不便じゃない、色々と）」

まあ靈夢のいう事には一理あるな。

とつちめないとな・・・ククク。

薬の入つていた袋から紙が出てきた。  
どうやら説明書らしい。

「この薬を飲むと性別が反転します、そのため、もう一つの薬と一緒に服用下さい、なお、もし反転してしまった場合・・・戻るのに一日かかります、だと？」

薬は一種類しか入つてないんだが？

確實に面白半分でやつたな？

これはO H A N A S H Iが必要だな。

というより紙が見つかり辛い場所に入ってる時点で確信犯だ。言い逃れはできません。

まあ犯人は永琳かてゐだらうがな。

6：4くらいの比率で。

「さて・・・行くぞ靈夢、来るなりつこて来い」

「ええ」

そして俺達は永遠亭に向かつた。

早く元に戻るために。

まあ着物が落ち着かないのもあるがな。

さて・・・到着したが・・・永琳かてゐはいるのだろうか。

「いなけりや待つだけよ」

「それもそうか」

「あ、あの・・・」

「どうかしたか？優曇華」

「師匠とてゐならいますよ？呼びましょうか？」

「そうか、なら頼む」

「はい、待つてて下さい・・・師匠、龍斗さんが來ました～！」

「そ、そ、そ、なら呼んで頂戴」

何処か焦っているような感じで呼ばれた。  
どうなるのかを理解したらしい。

「よオ、永琳・・・覚悟はできてんだろオなア！」

「ちよ、ちよっとくらい聞きなさい！私はきちんと入れて渡したわ、抜いたのはてゐでしょうね」

「注意書きはどう説明すんだ？」

「注意書き？」

「コレだ」

そう言いながら二三三で書いてある注意書きを見せる。

「はあ……てゐには後でお仕置きね、御免なさい、私の責任だわ」「……いや、てゐにお仕置きすればいいだけだ……協力しようと」「そう、ならとつておきで行くしかないようね……」「そうだな、地獄を見てもらおつか、もしくは自分の罠に引っかかるつてもらおつか」

「出来るのかしら？」

「出来るか出来ないかじゃないさ……やるんだよ」

「フフ、そうね」

「フフフ（ククク）」

「（今だけアンタに同情するわ……てゐ）」

その後、てゐの姿を見た者は誰もいなかつた。

「勝手に人？を殺さないでほしいウサ！」

「ほう、まだ足りなかつたか・・・クク、まだまだ続けようが」

「そうね、新薬の実験にもちよつといいわ」

「え、じょ、冗談でしょ？」

「「冗談に見える？」」「（ヒツツ）

「う、つい……！」

まあお仕置きも終わつたし・・・ん？内容？聞きたいか？

聞きたいなら止めないが・・・まああえて言つなら普通の人間なら

廃人確定なやつかな？

「これを飲めば少し待てば元に戻るわ」

「少しとはどれくらいだ？」

「大体30分くらいかしら」

「分かった」

すぐに飲んだ。

変な味がする・・・」(つ苦笑が強い)。

「次からこれを一緒に服用すれば大丈夫よ」

「了解、さて・・・靈夢、戻るぞ」

「え、ええ（私来た意味あつたのかしら）」

靈夢が何か考えているが・・・気にしない方向で。

「ではな、まさか2日連続で来るのは思わなかつたが」

「私もよ、まあてゐは任せて頂戴、もうこんなことはさせないわ」

「分かつた、任せよう」

まあ少しやりすぎた感が否めないが。

「じゃあな」

「ええ、また来なさい、歓迎するわ」

こうして無事に薬を貰い、帰宅した。

30分たつたら確かに戻った。

他の誰か・・・特に鴉天狗に見られたら大変だつただろう。まあ見られたら記憶がなくなるまで殴つてたかもな。

『（文さんには後で写真を貰いましょう、そのために協力したのですから）』

「何かよからぬことを考えてるな？クロス」

『いえいえ、滅相もない、そんなことを考えているはずがないじゃ  
ないですか（無駄に鋭い！恋愛関係に持つていけないんですね！）  
この鋭さ！？』

「どうかしたか？」

『いえいえ、まあ今日は疲れたので眠ります』

「デバイスに睡眠なんてあつたのか？』

スリープモードならあるだろ？が・・・。

『私は”特別”ですから！』（ドヤア

なぜだろ？・・・今コイツがどや顔してこる気がしてムカつく。

「まあ寝るなら好きにじり、疲れているならなおさら」

まあいつも働かせてるしな。

『マスター・・・おそれくも少しだけ黒変があります、どうします  
か？』

「どうするも・・・ただ手伝うだけだ」

『そうですか（そう言いながら中心にいるんですよね）』

異変・・・次は何だつたかな？  
確か・・・妖怪桜だつたかな？

『春が訪れなくなるんでしたっけ？』

「多分な・・まあ俺はあまりあのゲームをしていないからな、おぼろげにしか覚えていない」

『ならその時によつて考えましょ、う』

「だな」

もつ少しで異変だ・・何かイレギュラーがあると面倒だな。  
何事も無く解決すればいいが。

第14話 死にそつ? なんのじとはねえ、だつたらてめえ・・・生きてんじゃ

後書き「一ナーニー！」

「…なぜ女に変化させた」

何となく

龍死ね

龍「チツ！感謝」「ーナーだ」

舌打ち！？え、えっと、ケルベルス様、雨季様、メガネ様、感想ありがとうござります！！

「次は異変だが、妖々夢だつたよな？」

多分ね。調べてからだと思うので少し遅れるかもです。

「まあ必ず更新はあるから安心してくれ」

では！また次回！

龍一ではな

## 第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていいくのがー

今回から異変です！

ゆっくりじっくり待つてくださいな。

妖々夢はまつたくプレイしたことがありませんがねーー！

それではどうぞーー！

## 第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていくのが一

あの副作用から大分たつた。

今は春のはず・・・田の前の雪景色がなければ完全に春なんだろ？  
が・・・。

「やつぱり異変かねえ」

「異変だな」

「異変ね」

「なら解決しないとな」

「ええ」

「ああ」

まつたくやる気が見えない巫女と、逆にやる気あふれる魔法使いが  
いた。

「・・・冷えるな」

「さぶいわね」

「冷えるんだぜー！」

いや、魔理沙のは冷えないだろ、むしろ快適な気がする。  
まあ靈夢はさぶいだろうがな。

「ああ～もうー早く終わらせて『タツ』に入るわよー。」

「はーはー、まつたく・・・靈夢は急け者だぜー。」

「いや、じつは冷えていたら仕方ないだろ？？？」

まあまだ冬休みの冷えだからな。  
じつやら春が盗られたらしい。

まあどうしてかと聞かれれば……?としかならぬが。

「わい、わき誰かいた気がするんだが?」

なんか白い人。

「氣のせいだぜ!私は氣がつかなかつたしな!」

「やうね、氣のせいじゃないかしぃ!」

「……やうか」

クロスからは反応があつたつて言われたんだがな……後で謝りつ。

「で?」何処だ?誰かの家っぽいが

「さあ?どうでもいいわよ……」

「やうだな!」

何でだらうか……こいつらからやる氣が見えない。

「ああ~……もつとやる氣出せつて、俺に出来る事なら何でもや  
るから」

「「本当!?」」

「つお!?あ、ああ

墓穴掘つたか?

「わあ!…せみわよ!」

「おつ!」

まあやる氣があるのは良こそで。

「そういえば」

「何？」

「どうかしたのか？」

「どうかしたのかしら？」

「一人増えてないか？」

そう言いながら振り向くと咲夜がいた。

「お嬢様に頼まれたので」

「なるほど、なら協力しよう、その方が効率的だ」

「確かにね」

というわけで協力関係に。

「で？此処はどこかしら？」

「さあ？でも人が住みそうなところだよな、猫とか、犬とか、狐とか」

「そもそも本当に春なのかしら・・・おかしいじゃない」

「迷い込んだが最後！おかしいと思つたら人に聞く！呼ばれて飛び出て・・・」

忙しいなこの子。まあ律儀に全部に反応を返しているのはいいとは思うが。

つていうより・・・疲れ果ててないか？

「最後？」

「出る杭は打たれる・・・か？」

「人じや無いじやない」

「それはさておき、迷い家によつこそ、で、何の用？あ、後聞かれても答えられないけど・・・ゼエゼエ」

うわあ～しんどいんだ。

とこつよりあこづら分かつてやつてるな？

「それくらこじとけ、お前ら遊んでんだろ」「そんなことはないわ

「無いぜ…」

「無いわ

「ならいいが…さて、用件は何かな？」

「こには迷い家、本来なら来れるはずないんだが…来て来たの？」

「ぢりぢりと言われてもな…

「氣がついたり…」

「無意識」

「何となく？」

「気合」

「全員別々…」

まあそれはぢりでもここじやねえか。

「ぢりでもよくなこいんだけどなあ…

「まあ…・・・要是は足止めみたいなものだら…ちつとも終わらせて先に進むぞ」

「「「了解」」

「よ、4対1…ひつ卑怯じやない…」

「こやこや、相手するのは順番だよ、最初は俺だ

そう言いながらスペルの準備をする。

まあ今回はネタスペルのみだがな。

「じゃあいべん！」

「おおーーーー！」

## 戦闘開始

まずは最初に、

——変身「555」——

ダイヤルを打ち込み、ベルトにつけて、変身する。

『Complete』

姿は勿論ファイズ。

「な、何それ！？」  
「？ネタスペカだ」  
「・・・（ネタのほうが凶悪だつたりするのよね）」  
「いべぞー！」

そつ言いながら、俺はファイズフォンを取り出し、入力コード、1  
0 6を入力。

『Burst Mode』

光弾を3連射する。

「うわっ！？」

「やはりコレくらになら避けるか

ならこれで・・・

「次は私だよ！」

——陰陽「晴明大紋」——

いきなり弾幕が飛んできた。  
よけ辛い・・・なら、

——必殺「グランインパクト」——

ファイズショットを「ぶし」につけて、弾幕に殴りかかる。

ドカーン！

「・・・やりすぎたか？」

一応半分に抑えようとしたんだが・・・どうやらその半分で済んだ  
んだが・・・。

「クレータが出来る時点でやりすぎだぜ」

「まったくだわ、まあうちの境内じゃないだけマシだけど」

「・・・紅魔館もこうなるのかしら」

「さ、さてーなら次はこれだよー」

——鬼符「青鬼赤鬼」——

どうやら式紙を使うようだな。  
ならば、

「レベノ！」

# ——必殺「クリムゾンスマッシュ」——

ファイズポインターから円錐状の赤い光を放つて、式紙を捕らえた。その後、とび蹴りを放つ。

ガガガガガガガガ・ドカーン！！

これで式紙は消えたな。

「え、ええ～！？」

——鬼神「飛翔毘沙門天」——

アスリートであるつもりにして、…なん。

「さあちからもそれに応じよう」

—変化「アクセルフォーム」—

デジタルウォッチ型デバイス「ファイズアクセル」のミニショーンメニューをファイズフォンに入れることで、

と音量が鳴り、変化する。

そして、アクセルフォームに変化した。

「な、何それ！？」

「見てれば分かる」

さて、時間がない・・・すぐに終わらせる。

「すぐに終わらせるー。」

「！？」

『Start Up』

準備を整え、発動させる。  
発動させると、10秒間だけ通常の1000倍の速度での移動が可能になる。

まあ・・・要はかなり速く動けるといつ事だ。

「いぐば？遅れるなよ？」

「ふえ！？」

相手の弾幕全てを殴つて消す。

相手の弾幕も数が多いが、一いちもその数だけ殴り飛ばす。  
・・・もつやうやうか。

「終わらせるー。」

——必殺「アクセルクリムゾンスマッシュ」——

相手を全方位からロックオンした後、同時多重的にクリムゾンスマッシュを叩き込む。威力も申し分ないはずだ。

### 『Time Out』

これで終わりだ。

「きゅー」

「ふむ、次に進むか」

「そうね」

「そうだぜ！」

「そうするわ」

こうして一人（前の部分で触れられることなく倒れた人？含め2人）を倒した。

これから少し大変な事になりそつだが・・・まあ頑張るしかなかろうて。

「さあ！先に進むわよ！」

「ええ」

「了解だぜ！」

大丈夫だろ？か・・・先走りそうなんだが。  
まあいい・・・何とかするか。

『さあて・・・何事も異常<sup>イレギュラー</sup>がなければいいが』

『さて、どうでしょうね、不幸か幸か、大凶に選ばれていますからね、マスターは』

『大凶は選ばれたやつの証だが・・・嬉しくは無いね』

『まったくです』

どんな事があつても何とかするだけだがな。

第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていくのが

後書き「一ナーニー！」

龍「なぜファイズ?」

好きだから！

龍一・・・そりが

さて！今回も終わつたから寝る！モウ疲れた――

龍一・・・感謝——「カーリしてからな?」(アイアンケーリ)

龍「次回も頑張つて今週中に没高予定だ」

その前にネギまですけどね~。

「両方頑張らせるので安心してくれ」

俺が安心できない！

龍「しるか」

¥ ( · 〇 · ) /

龍「・・・ではな」

スルーされた！？  
で、つでは！

## 第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけ

今日はステージでいう4ですね。

うん。何故か気を抜いたら弾幕戦が雑に・・・泣きたい。  
こんな駄文ですが楽しんでいただけたら幸いです。

## 第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけ

さて、次は誰だらうか……。

「なあ」

「ん?」

「あのスペカは本当にネタなのか?」

「ああ、正しく言えば、ネタだけ火器や能力を自重しなかつたス

ペカな」

「・・・あの猫には同情するんだぜ・・・」

でも一番加減がきくスペカもあるんだよな。  
まあライダーのパンチとかキックの威力つて洒落にならんがな。

「・・・それより」

「どうかしたのかしり?」

「なぜ雲の上なのに桜が舞つているのか」

「上空の方が暖かいなんて・・・素敵過ぎて涙が出るわ」

「本当ね~、この雲の下は、猛吹雪だつて言つの?」

「まったくだぜ」

「どうか俺の疑問への答えになつていない・・・だからそいつの

子が答えてくれるかな?」

「この辺はこの季節になると気圧が・・・下がる」

「なんかテンションも下がりそうね」

いきなりそれは酷くないか?

「まあ俺達は先に進みたいんだが・・・そこをじいてくれないか?」

「その前に一曲聴いてかない?」

「確かに君達の奏でる曲を聴いてみたい気もあるが・・・またの機会にしたいな、今は忙しい」

「わあ演奏開始よ～、姉さん、やつひゅいなー。」

「フフ、話を聞いてくれません。」

「これで某再翻訳を思い出したやつは負けな？」

「まあ要はここの通りたければぶつ飛びませつて事だな！分かりやすいいぜー。」

「いや、そんな事は言つてないからな？」

「・・・物騒ね」

「それを言える立場か？」

「・・・何のことかしら？。」

「わう思つなりまでは俺の眼を見て血おつな～。」

そこまで露骨に眼を逸らされたとな。

「せういえばアンタ達の田舎は何なのよ」

露骨に話を逸らしたな。

「私達は騒靈演奏隊～、お呼ばれで来たの」

「これからお屋敷でお花見よ、私達は音楽で盛り上げるの」

「でも、あなた達は演奏できない」

「いや、俺は演奏できるだ～。」

ギターとか、バイオリンも一応できるし、ピアノも可能だ。  
頑張ればトランペッタも！」

「私もお花見したいわ

「俺もできるなら参加したいな」

「私もだぜ！」

「・・・私も参加するわ」

「あなた達はお呼びでない」

あれ？俺は目線が外れてる？

「何で龍斗には眼を向けないのかしら？」

「そこの人には呼ばれてるから」

は？なぜだ？俺は面識はないはずだが・・・紫か？  
まあとりあえずは、

「そこを押し通る」

「協力するんだぜ！」

「私はバス、龍斗で十分じゃない」

「私も様子見します、いなくても十分そつなので」

・・・本気かよ。

いや、本気で下がりやがった。

・・・何とかなるか？

「私達の曲を聴けえ！..」

「それは別人の台詞なんだが・・・」

なぜ知っている？

まあそんなこんな（どんな感じだ）で弾幕勝負が始まった。

ついでに言つと、俺の通常弾幕は星とナイフだ。

咲夜と魔理沙が喜んで、靈夢が不機嫌だったのが不思議だった。

『マスター、考え事は後です、今は田の前の事に集中してください』

「それもそうか」

「まだまだ逝くよ～」

「字が違つ」

それに幽靈が言つと洒落にならん。成仏的な意味で。

「リリカ・・・下がつて」

「ええ～何で～姉さん？」

「その人がさつきしようとしてたの見えなかつたの？」

「え？」

ばれてたか。

「あつ！糸がある！」

「そつ、そのまま進んでたら・・・」

「あ、危なかつた・・・」

「いや、胴体とおさらばはしないからな？」

きちんと斬れない様にしていろさ。

さて、小細工はいらないとみた。

魔理沙も小細工は嫌いだろうしな。  
でも弾幕が少し鬱陶しい。

だから、

――南斗雷震掌――

膝を立ててしゃがみ、片手で地面に突きを入れることで、斜め前方  
に巨大な気の柱を発生させる。

これによつて、弾幕の一部を消し飛ばす。

「すゞいな！さすが龍斗だぜ！」

「そつか？」

「これくらいなら大抵のやつができるぞ？  
主に別の世界の転生者とか。

「まずは私から」

――偽弦「スードストラティヴアリウス」――

難易度はルナですかそうですか。  
面倒だが仕方ない。

目の前の圧倒的？な弾幕に少しだけ現実逃避。  
まあ何とかなるけどな。

「私に任せらんのだぜ！！」

――恋符「マスタースパーク」――

魔理沙が目の前の弾幕をレーザーで吹き飛ばす。  
相変わらず威力がすごいな。

なら俺は・・・

――魔眼「一時の夢」――

邪眼で相手に幻覚を見せ、見当違いの方向に弾幕を放たせる。  
まあ1分しかもたないんだが。

「ジャスト一分だ、いい夢は見れたか?」

「あ、あれ?確かにあつちに弾幕が当たつたはず!」

「残念、それは夢だ」

「くつ!」

「なら次は私だよ!」

——冥管「ゴーストクリフオード」——

次はメルランか。

まあ前がルナサだったから多分そうだろ?とは思ったが。うん。音楽が聞こえるだけでやる気が出るな。

『テンションがあがるのは勘弁してください、マスターの場合、テンションショーンが上がると何をするか分かりませんから(主に元氣重を忘れますから)』

「やうか?なら仕方ない」

でも相手の能力的には上がつちまうんだよなあ。  
まあ大丈夫か。

テンションショーンが上がつても被害は少ないだろ?」

「「「(ゾクツ)」「」」

何故だらうか・・・相手が震えだしたんだが?

『(感じ取りましたね)』

「さて、この弾幕を何とかしないとな」

「なら私に任せんんだぜ!」

——魔砲「ファイナルスパーク」——

マスター・スパークより激しいレーザーが放たれる。

・・・すごいな。

だが、そのおかげで相手のスペルをブレイクできた。

「なら三人で行くよ」

「あ、あれ？ 私の分・・・」

「行くよ～」

「ええーーー！」

何故か不憫な感じがしてきた。

——騒葬「ステイジャニリバーサイド」——

やはり三人で来るだけあって弾幕が激しい。

まあゲームでは全画面のボム使つとダメージが三倍に・・・。

『言つちや駄目ですマスター』

「？まあいい、魔理沙が当たりそ�だ、弾幕を消すか

——禁忌「フォーオブアカインド」——

「龍斗が四人に増えた！？（あ、あれ？これって・・・一人くらい

持ち帰つても・・・）」

「持ち帰ろうとしないでくれ」

「！？／＼／＼

ん？ 霊夢が真っ赤に・・・いや、今は弾幕を消すのが優先だな。

——審判「ギルティ・オワ・ノットギルティ」——

——靈符「夢想封印 散」——

——星符「ドラゴンメテオ」——

——幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」——

分身した四人でそれぞれ別のスペルを唱える。

あれ？ 今思つたらオーバーキルじゃないか？ これ。

目の前には上から降つてくる弾幕と、大量のナイフ、バラバラに散開した弾幕に高密度の弾幕・・・やりすぎた。

「うう・・・う、ラスト・・・」

——大合葬「靈車コンチョルトグロッソ怪」——

どうやら最後らしい。

というよりよく耐えられたな。

自分でもやりすぎた気がしないでもない。

「いや、やりすぎなんだぜ」

「うん、うん」

全員もそう思うか。

というよりあっちの三人が必死に頭を縦に振つてているんだが・・・  
そんなに怖かつたか。

「（・・・龍斗を怒らせないよに）しちましょ（づ）」

「（同意だぜ（ですわ））」

何か思われている気がしないでもないし、心も読むことはできるが・

・今はいいか。

目の前の弾幕に集中しよう。

「さて、魔理沙……ラストだ、頑張るぞ」

「おひー。」

まだ分身は消していないしな。

というより相手の弾幕を全部避けているんだが……分身も。

「早く終わらせたい……」

「うん、まさかこんなに大変だとはねえ」

「早く休みたいよお～」

「だそりうだが？」

「「「え？」」」

「よお～しー早く終わらせてやるんだぜー。」

——魔砲「ファイナルマスター・スパーク」——

三人でクルクル回りながら弾幕を撃つていてるせいで、思いっきり巻き込まれたな。

「ふう・・・すつきりしたぜー。」

「かわいそりに・・・」

「それには同意するわ、咲夜」

確かにやりすぎた気しかしない。

「すまないな、加減を忘れた・・・これはお詫びだ

そういうながら治療する。

「ありがとう」

「いや、こちらが悪いのだから当然だろう？まあ今回は曲を聴けないが、また別の機会に聴きたい・・・楽しみにしていの」

「ル・ル」

「その時は張り切るよ～！」

「任せて！」

「フフ、ああ、楽しみにしてる」

さて、先に・・・あれ？

な、なんでジョジョみたいに後ろに・・・スタンドみたいなものが見えるんだ?

咲夜は洒落になつてないんだけ?能力的に

「な、何かしたか？」

「・・・別に（鈍いのよ・・・鈍感）」

「別にないんだぜ！」（鈍感だよなー）

「いいえ、何も（まったく・・・先が思いやられるわ）」

「？」

「はあ～」

「皆苦労しそうね」

「ええ」

「またくだせ」

「……いや、異変だから苦労はするだろ」

「な、何だ？」

なんで「駄目だコイツ・・・早く何とかしないと」みたいな顔で見てくるんだろうか。

「後で O H A N A S H I ね」

「「協力するぜ（わ）」」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

何故こうなつた。

「まあ今は異変よ、先に進むわよ、そこのあんた達!」

「何?」

「どうやつたらこここの扉は開くのかしら?」

「この扉は開かないわ」

「お前達は、この中に入るんじゃないのか?」

「私達は上を飛び越えて入るのよ」

「・・・ほづ」

いやいや、扉が役割を果たしてない・・・いや、魔理沙もなるほど  
つて顔をしない。

そここの2人も納得するな!

・・・まあ飛び越えるしかなさそうだが。

壊したら駄目だろうし。

そう思いながら、結局は扉を飛び越え、先に進んだ。

そういえば・・・なんでアリスは隠れたんだろうか?  
何故かずつと見てただけなんだよな・・・。

『（救われないです、あの人も此処の人も）』

『？』

『何でも無いですよ、今のマスターには理解できませんから』

失礼だな・・・でも何故か否定できない。

そう思いながらスペカの補充に勤しんだ。

第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけ  
く

後書き「一ナーナー！」

龍「・・・」

どうかした？

龍「色々酷くて何も言えん」

・・・〇一二

龍「事実だらうに

い、一生懸命頑張つていきます！！

龍「といつよりムシウタを知つてゐる人がどれだけいるか・・・だ  
な」

個人的には好きなんですけどね。

龍「まあいい、感謝「一ナーナーだ」

ケルベルス様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「「イツも名言がなくなりつつある

多分妖々夢までなら大丈夫ですがね！

龍「まあよければ名前を感想にでも書いてくれると嬉しい」

探しててるんですけどね。

龍「まあ次は頑張れば次の土、日、遅くとも再来週くらいには投稿する」

頑張ります！

龍「まあ次はネギまだ、前回は黙文に黙文を重ねた黙文になつたが・  
・・次は少しでもマシになるようにさせるからな」

が、頑張ります・・・（挫けそつ）

龍「ではな、また次回で会おう」

で、ではでは！

## 第17話 信念無き者が信念ある者の魂を踏みこじるだけは絶対に許さない

今日は妖夢戦です！

次回はもしかしたら番外編かもです。

まあ今回は今までと同じかそれ以上に戦闘をがんばって見ましたが、  
こんな感じでいいんですかね？

それではどうぞ！！

## 第17話 信念無き者が信念ある者の魂を踏みにじる「」だけは絶対に許さない

三人の女の子を倒して……これだけ聞くと悪役だな。  
別に構わないが。

今は階段をひたすら駆け上がっている。  
まあ飛んでいるが。

「ねえ・・・」

「む? どうかしたか? 咲夜」

「どうやら考え方をしている間に話しかけられたようだ。

「聞きたい事があつたから聞きたいのだけれど・・・いいかしら?」

「ああ、別に構わない」

「なら聞くわ・・・どうしてそんなに悲しそうな眼をしているのか  
しら」

「悲しそうな眼?」

「ええ、まるで大切な人に裏切られたような、そんな感じね」

やれやれ・・・どうしてこうも鋭いかねえ。

「後、靈夢や魔理沙も気づいているわよ?」

「・・・そうか」

「まあいつか話してくれるまで待つから大丈夫よ」

「そうか、ありがとう・・・今回の異変が終われば・・・話すぞ」

「ならないわ」

「まったくだぜ!」

話を聞いていたか。

「さあ、そつと決まつたら先に進むぞ」

「「「おひー（ええ）」「」」

まあもつすべで一段落つべだらつからな。

「騒がしいと思えば・・・」

「む？」

目の前に人魂？みたいなものを連れた女の子が現れた。

「生きた人間・・・」

「死んでたら騒がないのか？」

「騒がない」

「悪かつたな、死んでなくて、でもまあ・・・異変があれば解決するのみだ、悪いが、ここを通してもらつぞ」

「人間がここ白玉楼に来ることはそれ 자체が死のはず・・・何故」「さあな？もしかしたらもう死んでるのかもな」

一回死んでいるから此処にいるんだしな。  
それに、

「もう俺は人間じゃない、今は吸血鬼だ」

「なるほど・・・ならあなたの春を奪えばあの西行妖は満開になるかもしけれない」

「さあ？もしかしたら満開にならないかもな」

そも・・・そんな事はさせないがな。

「じゃあ、戦うか」

「私も手伝つわ」

「そうか・・・頼んだ、咲夜」

「ええ」

「2人・・・でもお嬢様のためにも！負ける訳にはいかない！！」「残念、俺達も護りたいモノがあるんでね、負けてやる訳にはいかないんだ、アンタを倒す・・・悪いね」

そういうながらナイフを構える。

「さあ・・・始めよう、俺の名は龍斗、零崎 龍斗だ」

「私の名は魂魄 妖夢、そして・・・妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬  
れぬものなど、あんまり無い！」

言つて悲しくないんだろうか、もしくは恥ずかしくはないのだろうか。

「私は咲夜・・・幽靈でも斬れるのかしら？」

そういうながらも盾が構える。

「行くぞ！」

そう言いながらナイフ型の弾幕を放つ。

相手の刀で斬り伏せられる。

「そんなもの！..」

「私を忘れないでくれるかしら？」

能力で時を止め、ナイフを投げる。

「くつ！ なめるなー！」

——人符「現世斬」——

弾幕をグレイズしながら神速の居合いで攻撃していく。まさかの緋想天とかのタイプか。

「どうするのかしら？」

時を止めて聞いてきた。

・・・言つのは何だが、卑怯だな。

「使えるものは使うものよ」

「それもそつか、あの攻撃にはコレで行くぞ」

そう言いながらナイフを見せる。

「へえ、楽しみにしておくわ」

そういつた後、能力が解除された。

「はあああああーー！」

「遅い」

——閃鞘「七夜」——

閃鞘・七夜で相手の上に周り、斬りかかる。

「くつ……」

相手は避けながら弾幕を放つてきた。

「あたりはしないわ」

——幻符「殺人ドール」——

ナイフが周囲に大量に投げられ、弾幕を打ち消しながらも相手に向かう。

「くつ……これなら……どうだ……！」

——断命剣「冥想斬」——

剣に気を纏わせて打ち落とされた。やはり剣で戦うやつとは楽しいな。

「行くぞ！俺なりの神速を見せてやる！」

——無極「四式・零」——

自分のできる限りのスピードで相手に接近し、居合ごとを放つ。

「くわいひひ……！」

やはり終わらないか。

「わ、私は……負ける訳には……いかない！お嬢様のためにも！負ける訳には行かない……！」

「・・・それがお前の信念か？」

「そうだ！だから貴方たちを倒しますーー！」

「さうか・・・なら俺も全力で戦おう」

そう言いながら準備する。

「クロス、リミッター開放、フルドライブ」「了解、フルドライブ・・・お気をつけて』

「ああ、負けないさ、俺にも譲れない思いの一つや二つあるからな・・・全力でぶつかるのみ！」

ナイフから刀に変え、構える。

「咲夜、準備完了だ、下がつてもいいぞ？」

「そう、なら少しだけ下がるわ」

そう言いながら咲夜は下がった。  
ありがたい・・・」これで心置きなく戦える。

「さあ行くぞ！殺しはしないが・・・零崎を始めるーー」

「つおおおおおおーー！」

互いに刀を構え、接近する。

これで終わらせる気だ。

いいだらつ・・・終わらせるーー

——人鬼「未来永劫斬」——

相手の攻撃で斬りあげられた。

「はああああああああーー。」

更に全方位から超高速で追撃を加えてくる。

「これで！！」

「ああ、これで・・・終わりだ」

——無極「極式・世界」——

零から四式までの攻撃をまつたく同時に放つ。

「終わつたか」

負け。。。ですね」

おお、俺の腹が空いた。先に運んでやるよ。

「普通敵に頼むか？」

「は？」  
「いえ……あなたの名を聞いて、決めた事です」

何故俺の名を聞いただけで？

「貴方の事はお嬢様から教えて頂きました」

1

「幽々子様が・・・楽しそうに話してました、紫様が・・・紹介したい人がいると言つて、どんな人なんだろうって・・・名は龍斗です」

「そうか」

紫が紹介していたのか。

「写真を見せてもらひ、どのよつな人なのか余計に気になりました、そして強いとも聞きました、なので戦つてみたいと・・・結果はボロ負けでしたが（苦笑）」

「そんな事はないさ」

「いえ・・・今はいいです、今は・・・お嬢様を・・・頼みます」

「ああ、任せろ、止めてみせるさ」

「・・・これで安心して寝る事ができます」

どうやら長い事寝てなかつたらしく。

「なじゅつぐり休め・・・お前は、もつ休んでもいいんだ、後は任せ

「ひせ」

「・・・はい」

そう言いながら妖夢は眠つた。

どうやら相当疲れていたらしい。

「終わつたかしら？」

「ああ、すまないな」

「いいわよ、ねえ？魔理沙、靈夢」

「ええ（おひ）」「

やはり優しいな。

「ああ、先に進もうか・・・少しほお灸を据えないとな

「そうね」

「ああ！」

幽々子には少し教えないとな。

まあ不要だろうが。

ここまで必死に妖夢が動くんだ……それだけ素晴らしい主だということだ。

でもまあ……止めないとな。

あの木は満開にさせてはいけない。

あの木は……消滅させるか、封印を強化する必要がある。

紫に協力してもらつか。

「ねえ……」

「ん? どうかしたの?」「?

「私たち……空氣じゃない?」「

「言わない方がいいんだぜ」

「……そうね」「

後ろで何か聞こえるが気にせず先に進む。

もうすぐで幽々子と戦う。

妖夢に任されたんだ……負ける訳にはいかない。

そう決心しながら先に進んだ。

第17話

信念無き者が信念ある者の魂を踏みにじる」だけは絶対に許さない

後書き「一ナーナー！」

龍「死ね」

いきなり！？

龍「お前……次で番外編だと？」

い、いや！？きりが良ければだよ！？多分異変が終わった後だよ！？

龍「ならいい」

ほつ。

龍「さて、感謝「一ナーナー」

冷えピタ様、雨季様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！

龍「すまないな、毎回こんな駄文な上に更新が遅くて」

言い返せない！？

龍「事実だ」

・・・いいもん、次回から後書きで別キャラだすからな！？

龍「は？」

誕生日記念に新しくキャラを作ろうかなあと後書き限定で。

龍「……なら大丈夫か？」

人気があれば本編にでるけどね！！

龍「大丈夫だ、人気はない、この小説もな」

orz

龍「……ではな」

では！次回は今週中に更新したいと思つてます！！

龍「出来るのだろうか」

やつてみせる！！

ではでは！

第1~8話 やりとり決めた! これまでの それだけだ（前書き）

今回も大分遅くなつちやいました（汗）  
その上駄文・・・鬱だ。

今回で妖々夢編は終了です。

次で宴会が終わり、日常（導入編）になります。

## 第1-8話 やめと決めた」とほやる それだけだ

妖夢を倒し、先に進んだんだが……。

「いきなり戦闘か……といつよりも幽々子の様子がおかしい」

何かにとり憑かれたかのようだ。

「ぐつ！余裕があるならもう少し手伝って欲しいんだぜ…」「まったくね！」

——靈符「夢想封印」——

——魔符「スターダストレヴァアリH」——

相手はすでにスペカを発動させている。  
内容は、

亡郷「亡我郷 - 自刃 - 」である。

靈夢も魔理沙も咲夜も避けるのに必死のため、静かになつていいく。  
まあ弾幕が地面上に当たつたりする音で騒がしいんだが。

「というよりアンタだけおかしい気がするんだけど…? 何で当たら  
ないのよ! ? 何で通り抜けるのよ! ?

「ひあ？」

何でだろ? な。

すでに一度死んでいるからか?  
そう思つてみると、腕が消しどんだ。

「へえ・・・てつくりまとめて消えると思つてたんだが・・・まさか腕だけとはな、例外つてやつか?」

「さあね!でも私たちはそうなるとは限らないわ!」

まつたくだな。

――亡舞「生者必滅の理 - 魔境 - 」――

相手の後ろに扇が開かれ、弾幕の密度が増した。  
せうに、スペカのせいで増加。

「だああああああ!面倒だぜえ!一気に吹き飛ばしてやるーー!」

――恋符「マスタースパーク」――

大小交えた青い玉を避けるのが面倒になつたらしく、魔理沙が思いつきり吹き飛ばした。

「確かに面倒ね・・・なら」

――幻符「殺人ドール」――

大量のナイフを飛ばして、弾幕を削る。

「あ、当たりそうね・・・ならこいつもしちゃう」

――夢符「一重結界」――

靈夢は結界を張つて耐えた。

——華靈「バタフライデイリージョン」——

「どうやらあれでスペルブレイクしたらしき。」

次の弾幕は、何かよく分からぬのが迫りかけて?き、そこから弾幕が飛んでくる。

他にも放たれているので正直面倒ではある。

「ちひ

——糸符「鋼糸・盾」——

鋼糸を細かくまとめ、盾のようにする。  
最近なぜかできるようになった技だ。

一応他にも剣、斧、槍などもある。

今回はどうやらスペルを使わずブレイクできたらしき。（靈夢達が）

——幽曲「リポジトリ・オブ・ヒロカワ - 神靈 -」——

色とりどりの弾幕が放たれる。

自分に向けられてなければじっくりみていたいな。

「えらく余裕ね」

「いやいや、結構いっぱいいっぱいだからな?」

「そうは見えないんだぜ」

「とにかくもお前らも余裕あるだろ」

しゃべるへりこの。

「面倒ねー」

弾幕を放ち、相手の弾幕を消していく。

「くつ！当たりそうなんだぜ」

「大丈夫か？なんなら俺が消すが？」

「大丈夫だぜ！」

——恋符「ノンディレクショナルレーザー」——

靈夢と同じく、魔理沙も弾幕を消し飛ばしていく。

「・・・やはりおかしい」「どうかした？」

「いや、相手の様子がおかしい、いくらなんでも急に攻撃したりずっと黙つてたりはしないだろ」

「それもそうね・・・なら何かあるのかしら？」

「考えられるのは別の異変が起きている可能性だな、その確率がたかい」

「なるほどね・・・ならどうする？相手は意識が無い状態っぽいし、下手に刺激すると大変だと思つけど？」

「そうだな」

どうするか・・・一応あるにはあるんだが。いつその事あの黒い靄だけでも壊すか殺すか？まあとりあえずは、

「あのスペカをどうにかしないとな」

「ええ、そうね」

「まったく・・・面倒だぜ」

「でもしあしなければ先には進めないでしょ」

「そりだな

やれやれ、まいったねどうも。

まあ・・・救いたいモノは救う主義だ。

それを相手が望んでいようが望んでいなかろつが。  
俺は・・・後悔だけはしたくない。

「ならする事は決まってるでしょ？」

「ああ」

「なら私たちはそれに協力するだけだぜ！」

「魔理沙・・・感謝する」

「勿論私たちもよ？」

「ええ、当然ね」

「靈夢、咲夜・・・ああ、ありがと」

喋っている間にも弾幕は襲つてくる。  
だが、

「無駄なんだぜ！」

——魔砲「ファイナルスパーク」——

魔理沙が圧倒的なレーザーで相手の弾幕を吹き飛ばす。

「でかした！靈夢！」

——妖精眼発動——  
グラム・サイト

眼を発動させ、靈夢に指示を出す。

「分かつてゐるわよ！」

——靈符「夢想封印 散」——

どうやら本当に伝わつていたらしく、散によつて相手の弾幕が消えていく。

よし、これなら・・・いや！まだか！

「咲夜！」

「分かつてゐるわ」

——幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」——

咲夜のナイフによる弾幕で最後の分も消される。

「今だぜ！龍斗！！」

「分かつている！！」

この眼の力で見て観て見て見極める！

「お前の正体はわからない・・・だがな、お前の罪は、お前が抱えろ」

幽々子の腹の部分に攻撃する。

だが、これはあの黒い靄にしか効かない。  
これで幽々子は大丈夫なはず・・・だが、

「桜がまだ解決していない・・・しかもあの黒い靄があの木に向かいやがった！」

「龍斗！どうするんだぜ！？」

「何か策はあるんでしょう…？」

——「反魂蝶・八分咲」——

きやがつた！？

「とりあえずはひたすら避けろ！ 避けてれば大丈夫だが当たればどうなるか分からぬぞ…」

「了解だぜ！」

圧倒的な密度の弾幕を避け続ける。

どうやら完全にとり憑いたみたいで、あの木をもつ一度封印することは不可能みたいだ。

だが・・・あれを破壊すると幽々子が！

仕方ない・・・、

——空想「Blut de Schwester」——

空想具現化によって、幽々子が消えないようにするための準備をする。

木ではなく、この屋敷全てを範囲に。

さあ、これで遠慮はいらない。

「あの木を・・・西行妖を潰すぞ

「おう！」

「『ええ…』」

まずは靈夢から、

「行くわよー！」

——神技「八方鬼縛陣」——

一気に大量の札型の弾幕が放たれる。  
相手の大量にある弾幕を消しながら進んでいく。

「今之内に咲夜！」

「ええ、分かつてゐるわ」

——幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」——

さつきと同じ弾幕が放たれる。  
これによつてさらに消えていく。

「魔理沙！！」

「おつ！任せろ！..」

——魔砲「ファイナルマスタースパーク」——

さらに太くなつたレーザー・..いや、ビームが、が放たれる。  
これによつて相手に隙ができた。

「「「今だ（よ）ー」」

「おう！」

——偽月「Blut de Schwester」——

空想具現化によつて月を落とす。

本来なら酷い被害がでるため、使わないが、今は結界を張つてゐる  
ため大丈夫なので遠慮なく放つ。

「とじめだ！」

そう言いながら、俺はクロスを日本刀に変える。

——剣技「無極極式・世界」——

無極の型の零から四までをまつたく同時に放ち、最後に直死によつて点を斬りつける。

黒い靄がさらに逃げそつたので、

——剣技「無極零式・虚無 散」——

超小型のブラックホールを大量に出し、黒い靄をそこに放り込む。これで・・・本当に終わりだ。

「終わったのね」

「ああ、これで今回の異変は終わりだ」

「ふう・・・疲れたんだぜ！」

「まったくね」

幽々子はまだ目が覚めない。

当然ではあるか。

能力を無理やり強化され、意識を奪われ、勝手に行動されてはな。と思っていたんだが・・・

「ん~ おいしいわ~」

「なんでもう起きてんだよ」

起きて食事をしていた。

「あら？アナタが紫の言つてた龍斗ね？紫からよく聞いてるわ～よろしくね？」

「ああ、で、今回の事は覚えているか？」

「・・・ええ、あの黒い靄に捕われて、アナタ達に攻撃していた事も覚えてるわ」

「そうか、なら話は早い、あの靄に心当たりは？」

「ないわね、でも闇魔様なら何か知ってるかもしないわ、聞いてみたらどうかしら？」

「うわせてもうつ」

宴会が終わつたらいくか。

「さて、嫌な事は忘れて、宴会だ」

「宴会するの？」

「ああ、幽々子も来るよな？妖夢は来ると思ひつい？」

「ならお邪魔させてもらつわ～」

「これで一件落着かな？」

まあ問題は山積みだが、今は宴会を楽しもつ。

第1-8話 やめと決めた！」とせやる それだけだ（後書き）

後書き「一ナーナー！」

龍「やつそく感謝」「一ナーナーだ」

雨季様、Jahm様、夜神様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！

龍「で？あつちで待機しているのは誰だ？」

ん？後書き限定のキャラ（仮）

龍「なぜ仮なんだ？」

お試しだよ、人気があれば続くけどね。

龍「なるほど」

?「あ、あの～もうここですか？」

あ、うん。自己紹介して。

?「はい、私はナギです、といつてもどこのかの鳥頭やお嬢様はまつたく関係ありません」

だろうね。

龍「大丈夫なのか？」コイツで

ナ「失礼ですね・・・」  
『アリマシ』でできるのですから私もできますよ」

いきなり口が悪い！？

ナ「気のせいでは？」へうなんでも私には悪口はとてもいわむ

龍「・・・どうでもいいか」

ク『どうでもいいですね』

おまえら大概酷いな！？

ナ「で？次はいつになるんですか？塵」

生物ですらないんですね・・・えっと、次回は今週中にあげれたらいいなあ・・・と。

ナ「『』れだから単細胞生物は」

ミジンコバカにすんな！

龍「どうでもいい、じゃあ次回では宴会だ、ゆっくり待つてくれ」

ナ「では、次回でも会いましょう・・・まあ給料を要求します」

ひでえ！？で、ではではー！（逃走）

龍「あつ、逃げた」

第19話 死ぬ覚悟なんていふことはねえんだよ、カンタンじゃねーのよ・・

遅くなりすいません！！

今回は宴会です！

次回から少しの間、日常編です！

今回もオチが似たり寄つたりですが勘弁を・・・。  
それではどうぞ！！

## 第19話 死ぬ覚悟なんぞ云ひてゐねんだよ、カンタンじゃね？

異変が終わり、今は宴会だ。

敵同士でも終わつたら宴会、それが楽しみなやつもいる。  
まあ後片付けは俺か靈夢がするんだが・・・。

「飲んでるかあ？」

「ああ、酒臭いぞ、魔理沙・・・少し飲みすぎだ」

「まだまあだいけるぜー！もっと強い酒持つて来い！」

紫は今はいない、なぜかと言つと、

境界がゆるんぢやない なら紫に言つか（自分でできるナビ） わざ  
とやつてましたごめんなさい 判決・死刑 再起不能 今此処  
の状態なのでない。

まあ自業自得だとしかいいようがない。  
ついでにいうと境界は修正しておいた。  
同じ能力が一応使えるからな。

（年季が違うからうまく・・うわー！何をする、やめ（作者はスキ  
マ送りにされました））

電波が来た気がしたがスルー 安定だな。

「私の怒りが有頂天！」

「どうした急に」

「フラン！龍斗を賭けて勝負だぜ！？」

「いいよーでも・・・勝てるかなあ？」

「今の私を止める事はできないぜ！－不可能を可能にするのが私のだぜ！－」

それは色々危ないんだが……記憶喪失的な意味で。後、微妙に助手を混ぜるな。

「フフフ……さあアナタの罪を数えなさい。」

レミリアまでネタに……。

咲夜も忠誠心を鼻からたらしてゐし。ついでに言つとレミリアが喧嘩をふっかけたのは幽香だ。

——起源「マスタースパーク」——

あつ、蒸発した。

「はあ……ここには馬鹿しか集まらないのかしら？」

「さあ？でもまあ……たまには悪くなれ」

「……そんなものかしらね？」

「そんなもんだ」

記憶が完全に戻った状態だとおさら思つ。

ああ記憶はどうやら平行世界の俺が取り戻した瞬間、別の世界の俺にも戻つたらしい。

神の説明だ。

それはさておき、

「幽香もゆつくり楽しんでくれ」

「何処か行くのかしら？」

「ああ、今回から此処に来たやつらに挨拶をな

「そう、ならいいわ・・・後で戻つてきなさい」

「？まあ戻れたらな、結構大変なんだ、あいつらの相手するのは」

「そう（大変な理由を理解しようともしないのかしら？）」

「じゃあまた後で」

「ええ、後で」

そして俺は妖夢と幽々子のいる場所に向かつた。

どうやら隠のほうにいたらしい。

「どうだ？ 楽しんでる・・・幽々子に関しては聞くまでもないか」

「へ あら、龍斗じやない、ええ、楽しんでるわよ～龍斗も食べるかしら？」

「いや、見てるだけで腹一杯だよ、で？ 妖夢は楽しめてるか？」

「はい、楽しんでます」

「硬いな・・・もう少し軽く接しろ、その方が楽だぞ？」

「ハハハ、これはもう癖なので」

やはり真面目なんだな・・・まあ珍しい方なんだろうが。

「で？ 挨拶だけではないのでしょうか？」

「やはりお見通しか」

「ええ、貴方はなるべく無駄な事はしないようにしているもの、まあ空回りしている事も結構あるみたいだけど」

笑いながら言われる。

「どうだろうな？ まあ無駄な事はしたくないとは思つてゐるが・・・  
さて、用件だが」

「あの西行妖のことね？」

「ああ、あれには幽々子……アンタの体が封印されていた、それを消し飛ばしてしまったからな……すまない」

「気にしてないわよ？ あのままだともつと大変な事になつてたんだから、仕方ないわ」

「一応あの封印の範囲を家全体に広げたから大丈夫だらうが……」

だから今幽々子は消える事無く存在している。

「……何かできる」とがあったら直つてくれ、俺にできる」となら何でもしよう！」

「・・・なら楽しみとつべおくわ」

「ああ、妖夢もな

「私もですか！？」

「ああ、できることなら何でもな

「や、そうですか、なら後で考えておきます」

「ああ

さて、後ろで微かに待つてゐる靈夢とでも話すか。

「さて、じゃあ楽しんでくれ、幽々子はまだ遊びにな

「ええ、分かつてゐわよ～後、10杯ほどで我慢しておくれ～

それで我慢なんだな……。

「あ、あの・・・すいません

「いや、楽しんでもらえたならいいこれ」

まあ一番大変なのは靈夢だが。

そう思いながらも、靈夢の場所に向かった。

「ふう・・・」

「どうだ?」

「騒がしいだけよ・・・少しほは抑えて欲しいわね」

「クク、無理をいうな、こいつはこいつだからな、仕方ないぞ」

「・・・それもそうね(最近は毒されて来てる気がするのだけれど・・・)」

「(気のせいではないんですよ~最近は靈夢をヒカルンショソノ面

いですし)』

「その酒は?」

「紫のところから持つてきてもういたのよ、それくらこじつてもういた  
ても罰は当たらないでしょ?」

「それもそうだな」

後に分かる事だが、その酒は紫の一一番氣に入つてゐる酒だったそつだ。

「龍斗も飲む?」

「ああ、少しだけな」

あまり酒は強くないんでな。

「何の酒なんだ?」

「鬼殺し」

「なん・・・だと?」

なんで」こいつらはポンポイントで狙つてくるんだらつか。

いや、これ以上飲まなければ大丈夫だ。

そうだ、これを置いて話せば・・・

「お兄ちやん~」

「

「ガフツー」

酒が思いつきり口に入った！？  
ま、まづい・・・いや、味はうまいが。

『（それで、写真・・・動画をとる準備をしますか）』

後でクロスとは話し合ひだな。  
そう思いながら意識をなくした。

→ 霊夢 Side View

龍斗にフランがぶつかって酒が龍斗の口に入つていった。  
その瞬間、龍斗が反応しなくなつた。

「龍斗？大丈夫なの？」

「お兄ちゃん？」

「うう・・・うん大丈夫」（少し舌足らずで）

！？な、何かしらこの可愛い生物。

お持ち帰つてOKかしら？

「お兄ちゃん！――」

「どうかしたの？フランお姉ちゃん」

お、お姉ちゃん？随分とつりやめ・・・口ホン、仲良く・・・私もそ  
う呼んでくれるかしら？

ギュウ

！？

「どうかしたの？ 霊夢お姉ちゃん？」（首傾げ）

お、落ち着くのよ私・・・素数を数えて落ち着くのよー。  
素数はーと自分の数字でしか割れない孤独な数字・・・私に落ち着  
きをくれる・・・無理よー。

こんな可愛い生物！

ギュウッ

「ん？ どうかしたの？ 霊夢お姉ちゃん？」

「ああ～可愛いわね！ 私を萌殺す氣かしりー。」

「・・・（壊れた・・・仕方ないよね、あの可愛ただもんね）」

その後の事は覚えてないわ、でも・・・わが生涯に一斤の悔いなし  
！ そう思える記憶だったわ。

♪ 霊夢 Side end ♪

♪ 龍斗 Side ♪

・・・此処は。

『田が覚めましたか？ マスター』

「ああ、で？ 何があつたんだ？ 周りが血の海なんだが・・・」

『うつむいてなつてゐるんだ？ うつむいてなつてゐるんだ？』

『後で映像を見せますから今は片付けましょつ（後でマスターの悶  
える姿が想像できますw）』

「 そうだな

さて・・・片付けるか。

片付けはその後、30分くらいで終わった。

分身超便利だな。

その後、映像を見せられて悶えた（恥ずかしさのあまり）のは仕方ないと思つ。

死ぬ覚悟なんてどうでもいいとねえんだよ、カンタンじゃねーのは・

後書き「一ナーニー！」

龍「我こそは蛇遣い座の使者なり・・・その呪わしき命運受け入れし者にのみ賜うべきは 毒蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の力なり・・・されば愚かなる者共に鉄槌を打ち下ろせ 荒ぶる神魔の怒りを以て！」

# スネークジョノサイド 蛇殺！？

龍「死ね！」

ナ「何をしているんですか・・・馬鹿ですか?」

龍「……いた」こつが悪い

ひでえ

ナ「さすがですね、もう再生しましたか」

いや・・・3回死んだ。(気分的に)

龍「さて、感謝」「一ナード」

スルー！？え、えっと夜神様、メガネ様、ありがとうございます！！

ナ「不甲斐ない作者ですいません」

言い返せない！

龍「ああ・・・一斤死んでみる?」

地獄少女！？

力一龍半、一片ではなく確實に・・・です」

龍一了解

なん・・・だと？

龍「どうあるつもりだ?」

逃げるんだよおおおおおおおおおおおおおお-（逃走）

龍一待て

ナ「ええ・・・今回はこれまで、作者的には今回のやつでどれだけのネタが見つかるか楽しみにしてるやうなので、見つけたらニヤニヤしながらでも感想にて」

わよつー・? セレブリティー・?

! !

ナ「では・・・次回も頑張るそつなので、次回もゆっくり待ってて  
ください」

## 第20話 神に祈る者、神を敬う者、神を知らぬ者、神を罵る者が勝者になつ

今回も大分遅くなつた上に駄文・・・もう何も怖くない。  
さて、今回も中途半端ですが、楽しんでいただければ幸いです！  
数話書いてからまた異変です。

## 第20話 神に祈る者、神を敬う者、神を知らぬ者、神を罵る者が勝者になら

宴会から数日。

今日は幽々子から呼ばれていたため、さっそく逝く事にした。  
ん？字が違う？別の意味ではあつてると大丈夫だ。

『大丈夫ではないと思いますが  
「気にするな」

とこり」と到着した。

「妖夢、幽々子はいるか？」

「はい、呼んできますね」

「ああ」

「ひつやらまだ寝ていのりしこ。

もつ匂なんだが？

そう思いながらに待つてみると、

「ちよつ！？幽々子様！その格好でいつつかないで下さい……龍斗  
さんがいるんですよ……」

「ええ、いいじゃない、別に減る訳じゃないんだし……」

「駄目です！きちんと服を着てください」

何で何も着ていないんだ？

いや、直接見たんじゃなく、会話で確定したんだが。  
それよりも、

「せつせと服を着てくれ、別に急いでいない」

「そつ～？ならわづかせてもうつわ

気配が遠くに行つた。

おそらく着替えにいつたんだろう。  
妖夢も苦労しているな・・・。

「はあ・・・すいません、幽々子様が・・・」

「いや、氣にしていない、そういうえば妖夢は決まつたのか？頼み事  
は」

「え？ ああ・・・はい、それは幽々子様の分が終わつてからお願ひ  
します」

「了解した、大抵の事なら大丈夫だ」

あの眼からして・・・修行っぽいがな。

「お待たせ〜」

どつやら着替え終わつたらしい。

「で？頼み事は決まつたか？」

「ええ、紫に聞いたら料理が得意だそだから・・・私が満足する  
まで作つてくれるかしら？」

「ああ、いいぞ？それでいいんだな？」

「ええ」

それぐらいなら・・・少しキツイだけだ。

「大丈夫なんですか？」（小声）

「ああ、大丈夫だ」（小声）

「大丈夫だ、沢山食べるやつは他に居た（スバルとかエリオ的な意味で）」

だから早く確実に作る事が可能だ。

いざとなれば分身すればいいし。

本来分身つてこんな使い方するためのもんだったか？違う気がする・

・・まあいいか。

「じゃあ台所を借りるぞ、材料はあるからな」

「え？」

王の財宝ほぞんにしまってある。

ん？ルビがおかしい？いや、ビリもおかしくはない。

「では・・・頑張つて下さい」

「そこまで酷いか？まあいい・・・全力で挑むぞ」

さて、包丁も投影で一番いい物を使うか。  
まな板とかはここにあるしな。

「・・・久々だな、ここまで頑張るのは『

『そうですね、エリオやスバルさん以来ですからね・・・ビリやら  
それ以上の可能性はありますか』

「そうだな・・・まあそれでも頼み事は完遂させてみせるさ

そつ言いながら料理を作り始めた。

出来た傍から持つて行き、幽々子に持つていいくと、

「まだ足りないわ

と言われ、その倍を持って行くと、

「まだ足りないわ・・・私を満足させたければその三倍は持つてきなさい！！」

「何処の慢心王だ

結局百人分くらい作った気がする・・・疲れたな。

「ふう・・・これで満足か？」

「ええ、ありがとう、感謝するわ～」

「いや、詫びだからな・・・まあ満足してくれて助かったよ、さすがに後百人分は作れそうに無いからな

まあ十人分くらいなら作れそしが。

「さて、次は妖夢の番だ・・・何が望みかな？」

「私は・・・剣の修行をつけて下さい」

「それでいいんだな？」

「はい、少しでも強くなりたいので」

強くなりたい・・・か。

「何故か聞いても？」

「自分を貫き通すため・・・護りたい人を護るためにです」

「・・・そつか」

その理由なら十分だな。

「了解した、なら今からか？」

「はい、出来ればですが」

「クク、大丈夫だ、さて・・・始めよつか」

「はい！！」

こうして妖夢との修行が始まった。

剣を振るう。

そのたびに相手が必死に避けているのが分かる。

ガキーンッ！

相手の剣を受け止める。

「妖夢、そんなんじや駄目だ、隙だらけだぞ？」

「くつ！」

妖夢は体勢を立て直すために後ろに下がった。

「はあああああー！」

後ろに下がった瞬間、刀を構え直し、向かってきた。  
構えは中段・・・だが、狙いは・・・

「下段だな」

「なつ！？」

妖夢の攻撃を受け止める。  
これは止められないと思っていたのか、隙が出来る。

「そら！隙だらけだ！」

——閃鞘・八点衝改——

刀で八点衝を放つ。

「くっ……」

どうやら少しだけ避け切れなかつたらしく。

「ふむ・・・もつ少しフェイントを入れてみたらどうだ？愚直すぎ  
るぞ？」

「はいっ……」

まるでスポンジのように吸収していくな・・・教える」との出来る  
立場じゃないが・・・楽しいな。  
もつ少し行けるか？

「もつ少し速くなるぞ？」

そつ言いながらスピードを上げる。

「くっ……」

妖夢は必死に避けている。

「避けるだけか？」

「くっ・・・はあっ……」

こっちの攻撃が少しうるくなつた瞬間を狙つて、反撃をしてきた。

「効かん」

ー まだまだああああーー

——人符「現世斬」——

妖夢はスペカを発動させ、踏み込みからの攻撃を放ってきた。

「これで大丈夫かな？」

# ——斬符「斬り伏せられし心」——

相手の攻撃に完全に合わせて斬撃を放つ。それは寸分の狂いもなく、妖夢に当たる。

ג' עי' . . .

「好，一并用吧！」

はい またまたい上等の事

一  
そ  
う  
が

少し嬉しく感じるな・・・」今まできちんとした信念は滅多に感じられないからな。

なら・・・、

「妖夢、今から認知すら不可能な居合いをする・・・その体で覚えて取得してみせろ」

- 60 -

「レバノン」

——無極極零式・無——

もはや馬鹿らしくなるくらいのスピードで面会を行へ。  
これは直撃したらしく、妖夢は倒れた。

「大丈夫なのかしら？」

「ああ、急所ははずしているし、そもそも非殺傷設定だ」

「ならいいわ、でも聞かせて頂戴・・・何故認知すらできないスピードで斬つたのかしり?」

「簡単だ、妖夢の成長具合に期待しているんだ・・・間違いなくあの子は強くなる」

あんなまっすぐな目をしたやつは特にな。

俺はあんな眼はできやしない・・・まあ少し濁っているからな。

「だからこそ使った・・・多分あのスピードの十分の一くらいのスピードなら少し修行したら使えるようになるわ」

そう思つたからこそ加減はしなかつた。  
加減は失礼だからな。

といつてもまあ・・・楽しかったのもあるのかもな。

「なら妖夢が起きるまで時間があるのね?」

「ああ、多分1~2時間くらいは起きない」

疲れもあるだろ?しね。

「さて、何をお望みで?」

「お話をしり?」

「まあ だらうな、で？ 内容は？」

「そうね・・・あなたは死についてどう思つたらいい？」

死？

「私の能力は死を操る程度の能力・・・死についてはよく考えさせられるのよ・・・だからあなたの意見を聞きたいと思つたの」

「そうか・・・」

死・・・か。

「ある意味俺も死は近いからな」

「どういうことかしら？ あなたに私の能力が効かないのと関係はあるのかしら？」

「そうだな、俺も使えるのもあるが、ある意味俺は生物ですらない」

いや、一応真祖は生物になるのか。

「まあ俺は普通じゃないんでね、常識なんて通用しないわ」

「そう」

「ああ、それに俺は一度死んでいる、死にはある意味近く、そして遠い・・・だからこそだが、死は万物全てにあるものだと思つていいる

「全て？」

「ああ、まあある意味幽々子より性質が悪いからな・・・」の眼は

まあ借り物ではあるがな・・・」の直死の魔眼は。

「まあそれそれで解釈が違うからな・・・俺の場合は死を『える側』になつてゐるからな、余計に理解しないといけないから・・・だか

ら俺はたとえ悪と罵られようとも、H'Gでも背負い続けると決めたんだ・・・今までずっと死を見続けたからなおさらな」

慣れてはいけないんだろうが・・・慣れてしまつたんだ。

「そ、う、龍斗もきちんと考へてるのね？」  
「クク、まるで俺が何も考へてないみたいじゃないか」  
「そう? (恋愛事に關してはそつた氣がするわよ?)」  
「?」

何故か別の事で責められそうな氣がする。

「うう・・・」  
「ん? 起きたか? 妖夢」  
「あつ・・・! ?」  
「どうかしたか?」  
「こ、これは一体! ?」  
「ん?」

何処か変か?  
ただ膝枕をしているだけなんだが?

「・・・(鈍いのね)」  
「し、失礼しました! ! すぐにどきますので! !」  
「いや、もう少しゆづくりしている、疲れてるだろ?」  
「は・・はい・・・// / (余計に休まらないです! )」

何故か妖夢の顔が真っ赤なんだが・・・熱か?

「…？／／／」

「む？熱が少しはあるか？」

「（）」れは救じようがないほどに鈍いわね・・・苦労しそうだわ～（

「

確か熱を測る時は額と額をあわせるのが効率がいいそうだからな。  
そう思つて行動に移すと、妖夢がまた寝てしまつた。

ふむ、やはり疲れていたらしい。

「さて、今日はもう帰るよ」

「あら、もう帰るの？」

「ああ、あまり遅くなると靈夢がひつむたーいからな」

まあそれが何だか近づいてる気がして嬉しいのだが。

「まあ次もまた来るわ、妖夢にはまた修行をしようとしてくれ、  
自分のためにもなるからな」

「ええ、伝えておくわ～」

「ああ、頼む、次もまた料理を作つて持つてくれるからな」

「任せなさい…！」

急にやる気が…まあいいか。

「じゃあな」

「ええ、また会こましょ」

「うして神社に戻つた。

食料の事を話したら靈夢が本気で怒つてきたのに驚いたのはまつた  
くの余談だ。

あれは怖かつた。

第20話 神に祈る者、神を敬う者、神を知らぬ者、神を罵る者が勝者になつ

後書き「一ナーナー！」

龍「遅い」

ナ「死になさー」

ストレートに酷いな！？

龍「さて、感謝「一ナーナーだ」

八雲 葵様、雨季様、夜神様、J a m様、ケルベルス様、メガネ様、  
七夜士郎様、感想ありがとうございます！！

龍「今回も駄文ですまない、精進しようとしても空回りしていくな

ナ「この作者にそれを期待しては駄目です」

ひでえ・・・挫けそう。

ナ「前書きで死亡フラグ建ててるのを拾つてください」

龍「それもそうだな」

ひでえ・・・遠回しに死ねと？

ナ「遠回しに言つたつもりはありません」

龍「まつたくだ」

・・・〇一ニ

龍「次回はおそらく、靈夢と魔理沙と咲夜との話だらう」

うん。 そうだね。

ナ「次はもう少し早く書き上げなさい」

はい、頑張ります！

龍「ではな、次回も頑張らせる」

ナ「まあ期待は程々にのんびり待つて下さい」

では！ また次回！ なんで宴会の話になると感想が増えたんだ  
うづか？

龍「宴会だからじゃないか？」

## 第21話 奇跡を起しせる条件は・・・諦めない事だ（前書き）

はい、お久しぶりです。

少し（本当に）マシになってきたような気がするので再開しました！  
まったく触れてなかつたので今まで以上にグダグダですが、楽しんでいただけたら幸いです。

今回は初の前編です！

## 第21話 奇跡を起させる条件は・・・諦めない事だ

「どうやら夢を見ているようだ・・・。

何故かつて?だって・・・

「どきなさい!そこにはいると龍斗が見えないじゃない!」

「いやだぜ!私を退けたければ力ずくで来い!」

「・・・覚悟はいいわね?」

「げつ!咲夜もいるのかよ・・・」

何故か不穏な雰囲気になっているからだ。

「うん、夢だな」

『マスター・・・とこがビツイ夢じやありません!現実・・・これが現実!..』

「黙れ」

何故力○ジ?

「さて、現実逃避はやめておくか、おい、靈夢、魔理沙、咲夜」

「「「何!?」」

「何故ここにいる?靈夢は分かるが・・・ほかの一人は何故だ?」

「それは・・・」

かくかくしかじか

「なるほど」

要は暇だったから来たと。

まあ魔理沙は分かるが・・・咲夜が暇なのは信じられない。

「ええ、お嬢様が休暇をくださったので」

「で、する事もないから来たと?」

「ええ」

「ふむ、ならついでだ。」

「お前達の願いを聞いて、約束だしな」

異変の時の。

「せうね・・・なら料理を作ってくれるかしら」

「靈夢はそれでいいのか?」

「ええ、今はそういう気分なのよ」

なるほど。

「私は魔法の研究の手伝いをしてほしいんだぜー。」

「は?」

「龍斗はそのくらいの知識はあるんだろう?」

「まあ・・・少しくらいには」

第5魔法とかなら可能だが・・・あつ、魔理沙と相性いいのか?あれは破壊とかもできるしな。

いや、まあ教えはしないぞ?  
教えてでもできるとは限らないしな。

「まあできる範囲でならいいだろ?」  
「よし!...」

「咲夜は？」

「私は・・・」

「どうやらまだ悩んでるやつだ。

なら、

「2人分が終わってからでもいいぞ？」

やつらひとつ、

「いえ、決まったわ

「そうか」

「どうこいつ内容なんだらうか？」

「執事の仕事を増やしなさい」

「は？」

「そんなこといいのか？」

ついでにこいつと、今は週3回である。

「ええ、週5回こしなさい」

「むう・・・異変のときは？」

「異変を優先で」

「なら私用は？」

「なるべく仕事優先で

「・・・了解

まあそれで済むならいいか。

「さて、じゃあまずは靈夢からか？」

「いえ、私は夕食の時でいいわ」

「そつか？なら魔理沙だな、で？何を聞きたい？」

「コレの作り方なんだ」

「む？ 惣れ薬？」

「ああ！今実験中だつたんだけどな・・・少し不安だつたから聞こ

うと」

なるほど・・・だが惣れ薬は・・・あつ、あれがあつたか。  
でも、

「惣れ薬を誰かに使うのか？」

「え、あ、ああ」

「ふむ・・・なら言ひておく、やめておけ」

「何故？」

「理由は簡単だ、そんな事して惣れられて・・・本当に嬉しいのか  
？その感情は無理やり作り出した感情だぞ？」

「！？」

「分かるなら研究でとめとけ」

「あ、ああ」

「ふむ、納得したか。

「さて、一応「コレがレシピ」だが・・・ほかに何かないか？」

「ならこの魔力増強薬を・・・」

「それはこれを・・・」

「まったくついていけないわ

「まつたくね」

その後も話は弾んだ。

それから大体2時間。

「これで大分進む・・・感謝するぜ！」

「ああ、気にするな、これくらいなら暇なときにでもまた協力する「本当か！？」

「ああ」

そう言いつと、相当嬉しかつたらしく飛び跳ねている。

「さあて、それじゃあ靈夢・・・料理は何がいい？希望を聞いひつ」「そうね・・・それじゃあ・・・前龍斗が言つてた海老チリつとうのを」

「了解」

海老は在庫があつたかな？

・・・あつた、まだ余裕がある。

さつそく作るか。

「咲夜、すぐにできると思つから皿を出してくれ」「分かつたわ」

咲夜には頼んだから・・・

「魔理沙は海老を剥ぐのを手伝ってくれ」

「了解だぜ！」

よし、これですぐに終わるな。

そんなことなんで完成。

「まあ皆で食え、それくらい作つておいた」

「さすが龍斗だぜ！」

「まったく・・・現金ね」

「食べないのなら私が全部食べるわよ？」

「食べないとは言つてないわ」

「口う囁き、喧嘩するな」

「「してないわ」」

ならいいが。

食事は楽しくが一番だからな。

さて、幽々子じやないからコレで十分なはずだな。

「さて、少し出でへる、すぐに戻るから安心してくれ」

「「分かった（わ）（ゼ）」」

そういうつつ、俺は外にでた。

「紫」

「何かしら？」

「また外来人か？しかも無駄に力があるじゃねえか」

「ごめんなさい、肩だつたから食べちゃおうと思つてたのよ

「ああ～、まあいい、場所は分かる、処理はしよう」

「ありがとう」

「何、運動だよ・・・食後のは」

どうやら場所は魔法の森みたいだな。  
アリスに何もなければいいが。

まあ、何かあつたら・・・消すのみだ。

そしてやつてきた魔法の森。

・・・どうやらアリスは戦つてゐるみたいだな。  
早く助けないと・・・確か反応は・・・あつちか。  
急いでその反応がある方向に向かつた。

アリス Side <

今日は特に何もする事が無かつたから家で研究をしていたのだけれど・・・急に魔力の反応があつたから見に行つてみると、

「上海」

「シャンバーイ?」

「あの男を倒すわよ」

「シャンハイ！」

「元の文の翻訳の仕方」

じゃあ……わざと片付けて研究の続きでもしましょうか。

——魔符「アーティフルサクリファイス」——

人形に魔力を込めて、爆発させる。

不意打ちじゃないとまずは当たらないわね、使い勝手はいいのだけ

れど。

「誰だあ？俺の邪魔をしようとする愚か者は？」

「さあ？愚か者なんて知らないわ、知る必要もない、あなたは私に  
ここ倒されるのよ」

どうやらダメージはあまり無かつたみたいね。

「ああ？まあいい・・・。そく確かめるとじょうか！？」

――冥府「地獄のロンド」――

スペルカード！？

どうやらただの外来人じゃないみたいね。  
なら、

――戦符「リトルレギオン」――

相手の弾幕は少し濃い程度・・・このくらいならこれで・・・それに準備もあるし。

「ひやははははー無駄だ無駄だあーその程度で止められると思つてんのかよー！」

どうやらまだダメージはないみたいね・・・それにこの弾幕・・・追尾するみたい。

それに数が少ない代わりに威力が高いみたいね。  
どうりで消せないはず。

でも・・・

「もう殆ど威力はないわ、これで消えるわね」

——咒符「上海人形」——

上海からレーザーを放たれる。

「チツ！」

これで弾幕は完全に打ち消せた+相手にダメージを与えたみたい  
ね。

「うぜえんだよ！」

——獄符「ケルベルス」——

次は番犬？まつたく・・・芸がないわね。  
でも数は少ないから・・・威力が上がっているか、何か隠している  
みたいね。

——偵符「シーカードールズ」——

上に大量に人形を向かわせ、そこからレーザーを放つ。

「うぜえ！！」

——蛇符「ウロボロス」——

次は蛇？節操がないわね。  
でもまあ・・・

「準備は完了しているわ」

「ああ？ 準備だあ？」

「ええ」

そう言いながら相手の蛇型弾幕と大型弾幕を消しながら、スペルを発動させる。

——注力「トリップワイヤー」——

今までのスペルで少しづつ出してきた人形と糸が発光し、攻撃をする。

「がああああああ！ チッ！ 何だこれはよおー！」

「あら、気づかなかつたのかしら？ 私は少しづつ準備していただけよ」

そして追加よ。

——呪詛「蓬莱人形」——

複数の人形からレー・ザー発射される。

これで終わりはしなくても追い込んだでしょ。

「ククク、ははは、はははははははーー無駄無駄アー・その程度じや俺は死なねえよー！」

「くつ！」

どうやらまだのようね。

「オラアー！ 死ねやー！」

——獄符「黒き獸」——

何・・・あれ？

どう考へてもあれは人の使つて良いものじゃないじゃない！  
何とかしないと！

——人形「レミングスパレード」——

爆弾を積んだ人形を大量に向かわせる。

これで少しでも傷ができるばいいのだけれど。

「ひやはははは！無駄だ無駄だ！その程度じゃビクともしねえよー。  
「はあ・・・やつぱりね」

でもまあ・・・目的は十分に果たせたわね。  
じゃあ後は任せたわよ？龍斗。

「ああ、後は任せろ」

後ろから頬もしい声が聞こえた気がした。

>アリス Side end <  
>龍斗 Side <

急いだ結果、何とか間に合つたが・・・何故敵の姿がハザマなんだ？  
性格が違うみたいだからハザマ本人ではないだろ。  
それにあれは黒き獸・・・やつの目的の出来損ない。  
はあ・・・安請け合いするんじやなかつたな。  
まあ信頼されているみたいだから、それに答えないとな。

「さあて、零崎を始めよつか」

まだあまり実感のない名だが……何故かしつくづく。  
やはり前世での名だからだろうか？

まあいい。今は田の前のやつを処理するだけだ。

「てめえ……邪魔すんじゃねえよ！」

「黙れ……俺の大切な者を傷つけた罪は重い……ここで死ね」

### ——結界「無限の絶望」——

俺の深層心理……固有結界をスペカにしたものを使動させる。  
この中では相手に権利はない。

ただ……『剥奪』されるのみ。  
こっちでいう耐久スペルだな。

「な！？俺のスペカが！！」

「あ……死ぬ覚悟はできたか？」

「オイオイ、冗談きついぜ……あいつから手を出してきたんだぜ  
？なら正当防衛じゃねえか！」

ああ……確かにそうだつたが、だがな？  
どこかのライダーの台詞を借りるなら、

「……にいたお前が悪い、俺に田を付けられるような事をしたお前  
が悪い」

「……理不尽だなあオイ」

「よく言われるよ」

も「うるさい」と言われ慣れたよ。

「でもまあ・・・テメエは『ここ』で死ぬんだから関係ねえがなあ・・・」

そういうながらやつは蹴りを放ってきた。

「ちつ・・・ちつの言つてた通りか」

「はあ？別に黒幕がいるみたいだな」

「喋りすぎたか・・・ここは引くべきか？」

「逃がすとでも？」

逃げる権利を『剥奪』する。

これで逃げる事はできない。

「逃げられない・・・何をした！」

「『剥奪』しただけだ、別に不思議ではあるまい」

「テメエ・・・それがどんだけ難しいと思つてやがんだ！」

できるのだから使う、手段は多い方がいい、ただそれだけだ。

「ちつ・・・ならテメエを殺してから戻るか」

そういうながらナイフを構える。  
なら、

「それなら俺も・・・お前を殺す」

クロスをフルドライブで開放する。  
ただしモードは2nd。

「ひやははははははははー！テメエじゃ俺を殺せねえよー！その程度の力じゃなあー！」

「そつか・・・ならこれくらいか？クロス・・・リミッター 20%

開放

『了解、20%開放』

星との同化を強化する。

さつきまでは2%だったため、いきなり全開で戦うわけにはいかなかつた。

日頃は基本2%～10%で行動しているからな。

『こり押しで勝つたって嬉しくないからな。

さて、

「覚悟は出来るだろ？」「この蛇野郎が！」

さらに開放レベルを20から50に変える。  
さらに片方の武器を大剣に変える。

「それでも俺が勝つんだよおー！」

「ハツー！ここで貴様は死ぬんだよ・・・誰の手でもなく俺の手でー！」

——インフェルノ・ディバイダー——

相手を思いつきり打ち上げる。

「ぐつー！テメエー！」

「そらー！次はコレだー！」

——デッドスパイカー——

相手に獣状のオーラをぶつける。

「ガツ！ ゆるさねエ！ 許さねえぞ！ テメエ！！」

「誰がお前の許しをこなしかよーーー！」

—フェンリル—

片方の銃をでかく変化させ、相手に向かつて連射する。

「いつまでもやられてたまるかああああーー！」

——蛇翼崩天刃——

思いつきり蹴り上げを放つてくる。

七  
過によるしかなしが

「ハア・ハア・クソツ！ クソツ！」  
拘束機開閉  
放・次元虚数方陣展開！ コード＝  
ソウル・オブ・ランゲージ  
S・O・L・碧の魔道書

碧の魔道書だと！？

なんでやつが・・・いや、姿があれな時点でその可能性があつたな。  
支那語でいふ。

なり・・・、

「たく・・・なんでもまためえみたいなやつと戦わねえといけねえんだよ・・・だが、見せてやるよ・・・蒼の力を！」

右手が変化する。

久々だな・・・コレ使うの。

「第666拘束機関開放、虚数方陣展開！・・・蒼の魔道書起動！」

・・いくぞ！この蛇野郎が！」

蒼の魔道書を起動させ、相手に向かう・・・目の前の敵を・・・俺  
の護りたいモノに危害を加えるモノを排除するために・・・。

## 第21話 奇跡を起させる条件は・・・諦めない事だ（後書き）

後書き「一ナーナー！」

龍「大丈夫なのか？」

ナ「おや、龍斗が心配するとは珍しい」

確かにそうだね。

龍「まあ・・・状態が状態だしな、うつ病は洒落にならん」

ハハハ、大丈夫だよ。

今は少しだけ落ち着いてるし、だから執筆してるんだし。

龍「お前の場合は執筆して気を紛らわせてるだろ」

ナ、ナンノコトカナー。

ナ「はあ・・・さて、感謝「一ナーナー」です」

ケルベルス様、メガネ様、七夜士郎様、夜神様、感想ありがとうございます！」

龍「次は後編、オリジナルの異変の導入編だな、といつてもまだ異変は始まらないが」

ナ「オリジナルの異変が終わる前にアンケするそうです」

まあ簡単なやつですけどね。

龍「内容はその時発表する、気長に待っててくれ」

ナ「まあ次の更新は急ぐそうです、今まで休んでたので」

頑張ります！

龍「そのまえにネギまだがな」

ソウダッター！

龍「・・・ではな」

無理やり〆た！？

ナ「では」

## 第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

今回も遅くなつた上にこの駄文……絶望した！文才のなさに絶望した！！

・・・失礼、取り乱しました。

というよりこのサブタイトルの台詞知つてる人いるんですかね？  
周りの人は知らないんですね・・・マイナーなのかな？

## 第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

蒼の魔道書を起動させたのはいいが……  
プレイブル

「さて……どうするかな」  
「何言ってやがんだ？」

やつがもし誰かとリンクしてやがつたら殺すのに直死が必要になる  
んだが……調べるか。

——妖精眼発動——  
グラム・サイト

相手の状態を見る。

ふむ、どうやらリンクはないみたいだ。  
これなら十分潰せる。

「クロス、モード1nd」

『了解』

ナイフに変え、構える。

「グダグダうっせえぞー! とつととおっ死ねやー!」

そう言いながら相手が蹴りを放つ。  
これくらいなら……

「これで十分か」

こちらも蹴りを放つ。

「がつ！」

「は？」

何故この程度で相手が吹き飛んだ？ 20%だぞ？

『（マスターの20%は幽香さんの50倍以上の力がありますし）』

もう・・・まあそれは後で考えよう。

今は目の前の敵に集中しよう。

「がつ！ 畜生がああああああああ！ 死ね死ね死ね死ね死ね死ね死  
ね死ね死ね死ね死ね死ね死んじまえ！！」

——千魂冥焰——

相手のアーチエネミー・・・まあ簡単に言えば武器で俺に攻撃して  
きた。

まあ大きさはでかいな。

見た目も蛇だし。

けどな・・・

「その程度で俺をじうにかができると思うか？」

——虚空陣奥義・悪滅——

前に陣を出し、そこから攻撃に移る。

目の前が真っ黒になるほどに斬撃で埋め尽くされる。

「ガハッ！」

「む・・・やはしふと」、ビンガのGみたいだな

「テメH・・・」

劣化以下だな。

ハザマはもつと強いはずだからな。

少なくとも俺みたいなやつに禄に攻撃できず、負けるようなやつではないはずだ。

「さて・・・もういいか?」

「がつ・・何がだ」

「テメHの茶番に付き合つのがだよ」

「何だと?」

「お前は下つ端だろ?情報も大して得れなかつたしな」

「イツはたぶん最弱なんだ」

「だからセツと終わらせる・・・覚悟はできたか?答えは聞いてないが」

「テメH・・馬鹿にすんじゃねえ!..」

「フHローチエ荒々しく!」

水が下から湧き上がる。

「なつ!?」

「グラツイオーソ優雅に!」

その水が凍る。

「ば・・馬鹿な!?」

「終わりだ・・・グランドフィナーレ!」

その氷が砕けた。

「これで終わつたか?」

『はい、魔力反応、生命反応共に消滅、完全沈黙完了です』

「そりか

さて、じゃあ死体処理してから帰るか。  
そり思つていると、

『マスター!』

「どうした?」

『魔力反応です!』

『やられてしまつましたか・・・まあ別に構わないのですが

「誰だ?」

『その質問には答えかねますが・・・一応名乗るならルイとでも』

ルイか。

「で?お前の目的は何だ?」

『ただの塵回収です、あなたと戦闘を行つ氣はありません』

『逃がすとでも?』

『いえ、なのでさよならです』

『なつ!?』

もう準備してやがつた!

「クロス!」

『すいません・・・見失いました』

「そりか・・・」

魔力反応がなかつた・・・レアスキルか何かかな?  
だが今はそれはおいといで、

「戻ろ」

『 そうですね』

じゃないとあいつらがつるや。

「アリスには礼を言わなきやな」

『 そうですね、ついでに何か頼み事でも聞いてみてはどうぞ』

『 それはいいな、なら実行しよう』

そう思いながら一歩アリスの家に向かつた。

「で、ここに来たの?」

「ああ、で、何か頼みはあるか?俺のできる限りの事をしよう」

「・・・考えておくわ、今はゆっくりお茶でも飲みましょ」

「そうだな」

その後、人形の話や、ほかの魔法について話し合い、盛り上がつた。  
何故かずっと上に上海がいたがな。

『 (すごく懐かれたようですね・・・魅了A+くらいあるんじゃないでしょうか)』

「何かいつたか?クロス」

『 いえ何も』

何故か失礼なことを考えられてた気がした。

「さて、もうそろそろ戻るよ」

「やっぱ、次は何時来るのかしら?」

「やっぱだな……今作ってる人形ができたら言つてくれ、その時に来るとしよう」

「わかったわ（すぐにでも完成させないと…）」

何故かやる気が上がつてゐる?

『（マスター……いつその事刺されたり……と思うのは何故でしょうか……刺されたとしても気づかないのじょうが）』  
「?.じゃあな、また会おう」  
「ええ、また会いましょう」

アリスの家を出て、神社に戻つた。

「で? 何処に行つてたのかしら?」  
「そうね……それは気になるわ」  
「早く正直に言つた方が身のためなんだぜ?」  
「……（御免なさい、言い辛かつたのよ）」

帰つたら修羅が三人いた。

まあ理由を言へば許してもらえたと思ひ、話したが、

「そう、アリスの家に行つてたのね?（後でアリスとは） HA NA SHIしないとね）」

「そうか……アリスの家に行つてたのか（アリスもライバルか……やれやれなんだぜ）」  
「……（魔女にナイフは効くかしら）」  
「あ……（メイドと靈夢の考えが一番物騒ね）」

今すぐアリスに逃げるといいたくなつたのは何故なんだろうか。

『（アリスさん！超逃げて！！）』

その後、何処からか悲鳴が聞こえたような気がした。

第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

後書き「一ナーーー！」

龍「遅い」

ナ「速さが足りないです」

うん、”もつともで。

龍「まあ・・・仕方ないな、お前だし」

ナ「そうですね、この作者ですし」

お前ら2人そろって酷いな。

龍「知るか」

ナ「まったくです」

○○○

龍「さて、感謝「一ナー」

ナ「メガネ様、ケルベルス様、雨季様、夜神様、感想ありがとうございます」

次回こそ早めに投稿できるよう頑張りますーーー！

龍「まあまだ日常編だ、もしかしたら番外編で何か書くかもな

ナ「あまつ期待せずゆっくり待つてください」

もしかしたら後書きにゲストを呼ぶよつこなるかもですーまあ・・・  
希望があればですがね！

龍「ではな

ナ「では

ではではー

## 第23話 僕たちは生きていこむだけで幸せなんだ（前書き）

どうもー最近はどんどん更新スピードが遅くなる一方で・・・すいません（汗）

月姫の漫画は名作。異論はないと思いたいですね。  
さて、もう少ししたら異変です。

その異変が永夜抄なのかオリジナルの異変なのかは・・・ひとつ御期待？

## 第23話 僕たちは生きているだけで幸せなんだ

あの襲撃から数日。

今は紅魔館に来ている。

まあ勿論目的は執事の仕事をするためにきたんだがな。

「さて、今日は何をすればいいのやら」

『今日は図書館の掃除、昼食、夕食の準備、フランさんの遊び相手  
だったと記憶しておりますが?』

「そうだったか」

大変だろうが・・・咲夜に比べたらマシか。

アイツ・・・この倍以上の仕事をこなしているからな。

「まずは図書館からだな」

『そうですね』

今日は本の整理だけだったか?なら楽なんだが。

『それで終わればいいですが・・・(マスターはいらないこといろいろ  
フラグを建てますからね・・・しかも勝手に回収しちゃうといふた  
ちの悪や)』

何故だらつか・・・そこはかとなく馬鹿にされた気がする。

「じゃあ移動するぞ」

『了解です』

約束の時間まで残り少ない・・・時間止めて進むか。

そう思いながら、時を止め、向かつた。

「で？ 今日は本の整理だけで構わないか？」

「少し聞きたい事があるのだけど・・・いいかしらへ。」

「なんだ？ 別に構わないが」

「うううと、パチュリーは、

「うう、なら聞かせてもらひうわ・・・魔理沙に薬の作り方を教えたのは貴方よね？」

「ああ、聞かれたから答えたまでだ」

うううと、肩を少し震わせ、

「うう・・・あの薬・・・私も作りとしてたから参考になつて助かつたわ・・・そこは感謝するとして、魔理沙の惚け話でやたらと貴方の事を話されるのだけど、薬の話の後に

「は？」

惚け話ってなんだ？

どんな話だ？

『（リアルでいってるんですかね？なら・・・哀れすぎます）』

「・・・そう（こうこう）うつだつたわね・・・はあ・・・何で龍斗を好きになつたのかしら」

『（店の中には惚れたら負けって言葉があるんですよ）』

「・・・（まじめその通りね）」

「本はこれだけか？」

「ええ」

何故か一人？が話し込んでいるみたいだつたから本の整理をしていった。

うん。相変わらず力オスだな。

本の題名。

－混沌・これが本当の混沌だ！初級編－

－これで君も厨二病！厨二病の全て・・・上級者編－

－黒魔術版ぐそみそテクニック・これでどんなノンケでもイチコロ

！－

ナニコレ怖い。

特に最後のやつ。

絶対に読みたくない。

「どうかした？」

「いや・・・こここの本は別の意味ですごいな」

「そう？まあ・・・普通の人は読めないでしょうね」

普通じゃなくても読みたくないんだが？

「じゃあ終わりだな、次は昼食か」

「そう、楽しみにしてるわ」

「なら頑張らないとな」

今日は何を作ろうか。

そう思いながら厨房に急いだ。

「で、悩んだ結果がコレ？」

「ああ、何かいけなかつたか？」

「いや・・・料理 자체はすぐ美味しいからいいのだけれど・・・

この旗とか飲み物がオレンジジュースとか完全に喧嘩売つてるわよ

卷之三

「確實に『ソレ』で外の世界で一つ『お子様』ワンド。上ね!?」

「そうだが……何か？」

そう言いながら、リーリアはグングールを投げてきた。

「おおばーば

「」が「」を「」に替えたのはいつ頃からですか？

「当たつたら痛い」

「痛いみたいにしてるから当然でしょ！――」

(普通の人なら即死ですよ) 『

「アラノは喜<sup>レ</sup>る。」食<sup>シ</sup>べ。」う<sup>ニ</sup>。

「二のオムライスおー」

すゞく喜んでるぞ？旗も好評だし。

「私は普通のオムライスなら食べるわよー！」の如何にも子供が食べますみたいのが気に入らないの！」

食欲が少ない人とか。

「どうか前世では女友達とファミレスとか行くと毎回お子様ランチ食べてたな。

何でだろうか？理由を聞いたら顔を紅くしながら「ちょ、ちょっと

お腹すいてなくて・・・／＼とかいつてたしな。

『（鈍感は前世からでしたか・・・まあ余裕がなくなる前からみた  
いですが）』

「お姉様」

「何！？今忙しいの！用件は早く！」

「つるせこよ？静かにしよう？食事中だよ？」

「お嬢様・・・お静かに、お食事中です」

「なつ！？」

いや、常識だろ？

「あなたに常識を言われるなんて・・・。」

「何故落ち込む」

『マスターが非常識の塊だからでしょ』

「後で○ H A N A S H I な？」

『・・・スマセンドテシタ』

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

『ウソダンドコドーン！』

「はあ・・・まあいいわ、今回は許すけど次はないわよ？」

「怖い怖い、まあ気をつけとしよう」

「・・・腑に落ちないけどまあいいわ、後でフランの相手よろしく

ね

「ああ、遊び相手くらいい楽にこなしてみせるわ

「わーい！」

フランが抱きついてきた。

よほど嬉しいらしい。

嬉しそうな顔を見ているところちらも嬉しくなってくる。  
とこうかレミリアはクロスの喋りはスルーなのな。

「じゃあ今日も弾幕、」  
「だな？」

「うん！今日こそ勝つよー！」

「そう簡単に負けてはやれないな、今日も全力で相手しよう！」

「じゃあ行くよー！」

——禁忌「フォーオブカインド」——

「いきなりか」

「うん！お兄様は簡単に壊れないもん！全力でいっても大丈夫だよね？」

「ああ、本当に兄妹みたいだな・・・兄妹ってのは遠慮しないもんだ、全力で來い、その全てを受け入れよ！」

「「「「じゃあ行くよー！ー！」」」

その後はフランが全てのスペカを、俺は三枚のスペカで対抗し、一時間に及ぶ戦闘は終了した。

勿論俺の勝ちで。

まだ負けてやる訳にはいかないからな・・・兄として負ける訳にはいかないからな。

実はレミリア達が居る状態で始めたため、巻き込まれたやつが4人いて、レミリアが途中で乱入してきたのは・・・気にしない方向で。咲夜が血の海（鼻血）に沈んでたりしたのもスルーで。唯一まともだったのは案外小悪魔なのかも知れない。

## 第23話 僕たちは生きているだけで幸せなんだ（後書き）

後書き「一ナーナー！」

龍「遅すぎるんだよー。」（蹴り）

ぐはっ！…すいませ…ん。

ナ「まつたくです、もう少し早くできないのでしょうか？」

う・・これが今の限界です。

龍「なら精進あるのみだな

ナ「キリキリ働きなさい」

ひでえ・・・精進あるのみなのは認めるけど。

龍「当然だ、さて・・・感謝コーナー」

ナ「Jām様、夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます」

次回がその次くらいで異変に入ります。

一応一パターン考えていますが、多分その場のノリになると思います。

龍「駄目人間め

褒めるなよ。

ナ「駄目ですね・・・手遅れです」

で、では！次回も頑張りますのでゆっくり待っててください！

龍「ではな

ナ「では」

## 第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない（前書き）

今回から異変です。

結果的にオリジナルの異変はこの異変に少し導入する感じになりそうです。

今回も駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない

最近は妙に月が満月続きだ。  
どうやら異変らしい。

靈夢は、

「丹見酒に飽きたわね」

とかいつてたからもうそろそろ動くかね?  
そういうばどじゅやら今回は俺は咲夜とレミコアの2人と一緒に行く  
ことになった。  
なんでもじょんけんで決めたのだとか。  
・・・そんなに嫌か。

『（駄目です）このマスター・・・早く何とかしないと…』

ん?何故かバカにされた気がする。

（気のせいですよ、早く向かいましょう・・・怒られますよ?）

それもそうだな。

「さて、今回の装備はこれで大丈夫かな?」

『寧ろ多すぎでしょうね、スペルカードを50枚も持っていく必要  
はないですね?』

「何があるか分からんからな」

（確実に転生者用だよね、まあ・・・持つてて損はないだろうナビ）  
（こざとなれば俺達に任せな・・・全員潰してやンよオ）

心強い事で。

そう思いながらも集合場所に向かつた。  
遅れるといひやがれやつだ。

「遅いわよ！」

「む」

「5分前行動ですよ、お嬢様」

「私達より早く来なさい」

「無茶言つなよ・・・集合時間の一時間前とか無理だからな？まだ  
俺寝てたからな？」

「文句は受け付けないわ！」

「酷いなオイ」

びこの暴君だ。

「ああ～さつと進むぞ、じゃないと夜を終わらせられないだろ？  
咲夜が原因でも月を何とかしたら戻すんだろう？」

「え、ええ・・・わかつたのね」

「当たり前だ、同じ能力を持つて居るのなら余計にな

時を操れるなら造作もないだろ！」

「さすがに満月ばかりだと飽きるのよ、いや、満月の方が嬉しいの  
だけど」

「だらうな」

俺も満月の方が力が出るからな。

『（煙は今のマスターはおそらく最大で90%くらいまで出せやう

ですねって事ですねわかります)』

「ううつてとか・・・これでも全力を出せないんだな。  
早く同化を終わらせないとな。」

「さて、行くわよ」

「畏まりました、お嬢様」

「・・・あなたが言つと違和感だらけなような違和感がないような・  
・・微妙ね」

「そうですね、龍斗には敬語は命がないのでは?と思つてたのです  
が」

「酷いな」

『事實では?』

「よし、少し・・・頭冷やそつか

『魔王!?』

「どこからか「魔王じやないの!-?」とか聞こえたけど・・・氣のせ  
いだな。

「何処に向かうかは決まつてるのか?」

「いえ、適当に・・・ですかね?」

「ええ、運命に任せれば大丈夫よ」

「ジー」

「だ、大丈夫に決まつてんでしょう!-!-」

「そうか」

「そうよ!-!-」

ずっと見てたら慌てたな。

まあ咲夜が鼻から忠誠心をたらしているが・・・スルーでOKだな。

「で、さっきの虫はスルーか?」

「スルーでいいかと」

「何故?」

「ろくな事になりません……早く進みましょ、出てこなこうち  
に」

「出てこなにうちにとか言つと出でぐるのよー」

やつはマジでてきたな。

(まるでG・・・)

(ストップだア・・・それ以上は言つな)

「ああ、現れたわ・・・そのお嬢様を渡して貰おうかしらー。」

「イツは本氣で言つてるんだうつか?」

「現れたら・・・虫が可哀相でしょ? 五分の虫にも一分の魂でし  
たつけ?」

「ハ割減ね(だな)」

「もしかして・・・物騒な話?」

そんなもの決まつてるだろ?

「「いえ(いや)、殺生な話」」

「良いのよ、私は人間以外には興味が無いから」

「興味が無いから心配なのですよ、人間なら食料で済むかも知れ  
ないけど、それ以下だと・・・はあ、無慈悲にも程があります」

「ひええ」

そういう意味なのか?

まあ

「そっちがその気なら俺もそれ相応の報いを貰えよつ」（ニヤニ）  
「ひい！？」

なら・・・、む？今思えば幽香と一緒に相手してたやつじやないか。

「遠慮はこらないな?」（超S）

「そのようですね」（隠れS）

「え・えっと・・・お邪魔しました!」

そう言いながら奴は逃げていく。

その時の状態は間違いなく見せられないよ！ 状態だったといえよう。  
え？ いつも通り？ ・ ・ ・ いや、そんなことは無いだろ。

「さて、十分いじ・・相手したから・・・満足しちだろ?」「は、ハイツ! も、もうしません!」(ガクブル)

二じひたひなてべひリテひまひ

「さあ、先に進もうか」

「そうね、時間も結構使ってしまったことだし」

「お嬢様もお楽しみでしたよ？」

「そ、そんな事はないわ」

「ですか」

絶対嘘だな。

なんせ一緒にアイツをいじ・・構つてる時の顔がすごい笑顔だったからな。

「とりあえずは先に進むか、レミリアもそれでいいよな？」

「ええ、早く終わらせて帰りたいもの」

「そうですね」

俺達はアイツリグルを放置して先に進んだ。

第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない（後書き）

後書き「コーナー！！

龍「遅い」

ナ「まつたくです」

仕方ないね！これが俺だもの！

龍「・・・」スツ

ナ「まだですよ、まだ攻撃には早いです、まずは感謝コーナーをやつてからです」

龍「・・・そうだな」

何それ怖い。

龍「じゃあ感謝コーナーだ」

七夜士郎様、夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます！

龍「さて、これでいいよな？」

ナ「ええ、全力でどうぞ」

ちよつ！？

龍「後、」の異変（永夜抄）の途中でオリジナルの組織が出る、それが今回の敵だ」

ナ「まだまだ穴だらけですが、頑張らせるのでゆっくりお待ち下さい」

に、逃げなかつたらやられる…？」

龍「わあ…・・・覚悟ハ出来タカ？」

ナ「逃げ道は無いですよ～否定しておこたので」

わ、わすがあつとあらゐるものを見定（見定）する程度の能力…・  
チートあれぬゼー！」

龍「じゃあな、闇魔にあつたうみじへ言つてこでくれ」

OK! 映姫様に会つてくる!

ナ「ポジティブですね」

龍「じゃあな」（円落し+烈メイオウ攻撃）

で、では…また次回（蒸発

龍「ではな」

ナ「では」

## 第25話 お前が死んでも何も変わらない、だが、お前が生きて、変わるもの

今回はオリジナルの異変の導入編です。

といつてもまだオリジナルの異変は始まりません。

少なくとも完全に入るには非想天の次くらいを予定しています。

といつてもあくまで予定ですが（汗）

では！今回も楽しんでいただけたら幸いです。

第25話 お前が死んでも何も変わらない、だが、お前が生きて、変わるもの

リグルをいじ・・倒して先に進んだんだが・・・。

「ふむ」

「どうかした？ 龍斗」

「いや、少し忘れ物をしたみたいだ、レミニアと咲夜は先に進んでくれ、すぐに追いつく」

「・・・わかったわ、すぐに追いつきなさい」

「了解だ」

まあ忘れ物なんでものはないんだが。

ただ・・・ずっとこっちを見学してこるやつは挨拶でもしちゃつと思つただけだしな。

「さて、ここまで来れば大丈夫だらう・・・出て來い」

「おや、やはり隠れるのは苦手ですねえ」

「お前のせいではねた」

「おやおや、私のせいですか？ あなたも隠れるのは得意ではないでしょうに」

「それでもお前よりは自信がある」

「こつら・・・仲間割れか？」

「はあ～、別にどうでもいいでしょ、今は田の前の獲物を片付けてますよ」

「勿論」

「お前らの名前は聞かない、でも・・・お前らは俺の敵だな？」

クロスをナイフに変え、構える。

「ええ、その通りです、本来は見学だけですんだのですがねえ」

「お前の本気を見て来い……だそうだ、そのためなら手段は問わないだそうだ」

「……もし俺がお前らの誘いに乗らずにあのまま進んでいたら？」

「あの2人には仲良く死んでもらつてましたねえ、それくらいないと本気が見れなさそうですし」

「は？」

「イツは今何て言った？』

「だからですねえ、貴方の大切な人を殺す……ただそれだけですよ・・・うわっと！？」

「ちっ」

「舌打ちとは酷いですねえ・・・ああ、護れなくなるのは怖いですよねえ、貴方のひとつだけの信念なんですから」

「黙れ」

「いやいや、貴方は強い、それも本来ならイレギュラーなんでものに収まるはずの無いほどの力を持つていますし・・・でもその程度では私たちは倒せませんし殺せませんよ？」

やつはそう言いながら余裕の笑みを浮かべる。

どうやらそれだけの自信を持つに値するほどの力を持っているみたいだな。

「早く殺るぞ・・・時間が勿体無い、こんな雑魚に時間は・・・いらない」

「そうですねえ・・・まさかここまで弱いとは思いませんでしたし・・早く終わらせましょつ

片方は刀、片方は銃を構えた。

どうやら片方は近距離、片方は中距離及び遠距離で戦うみたいだな。  
まあそんな事はどうでもいい。

今は、

「田の前の敵を斬滅するだけだ」「貴方にできますかねえ！！」

やつが無造作に刀を振り回してきた。  
俺はそれを避け、

——裏無極一式・蓮華——

一閃に見える斬撃を放つ。

「その程度で当たるとでも？」

「馬鹿か？」

「なつ！？」

一回の斬撃に見えて十五回の斬撃だ、これがこの技の特徴。  
最大五十回までいける。

「やれやれ、小細工がお上手で」

「どけ」

「くつ！」

もう一人のやつが銃で援護していく。  
どうやらあの銃は某魔術師殺しと同じやつみたいだな。  
当たると瀕死になりそうだ。

「終わりだ」

「残念、これで終わってたら生き残れないよ」

空想具現化によつて魔力をまつたく使わずに、同じ概念をぶつけ、相殺した。

「次はこつちだ」

——裏無極三式・白夜——

物量作戦に出たかのような圧倒的量の斬撃を放つ。さすがに避けきれないのか、相手にダメージがいく。

「つづ……どうやらまだ本気を出さないようですねえ……どうします？大切な人を片っ端から殺しましょうか？」

「……面倒だから皆殺し」

「おお、それはいいですねえ……それなら本気を見れそうだ」

皆殺し？人里のやつらもか？あの無関係な人達までもが殺されるのか？

「クロス……固有結界発動、詠唱破棄、『無限の絶望』発動」  
『……了解です』

——無限の絶望——

周りが殆ど真っ暗になり、少しばかりの希望といわんばかりの光があるだけの世界が現れた。

「なるほど……」これが全てを剥奪する世界ですか……楽しめそうですねえ」

「楽しむ必要は無い……早く殺す」

「了解ですよ」

どうやら能力はばれてるらしい。

だが、

「剥奪からは逃げられない……そうだろ？」「…」

「いえいえ、能力は剥奪できなにようにしていいので大丈夫ですよ」

「ほう？」

「要はこの結界は無駄」

まあ対策はしてくるか。  
だがな？

だがな？

「能力だけしか底わなかつた自身の愚かさを呪え……剥奪対象『生』『死』」

「なつ！？ガツ！！」

「ば・・馬鹿な！その能力は生命に直接影響を及ぼされないはず！」  
「勝手な言い掛けだな、誰が言つた？俺はあらゆるものを『剥奪』

できるといったはずなんだがな？」

「な・・に？」

「今の状態はわかるか？今の状態は生きるという事と死ぬという事を奪つた、よつて貴様らは生きる事も死ぬ事もできなくなつた訳だ」

「人間にそんな事ができるはずが……」

「残念だつたなア、俺は人間じゃねエンだ」

吸血鬼なんだよな。

「さア・・・・覚悟は出来たか?」

俺の大切なモノ達に手を出そうとしたんだ。  
死ぬ覚悟くらいでできるよな?

「くつーー!こは・・逃げるしかないようですねえ・・・ガハッ!」  
「そう・・だな、今の俺達では・・・勝てない、逃げるしか・・・  
ないな・・ガハッ!ゴフッ!」

普通の人間ならもう廃人になつていいレベルなんだが・・・まあこ  
いつらにはこの程度では無理か。

「逃がすわけないだろ?剥奪対象追加、『逃走』を剥奪」

相手から逃げるという概念を剥奪する。  
これでやつらは逃げたくても逃げる事が出来ない。  
そして、

「最後に何か言つ事は?」  
「くつ・・・ないね、そんなもの・・・グッ!」  
「そうですねえ・・・精々周りに気をつける事ですね、我々の仲間  
はいくらでもいますよ」  
「そうか・・・じゃあな、永遠に苦しみ続ける」

——裏無極極式・深淵——

斬撃に固有結界の概念を付属させ、相手に放つ。  
すると、相手に当たつた後、相手を固有結界内部に閉じめる。  
まあ簡単に言えば白レンのアーケドライブもどきだな。

「クロス、敵の反応は？」

『結界内部にあります』

「やうか・・・結界を一時的に排除、ただし内部の状態を永遠に保

存

『了解です』

「ふう・・・」

これでやがては永遠に呪しみ続ける事になつたな。  
さて、

「時間をかけ過ぎた、急いでレミリア達に合流しよう」

『レミリアさんはカンカンに怒つてるでしょ？』

「呪つな・・・」

あいつらこま絶対に手を出させない・・・俺が護ると誓つたんだ、  
ほかの誰でもなく、自分自身にて

第25話 お前が死んでも何も変わらない、  
だが、お前が生きて、変わるもの

後書き「一 始まるよおオオオオオオ！」

龍一 今田はいつもよりテンションが高いな

ガンダムEXVSが明日発売！今日予約してきた！！  
後、バイトの面接が明日ある。

龍一なるほどな

うん。アーメBarだつてや。

ナ「なんですか？それ」

コスプレとかして配膳とかチラシ配りとかするらしいよ？  
週2・3くらいで。

龍「・・・大丈夫なのか?」

面接に受からないとどうも。

「そうか、まあ頑張れ」

ナ「さて、感謝コーナーですね」

夜神様、メガネ様、Jami様、感想感謝です！！

龍「次回はもし面接に受かったら遅くなるかもな」

ナ「受かる気がしませんが

悔いの無いよう頑張るさ。

龍「そうか・・・次は遊戯王を更新予定だ、といつてもまだプロロ  
ーグしかないから次で1話目だな」

ナ「遅いですからね」

その後にネギまを更新してこれを更新するので遅くなると思います。

龍「だから気長に待つてくれ、ではな

ナ「では」

ではではー

## 第26話 意味もなく戦いたがる奴など、そりはいない。戦わなきゃ、守れ

遅くなりました！

少しだけ体調不良になつていたのと、感想にて指摘された部分をどのように直すかを悩んでました。

今までのは敢えてそのままにしますが、これからは今まで以上に頑張ります！！

## 第26話 意味もなく戦いたがる奴など、そつはいない。戦わなきや、守れや

その後レミコアと咲夜と合流し、先に進む。またあのようなイレギュラーがある可能性は十分にある……だが今は、

「聞いてるのかしら？ 龍斗」

「の、」機嫌ナナメなお嬢様の機嫌直しだな。

「ああ」

「なら言いなさい、あの時何をしてたの？」

「・・・少し絡まれてね、なるべく平和解決しようとしたら失敗して時間がかかった、いやはや、参ったねども」

間違つてはいない・・・はず。

まあ平和的解決（笑）だが。

「・・・咲夜はどう思うのかしら？」

「・・・嘘はついてないかと、言葉を濁していくだけだ」

「・・・」

鋭い？ な。

まあ・・・間違つてはないか。

「そんな事より先に進むぞ、俺のせいとはいえ遅れているのだからな」

「そうね・・・でも後で聞かせてもらひわよ？」

「・・・ああ、構わないさ、さて・・・先に進むとしよう」

「ええ、進むわよ

俺達は先に進む事にした。

別に目の前に転がってる鳥の妖怪はスルーしたわけじゃないからな。  
違うぞ？絶対にだ！

『言い訳乙』

「後で話しな？」

懲りないやつだ。

『〇〇・・・』

そんなこんなで人里に到着・・・のはずなんだが。

「人里がない？」

「そうですね、まるで『なかつた』かのようです」「よく分かつたな、その通りだ・・・」この人里は『なかつたこと』になつてゐる

「へえ・・・それほど護りたいものもあるのかしら？」「ああ、だがここには何もない、別の場所に向かうといい」「ええそうね・・・とでも言うとでも？」

「それならばこちらもそれ相応の対応をしなければならない」

「へえ・・・私に勝てるとでも？」

「勝てるか勝てないかではない、護らなければならぬ・・・ただそれだけだ」

慧音先生はさすがだね、先生の鏡だ。

でも残念ながら姫様は納得してないみたいだ。

「そ、なら余計に手を出したくなっちゃったわ、咲夜、龍斗、相手してあげなさい」

「はい」

「・・・今回パスで」

「そう、まあいいわ、咲夜一人で十分だし」

「なめられたものだな、一人で十分だと？」

「ええ」

「うわあ・・・はつきり言つたなあ。」

「さて、任せたわよ咲夜」

「はい」

「龍斗にも本来は戦つてもらひつもりだつたんだけど？」

「俺があの人と戦うとでも？」

「そうね、あなたは無駄な戦いは避けるタイプだつたわね」

まあ勝手に相手から寄つてくるから逃げられないがな。

それには戦いたくない。

能力の件もあるが・・・何より護りたいモノの内に入つてゐるからな。

「龍斗」

「ん?」

考え事をしていると、レミリアが喋りかけてきた。

羽根を忙しなく動かしている事から結構呼んでいたらしい。

「咲夜とアーヴィングの弾幕がこっちに流れてくるわ、何とかしなさい」

——幻符「殺人ドール」——

咲夜がスペルカードを発動させる。

咲夜の周囲にナイフが浮かび、慧音に襲い掛かる。

「くつ！」

慧音はひたすら避けている・・・が、さすがに避けきれなくなつたのか、スペルカードを使うみたいだ。

——国符「三種の神器 剣」——

慧音は後ろに退きながら弾幕を張り続ける。  
使い魔が複数出現し、追い討ちとばかりに楔みたいな弾を咲夜に向けて放たれる。

「なあ

「何よ」

「咲夜と慧音の弾幕はまったくこっちに来ていない・・・それなのに迎撃を頼むのか？」

「ええ、早く向かわなければならぬでしょ？」

「・・・だが」

「甘えで欲しいわね、今回はアイツは敵よ？敵に容赦してるとうじや異変なんて解決できるはずがないわ」

レミリアが言いたい事は分かる。

要是切り替えると。

今の慧音は俺達の敵。

敵ならば退けなければならない。

・・・はあ、殺す訳ではないから・・・大丈夫だよな？  
いざとなれば土下座しても謝罪するか。

『マスター、行動に移すなり今ですよ』

「そうだな」

「頼むわよ」

「ああ」

こちらも早期解決が望ましいからな。  
仕方ないとはいわない方がいいか。

「慧音」

「何だ！？今君と話している余裕はないのだが！？」

慧音は咲夜から放たれるナイフ型の弾幕を必死に避けている。  
俺が介入しなくとももうすぐ終わりそうだ。

でもそれじゃあ納得しないだろうな・・・ヒリリアが。

「はあ・・・慧音、最初に言つておく」

「何だ！？」

「すまない・・・後でいくらでも叱りを受けよう、頭突きだつて受  
ける・・・だから、眠れ」

そう言いながら俺はスペルカードを使う。

——幻符「ナイトメア・ワールド」——

外見は普通の紫と紅の弾幕に見えるが、自身の能力『空想を具現化  
する程度の能力』によって、当たると急激な睡魔に襲われるという  
性質を附加させている。

これに当たればどんなやつでも眠りてしまつ弾幕だ。

「普通の弾幕？いや・・・龍斗が使ったのならば普通ではないはず

だ

何その信用方法。

俺だと何もかもが普通ではないのか？

『あながち間違つてませんけどね』

「握りつぶしてやるつか」

『スマセンデシタ』

「くつ…この程度の弾幕…！」

慧音は必死に弾幕を避けている。

だがこれはさつきの咲夜のスペル、幻符「殺人ドール」よりも範囲が広い。

避けきれないはずだ。

「避けきれない…・・・ならば…」

そう言いながら慧音は次のスペルカードを取り出した。

――「無何有浄化」――

！？原作では条件を満たさないと出てこないスペルか！

スペルが発動された瞬間、かなりでかめの弾が大量に出現し、こちらの弾幕を消しながら向かってくる。

しかも今までの弾幕より速く放たれているため、非常に避けづらい。だが、

「慧音、一つ忠告だ」

「何だ！」

「目に見える弾幕が全てではないぞ？」

「何！？」

俺が発動してスペル、幻符「ナイトメア・ワールド」はむりや言つた効果以外に効果がある。

その効果が見えない事だ。

本命が一切見えなくなるスペルなんだ。

そのため、見えている弾幕ばかりに目が行くと、この本命が避けきれなくなる。

「がつ！？」

「すまない、ゆっくり眠れ……人里には絶対に手は出さないし出させないから」

「・・・後で・・・説教だ」

「ああ、甘んじて受けよつ

最後に慧音は満足そうに眠つた。

「ご苦労様」

「まったくだ・・・咲夜だけで済んだだろ！」

「いえ、私のみではもう少し掛かりました、龍斗のおかげです

「そつか」

えらく自信があるな。

慧音も十分強いはずなんだがな・・・じゃないと人里の護りを任せたりはしないはずだしな。

「それに龍斗が負けるはずないわ！なら龍斗の活躍を見たいじゃない！」

何故かうー　うー　言いながら言われたんだが……」  
「する必

要はあつたのか、カリスマブレイク。  
すでにカリスマ（笑）になつてゐるんだが？

「お嬢様・・・」（ジーー

そして咲夜は何故最近あげたデジカメで録画してゐるんだろうか。  
気のせいいか？そのデジカメにはお嬢様及び龍斗専用とか書かれて  
るんだが？

俺もとられてたのか？

なら後で写真及びビデオを消去しないとな。

そう思いながらもレミリアと咲夜を引きずりながら先に進んだ。

まさかこのデジカメが原因で第1次デジカメ争奪戦が起きるとはま  
つたく思わなかつた。

第26話 意味もなく戦いたがる奴など、そつはいない。戦わなきや、守れわ

後書き「一ナーナー！」

龍「やつそくだが感謝「一ナーナーだ」

ナ「荒井スミス様、ケルベルス様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます」

今回は少し戦闘の際の描写を増やしてみました。  
まだまだ足りないと思うので、これからしつかり試行錯誤していく  
うと思います。  
なので指摘があればどうぞ。

龍「まあこれから精進していくつもりと思つそうだが、やはりこいつも  
人間だからな・・・忘れてそのままの状態が続くようなら指摘して  
やつてくれ」

ナ「次回はネギまもしくは遊戯王の予定です」

なのでこの東方は少し遅くなるかもです。

龍「気長に待つてくれ」

では！－

龍「ではな」

ナ「では」

第27話 聖書にあります『右の手を殴り割れたら

・・・・・

今回も遅くなりすいません！

今回の戦いは前編後編に別れてます！

あ、後、今日中に東方の番外編も投稿予定です！

なのでゆっくり待ってください！！

## 第27話 聖書にいつあります『右のほおを殴られたら

あの慧音との戦いから少し経つた。

今はもう迷いの竹林にいる。

面倒な事ばかり起きている気がするが・・・まだ起きるんだひづな。

「早く終わらせましょう」「じゃないとこの永い夜は終わらないわよ

？」

「せうだな」

まったく・・・まあ仕方ないのかもな。

この月の正体・・・それが分かっていれば尚更。

「さて、次は誰が来るか・・・」

「大抵のやつは貴方達が戦えばいいでしょう、なら安心よ」

「・・・せうだな」

「これはあれか?全て押し付けられるといつオチか?

「咲夜も大変だな」

「いえ、もう慣れましたので」

「何よ・・・最初は大変でしたとでもいいたいのかしら?」

「いえ、そんな事は」

確實に遠回しでもない状態で言つてるよな?

「面倒」とになりそうだ・・・この2人と向かつたのはミスか?」

「のままだとここで少しばかり時間を浪費しそうだ。」

まあ・・・次は誰か想像はできるから、対策でも練つておへか。

「クロス・・・糸をめぐらせておけ」

『了解です、距離は?』

「勿論限界一歩前まで」

『了解です』

クロスに指示を出し、距離200～500mの間に糸をめぐらせる。これで不意打ちは大丈夫だと思いたい。

そう思い、糸を確認していると、

「な、何よコレ・・・」

「む?」

いきなり反応があつたかと思つと、そこには貧乏巫女が。

「貧乏で悪かつたわね・・・最近は貧乏じゃないわよー」

「・・・何故分かった」

「勘よ!」

「さすが巫女・・・勘がさえてる」

「嬉しくはないけどね・・・まさか異変に龍斗が関与してたなんて」「は?」

いや、勘も怖いがその考えも怖いぞ?

まさかとは思うが・・・

「辻斬りみたいな事をしたんじゃないだろうな・・・」

「・・・何よ、ただ目の前の妖怪を片つ端から退治してただけよ」

「・・・」

それを世間一般的に辻斬りと言つんだが……。

「それよりも…」

「む?」

「アンタ達ね! いつまでも夜を続けさせてるのは!」

「…そうね、確かにこの夜は私達がそうしてゐるわ…けど、あの月を見て気づかないのかしら?」

「月?」

まさか…夜が終わらない事が主体の異変だと想つてたのか?  
いや、夜が続くのも異変だが。

「ともかく! この状態を何とかしなさい!」

「ええ、別に構わないわ…今回のは終わればね

「だからこの夜が異変じゃない」

「龍斗、この巫女…本氣でいってるのかしら?」

「さあな、でもまあ…今は先に進むのが優先される

「それもそうね、咲夜」

「はい」

「あの巫女を何とかしなさい、龍斗も手伝ってくれるわ

「オイ」

勝手に決めるな…手伝うが。

(ねえ…僕達もたまには戦いたいんだけど、いいかな?)

む、そういうえば考えたいが、まったく戦つてなかつたな。

(そうだよ、僕達は楽しみにしてたのにさ~、まったく戦わせてく  
れないとんだもん、暇で暇でしちゃうがないよ)

すまんな。ならば今回は譲るわ。喧嘩せず代わってくれ。

(「了解」)、今日は僕だよ、次は大助ね  
(「了解だア・・・まあその次は狂識か狂だがなア」)

結構順番決まってたんだな。

「早く戦つわよ」

「了解だ」

(「わざとく戦えるんだね！樂しみだなあ・・・」)

ほじほじにな。

(「了解了解、分かつてるつて！」)

・・・前回はすげ悲惨だつたぞ？（前の世界では）

(気のせいだつて、加減はしつかりするや)

ならいいが。

まあ・・・靈夢相手なら加減はいらないだろつや。  
寧ろ加減してたら負ける可能性も十分にある。

それくらい俺達は未熟なのだから。

(「じゃあ代わつてくれる？」)

ああ、了解だ。

「さあ・・・始めようか、弾幕<sup>ヒツヅカ</sup>」を

「全力で行くわよ！」

そう言いながら俺は、鏡夜と入れ代わった。  
やりすぎないといいなあ・・・。

> 龍斗Side end <

> 鏡夜Side <

ようやく出でこれた！

そしてつこに戦闘！これがワクワクせずに入れるか？否！断じて否！  
もづ始めっからクライマックスだよ！

「？龍斗じゃない・・・誰かしら」

「うん？よく分かったねえ～今は鏡夜だね、ほかにも結構いるから  
ね、また他の人に会う機会は一杯あるだろ？」「やつ、ならアン  
タが私の相手するの？」

「そうだよ～、いや～楽しみだつたんだ！スペルをせつかく作った  
のに全然戦闘できなかつたんだもん、暇だつたからテンション上が  
るよ～」

「そ、そりゃ

あつ、面倒臭いやつだなあ～って顔だ。

酷いなあ。

別にいいけどね！

「さあ！始めようか！楽しい楽しい弾幕<sup>ヒツヅカ</sup>」を！

「・・・何かが違う気がするんだけど」

「気のせい気のせい！何も間違つてないよ！」

やつぱり勘が鋭いなあ。  
あつそうだ。

「咲夜さんだつけ？」

「はい、何でしちゃうか」

「今日は僕一人で戦つてもいいかな？ストレスがすごいんだよね～」

「お嬢様」

「いいわ、好きにさせなさい」

「了解しました・・・任せましたよ、鏡夜さん」

「うん、了解了解～、必ず勝つてみせるよ」

よし！全力で戦うぞお～。

「クロス、君は休んでてね、僕に使われたくないでしょ？」

『・・・』

「君のマスターは龍斗・・・主人格のみだもんね」

『そうですね、私がマスターだと認識しているのは龍斗といつづぬの  
一人の人間だけです、あなたは身体がマスターでも心が違いますか  
ら』

「だろうね、だから今は休んでて、能力を使えば最悪、武器はいらないから」

『でしおうね・・・では、少し休みます』

そう言いながらクロスはスリープモードに入った。

うん、やつぱり龍斗、主人格は羨ましいなあ・・・こんなに思われてるなんて。

まあまったく気づいてないんだろうけど。

「考え方とは余裕ね！」

おっと、靈夢から御札の形をした弾幕が放たれる。  
そういえば始まつてたね。

さて、まずは・・・

「これはどうかな？」

フラグメント、スパーク速発動。

——ディーンドライブ F・H——  
フォックスハウンド

自らの速度を加速する。

今回はマッハ2だけど、実際は最大マッハ9まで頑張れる。

「はやつー！くつー！」

「ほお、これを防ぐか・・・いやはや、これは楽しくなりそうだね」

ん？口調が違う？いやいや、切り替えて大事だよね。

「くつ・・・龍斗もそつだけど、アンタもそんなに速いなんてね・・・」

「いや、まだまだ速くなるぜ？この程度で驚かれたら心外だね」「アンタ、さつきまでとは別人ね、まさかまた代わったのかしら？」

「いやいや、今は戦闘用に切り替えてるだけだよ、まあ・・・今はこの戦いの事だけ考えていくべきだよ、じゃないと・・・一瞬で終わるからね」

「言つわね・・・」

さて、次はどうするか。

靈夢が放つ弾幕が激しくなつていくなか、僕は次の手を考える。  
まあその間もずっと弾幕を斬撃として放つてゐただけだね。

「スペルカード」

——靈符「無想封印」——

目の前に色とりどりな弾幕が僕に向かつて放たれる。  
避けようとするが、かなり追尾してくる。

・・・確かにこれは追尾性能がかなり高かつたはず・・・なら打ち消すのがいいか。

フラグメント、炎神の息吹発動。

——伝導・炎神の息吹——

炎神の息吹は超分子振動を発生させる能力で、炎もその特性上出せるようになっている。

そのため今回は、地面を振動させ、相手に向かつて地を通して炎を放つ。

あつ、弾幕があまり消えてない・・・仕方ない。

フラグメント、第四波動発動。

——第四波動——

アゲニッショワッタス

炎神の息吹によって発生した、熱エネルギーを吸収し、増幅して放つ。

この時に、熱エネルギーを炎に変えていため、ものすごい熱量になっている。

これで大丈夫だろうけど・・・よくよく考えたらスペルカード使つてない！？

な、ならー。

「スペルカードー。」

——強化「ドラゴンインストール」——

自身をかなり強化する。

え？さつきまでフラグメントだったのに何故急にGG?って言いったいの？

理由は簡単に言つと、使ってみたかっただけなんだ。テヘ

・・・主人公の顔じゃなかつたら自殺ものだね。

そう思いながらも構える。

どうやら靈夢も本気を出すようだし、まだまだ楽しめそうかな。

え！？これ前編なの！？

第27話 聖書に「あります」『右の手を殴り割れたら

後書き「一ナーナー！」

龍「やつそくで悪いが、感謝「一ナーナーだ」

メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます！

龍「今日中に一応クリスマス番外編を投稿予定だ、まつたく書いてないがな」

急いで書きます！睡眠？そんなものはなかつた！

ナ「馬鹿ですね」

言つな！自覚してるから！

ナ「・・・性質の悪い」

龍「まつたくだ」

ひでえな。

龍「まあ次はたぶん遊戯王だ（番外編）その次にネギま（番外編）で最後に東方（番外編）だ、全部クリスマスの話になるからな・・・  
今日中に間に合わせるよ？」

頑張ります！

龍「ではな、次回」

ナ「では」

ではでは!

## 番外編 クリスマス・・・それはリア充がいい思いをし、非リア充が絶望するロ

はい、ぎつぎり間に合いました！

今回は後書きはお休みです。

理由？力尽きたからです。

今回は急いで書いたため、かなり雑です。

それでもよければGO！

番外編 クリスマス・・・それはリア充がいい思いをし、非リア充が絶望するロ

「今日は外の世界で言つクリスマスらしげー」

「いきなりどうした」

魔理沙が神社にやつてきたかと思えばいきなりそんなことを言つて  
きた。

「いやいや、龍斗は夢がないぜークリスマスといえればパーティー！  
つまりは宴会なんだぜ！」

「結局はそこに行き着くんだな」

「当たり前だぜ！」

「つるさいわねえ・・・一体何の用よ」

「おおー靈夢も居たのか、これは好都合だぜ」

「・・・魔理沙、何を考えてるのかしら？」

「うおー？レミリアまでいたのか」

「私がここにいるのが不思議かしら？龍斗のいふどりに私はいる  
わよ？」

「ストーカー？」

「違うわよ！人聞きの悪い事言わないでくれない？私は龍斗の居場  
所をパチエに聞いて、速攻で向かつて、会つてているだけよー」

いや、世間一般ではそれをストーカーというんじゃないかな？

「それをストーカーって言つんだぜ？」

「・・・喧嘩なら買つわよ？」

「上等ー。」

「私も混ぜて～」

「なつー？ふ、フラン？」

「妹まで登場か……1対2はキツイが……いいハンデなんだぜ！」

「やう? なら……簡単に壊レナイデネ?」

あつ、フランが暴走し始めた。

靈夢が思いつきり肩を震わせてるな。

あれはキレる3秒前だな。

「いい加減にしなさい! これ以上暴れるならほかの場所でしなさい! …」

——靈符「無想封印」——

あつ、スペカが思いつきり当たった。

「あややや、大変な事になつてますねえ」

「文か」

「ハイ! 清く正しい射命丸 文です! はい、これが今日の新聞です!」

「・・・俺は頼んでないんだが?」

「いえいえ、お試し版なのでお気楽にどうぞ!」

「こいつの場合は裏があつたりするんだよな。

「まあいい・・・で? 今日はどうした、まさか新聞を届けにきただけではあるまい?」

「(別にそれでも構わないんですけどねえ) 今日はここでクリスマスパーティーなるものを開催すると聞いたので来てみたんですよ、宴会みたいなものらしいので」

「こつもか。

「で？ 河童さんは何故隠れてるんだ？」

「ひゅー！？」

どうやら発明品で隠れてるみたいだな。  
姿を隠せても気配は隠せてないからすぐにわかった。

「い、いや～」の水道の調子を見に来ただけで・・・

「なら隠れて無くてもいいだろうに」

「あはは（いえない・・・龍斗が見えたから恥ずかしくて隠れたなんていえない！」

「あやや、にとつさん、顔が真っ赤ですよ？」（ニヤニヤ）

「・・・ちょっとここちにきてくれるかなあ？」（ガガガ）

「あ、あやや～少しやりすぎましたかねえ？ で、ではーまた会いましょう！ 龍斗さん！」

「待て！」

あれ？ あの2人あんな関係だったか？ まるでどこかのラジオみたいじゃないか。

「ぜえぜえ・・・ですがに・・・あの2人は無理ゲー・・・だぜ」  
(バタツ)

魔理沙がボロボロの状態でこっちにきた。

やりすぎたな？ あいつら・・・あの2人は後で説教だな。

「必要ありません、私がしておきますので」

「映姫か」

まさか閻魔までできることはない。

「はこ、今は小町と共にひらひら宴会をするハリツなので訪れました」

「わうか」

「どうやら宴会は確定らしい。」

「はあ・・・俺が準備するんだろ? なあ」

まあ料理くらいなら別に構わないんだが。

「そ、その・・・よかつたら手伝いますよ?」

「本当か? なら助かる」

「え、ええ、それくらいなら大丈夫でしょう」

「感謝する」

これで少しは楽か。

「あ、あの!」

「ん? 妖夢か」

「は、はい・・・幽々子様が調理を手伝ってきなさい」と

「・・・幽々子も来るのか?」

「はい」

蔵に在庫あつたかなあ・・・最悪星と同化して材料を引きついだす

か。

こんな事に使うことになるとほな。

自分でも吃驚だ。

「さて、映姫と妖夢が手伝ってくれるから楽なんだが

「あら、なりつけのけいひの藍も貸しましょうか?」

「それは助かるが急に出てくるな、驚くだろ?」

「まったくそんな反応が見えないのが悔しいわね」

「慣れた」

「次は別の↙e↖にしようかしら」

まったく・・・紫も変な登場の仕方するなあ。

「紫、貴女・・・」

「あら、幽香じゃない、どうかしたのかしら?」

「私の龍斗に手を出そなうなんて・・・いい度胸してゐるじゃない?」

「貴女の所有物ではないでしょ?」

何故険悪なムードになる。

とこづかいつの間に来てたんだ? 幽香は。

「やつれよ」

女性は『テフオ』で読心術もちなんだろうか。

「さ、さて・・・料理作つてくる、いくぞ! 映姫、妖夢

「は」、分かりました

「つよ、了解です!」

このままここにいるといけない気がしたので、今は料理を作りに向かつ。

おやりへ靈夢と咲夜は手伝つてくれるだらうか? ・・・何とかなるか。

そう思い、俺は台所に向かつた。

そり、向かつたんだが・・・まさかここまで多いとはな。  
全員に回しきれてないんだが？

何故ここまで集まつたんだろうか。

クリスマスとはいえ、じつちでは大して人気という訳ではないだらう。」

「さあ！酒だ酒だああああああ！龍斗も呑みなよ！」

「遠慮しておく、俺は酒に弱いからな」

「何だい何だい！そんなのは龍斗いらしくないよー！氣に呑もうじやないか！」

「はあ・・・俺は萃香と違つて酒を呑むと意識がトブんだよ  
（それを狙つてるんだけどねえ）」

かなり酒を呑めと誘われるな・・・何故だ？  
いや、これは後にして・・・今は、

「おかわり！」

「幽々子様ー？」

新しい料理を作らないと・・・。

結局この日に俺の貯蔵していた材料は大半が消え去つた。  
まさか一瞬でここまで無くなるとはな・・・。

ついでに言つと、後で知つた事なんだが、文の新聞で、クリスマスについて記事が書いてあつたために今回の宴会が行われたんだそうだ。

まさかここまで影響力があるとは・・・まあ暇つぶしに読んだら気づいた・・・という感じだつたみたいだが。

『（ほかにもありますけどね・・・まあ好きな人と共に過ごしたくなるのは女性全員の共通の考え方でしょうしね）』

まあ全員が楽しそうだったからいいか。

その後、まあか紫と幽香、幽々子に襲われるとは思わなかつた。どうやら酒に呑まれたらしく・・・酒を呑んでも呑まれるなよ。

## 第28話 時には諦めの決断も大切だ、たとえその対象が生きる「こと」であつても

遅くなりすいません！

本当はもっと早く投稿する予定だつたんですが・・・。  
後3話から4話くらいで永夜抄編は終わり（予定）です！

なのでしばしお待ちを！

## 第28話 時には諦めの決断も大切だ、たとえその対象が生きる』ことであつても

さて、スペカラシースペカを使ってなかつた上に使つたのが身体能力強化のやつ……もつと格好いいやつ使いたかつたなあ。

「うわあ・・・せっぱり金色になるんだねえ」

「は？ 分からずに使つたの！？」

「いやいや、おおよそは予想がつくけど初めて使つからね、わからぬのは当然だ」

あぶないあぶない、口調が崩れた。

このドラゴンインストールははつきり言つて、身体能力を通常の3倍以上にするつて感じかな？

まあなぜか金色に光つた状態になるのが困りものだけれど、

「じゃあ、続きと行こうか」

「・・・ええ、負けないわよ？」

「少なくともすぐには倒れないだらうへならそれで十分だ」

なーんて負けフラグっぽい事を言つてみたり。

まあ負けず嫌いなどころがあるみたいだからね。負ける訳にはいかないのさー。

「行くわよー」

——靈符「無想封印」——

おなじみの虹のように七色な弾幕が僕を襲う。

誘導性がかなり強く、避けきるのには骨が折れる。

まあ今の強化状態なら大丈夫かもだけど・・・念には念を入れるか。

## 「スペルブレイク」

さつきまでの強化をなくし、次のスペルを用意する。

「一体どういうつもりかしら?..」

「何、こいつするだけぞ」

そう言いながら僕は能力を発動させる。

フラグメント、ポジティブフィードバック・ZERO発動。

――転写「無想封印・凶」――

ポジティブフィードバック・ZEROは、本来はフラグメントという特別な能力のみに作用し、その能力を本来の威力より上の状態で返す（実際は覚える）という能力だけど、今はフラグメントではなく、相手の攻撃を完全に打ち消し、さらに攻撃もできるほどに威力を上げている。

「な、何よコレ!」

「ん？ ただ君のスペルを真似ただけだよ、威力は君のやつより上だけどね」

「インチキ能力ね」

「君に言われたくないかな？」

巫女は基本チートなのかなあ？

まあ今はこの戦いを楽しもう。

それはもう全力で。

「次のスペルは大丈夫かな？」

「え？」

次のスペルを懐から出す。  
まあ次は大丈夫だよね！

——炎符「フレイムワルツ」——

スペルを発動した瞬間に、相手にむかって炎型の弾幕が大量（ほかの人の視点では大量ではすまない）が放たれ、燃え続ける。  
まあ・・・結構簡単に対処できるだろうけどね。

「くつ！鬱陶しいわね！」

「そういう感じに作ったからね」

「ならこうするまでよ」

——靈符「夢想封印 散」——

どうやらダメージよりも回避を選択したみたいだね。  
さつきと同じように見えた弾幕はホーミングしないみたいだからね。  
そのせいか、僕の放つた弾幕は無駄になっちゃった。  
・・・改良が必要だね。

「ふう・・・やつぱり無理だね、さすが靈夢だ」

「・・・これで終わりかしら？」

「いや、まだあるよ・・・これでラストかな？」

もうそろそろお姫様が機嫌を損ねそうだからね。

終わらせよ。

「わへ・・・行くよ?」

——絶符「逆らえぬ運命」——

目の前にうつすらと使い魔（形状は人魂みたいな感じ）が3つ出てくる。

それが6、12、24と増えていく。

「何よ」「・・・」

「弾幕だよ・・・本来の美しさをまるつきり無視して作ったやつだけね」

気がつくとさきまで少なかつた使い魔が100を超えた。

「さあ・・・避けられるかな?」

僕がそう言った瞬間、全ての使い魔から弾幕が放たれる。

「多いわね!?」

「それだけがとりえだしねえ」

それでも使い魔を順調に消していく靈夢。

このままだと負けそうだ。

あくまでこのままだつたらだけど。

「残りも少しだ、頑張れ頑張れ」

「なめるんじゃないわよ!」

## ——神技「八方鬼縛陣」——

目の前に大量の札型の弾幕が撒かれる。その弾幕と僕の弾幕が相殺しあう。

このままじゃあ完全に消されてしまう。けど、

「このスペルの真骨頂はここからだ」「なつ！？」

言葉だけじゃ分からぬから説明すると、よく時間切れ間近になると弾幕が濃くなるやつってあるみたいだけど、そういう感じで、このスペルは時間が迫ると一気に倍以上の弾幕になるんだ。これを作った時、主人格に、これまた面倒なものを・・・つていわれたね。

「数が多いのよ！」「そういふものだからね、このスペルは」

これの対処法は簡単なんだけどね。

倍に増えるまでに数をできるだけ減らせば良い。たつたそれだけ。

何せこのスペルは弾幕が倍になるだけだからね。その倍になる元を減らせばそれだけ数が減るんだよね。まあ・・・もう倍に増えた後だけど。

「くつ！？数がさらに増えるなんて・・・」

「そりそり、避けてみなよ・・・じゃないと終わるぜ？」

まだまだ増えてくよ~。

靈夢が消していくたびに増えていく。

すでに弾幕は避けるところがあるのか疑問に思つゞぎ。  
これでも終わらない時あるんだよねー。

うん、さすが主人公。

「うつーー?」

「ん?」

どつからぬたつみたいだ。  
コレで終わりかな?

「・・・はあ、もういいわよ、私の負けで」  
「えらい素直だな・・・何か裏がありそつて怖いね」  
「・・・異変が解決するならいいわよ、異変は解決するんでしょ?」  
「まあな、今日中に終わらせるさ」

まあ・・・咲夜とレミコアの氣分次第だらうけどね。

「ならいいわ・・・後は任せたわ・・・部屋でのんびりしようかし  
ら」

「お~い?」

「何よ」

「サボるつもりじゃないだろうな?」

「・・・まさか」

「まずはまづち見ておつか」

「こいつ・・・間違いなく炬燵でゆづくつするつもりだ!!

「もういいでしょ、りゅ・・鏡夜」

「はあ~お嬢様がそうこうならいにや、んじや、後は任せとね~」

「ええ、頼んだわよ」

言われなくてもやうするつもりだけだ。

「さて・・・戻るよっ。」

（ああ、さつあと戻れ、氣は済んだらう。）

「うだねー、本当はもつとはつちやけたかつたけど・・・これ以上は間違いなく狂うからね。零崎が完全に出ちゃうから。」

（分かってゐならいこむ）

このままだとここにいる生物全員を殺しきりやうからね。狂気が段々おさえ切れなくなつてゐる感じかな。

「じゃあね、また会おう・・・縁があれば会えるだらうぞ」

そう言いながら僕は主人格に戻る。

・・・次はいつ出れるんだろうねえ？

> 鏡夜 Side end <  
> 龍斗 Side <

はあ・・・みづやく戻ったか。

鏡夜は戦闘狂ではないと思つてたんだがな。それに最近は殺人衝動が強くなつてきてる。自分を傷つけるだけじゃ足りなくなつてきたな。だから転生者共には遠慮せず、区別無く、解体してたのになあ・・・

。

『（マスター・・・完全に墮ちてしまつまで時間はなきそうですね。・・神に渡されたコレを使ひまめにならなければいいんですか・・・）』

「あー！龍斗！行くわよー！」

「了解だ、レミリア・・・咲夜」

「はい？」

「もう少しでたぶん目的地だ・・・氣を抜くなよ？」

「ええ、やちらも」

「勿論だ」

俺は油断できるほど強くなこと。

ならいつでも全力で相手するだけだ。

・・まあ、全力の半分しか出せないのはいただけないがな。

第28話 時には諦めの決断も大切だ、たとえその対象が生れる」とあります

後書き「一ナーナー！」

鏡「遅いよ」

すいません！

ナ「・・・理由を述べなさい」

試験+ほかの作業。

龍「死刑」

ひでえ。

鏡「作者はほつておいて、感謝」「一ナーナー！」

ナ「といつても一人だけですので、

わざわざといこなさ」。

龍「メガネ様、感想感謝する」

次回は鈴仙戦です！

・・・このままいけばですがね！

龍「無計画やえな」

鏡「許してあげてね～・・・僕は許さないけど」

「ちよつ？！」

ナ「では、次回もゆっくりお待ち下さー」

で、ではでは！（逃走）

龍「ではな・・・待て！」（追跡）

鏡「じゃあね～・・・待て～」（追跡）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4434u/>

幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

2012年1月10日23時47分発行